第十八輯・第十號・昭和十年十月一日

（毎月一回一日發行）昭和十年十月一日發行・昭和十年九月二十五日印刷納本・可認物便郵第三種日四十月九年六正大

日本建築協會

茶室建築

日本建築協會



日本相互貯蓄銀行灘支店
弊社製　瀬川式スチールサツシ、スチールドアー納入

製品種目

瀬川式特許スチールサツシ
瀬川式特許スチールドアー
朝日式特許スチールシヤター
瀬川式スチールパーチシヨン
瀬川式特殊高級鋼製建具
並ブロンズドアー及メールシユート
其他一般的建築金物類

朝日建材株式會社大阪支店

大阪市東區高麗橋二丁目九番地(高麗橋野村ビル内)
電話本局(23)局 4714・4715・5226(4)

本　社　東京市麹町區丸ノ内二丁目二番地(丸ノ内ビル内)
電話丸ノ内(23) 679・876

工　場　東京市城東區北砂町三丁目一二番地
電話本所(73) 5979・1821

大阪支店出張所　福岡市東長洲八丁目六三番地
電話福岡 7290番

出張所
- 名古屋市中區南大津町一丁目九ノ二(共濟ビル内)
  電話中 2776・2777
- 札幌市南一條西八丁目　電話4776番
- 奉天市千代田通二五番地

特約店　大連市山縣通二一三　三祐公司

商標 OHNO SHUTTER PATENTED 登錄

日英米特許三一個・實用新案登錄六三個併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式融金付自働閉鎖戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐・戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉・鋼製建具類
應用特殊機械類設計製作

日英米佛獨特許三七個・實用新案登錄八四個併用

特許不二サッシ

東京市大森區新井宿七丁目
株式會社不二サッシ製作所提携

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七・三七三八・三七八七

取付出張員詰所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

會　　告

都市防空建築トーキー脚本當選發表

日本建築協會主催、週間朝日後援の下に懸賞募集せる都市防空建築に關する「トーキー」脚本の應募數八拾六通に對し愼重審議審査したる結果下記の通り決定す

昭和10年9月

審査員　池田　實
同　大道弘雄
同　片岡　安
同　衣笠貞之助

（五十音順）

當　選　者

第1等　"建設せよ"
作者　**野原善一郎**　大阪市西成區今池町19

第2等　"不燃燒都市"
作者　住江英二　横濱市神奈川區平沼町 同潤會アパート53號

第3等　第1席　"鐵筋禮讃"
作者　蔦井英地　大阪市旭區鴫野町477

第3等　第2席　"建築の秋"
作者　沼田賢治　仙臺市北日町60

審　査　概　評

全體的に物語りが比較的單純で防空都市建築に關する說明が無理でなしに挿入されて居るので映畵化が容易にして且つ一般向と云ふ目的に添ふものと思ふ。

尙應募者全體が募集の精神を可成よく理解しいづれも力作を應募せられたことは審査の任に當つた者の愉快とするところである。

けれども當選作品の內1等を除いたもの以外は題目が不燃燒都市又は鐵筋禮讃等の如くアカデミツクなものを付けた爲か內容も何處となくとらはれて動きの取れなくなつて仕舞つたと云ふ感なきにしもあらずと云ひ得る。今當選作品に就ての短評を試みれば次の如し、即ち

"建設せよ"これは物語も單純で應募脚本中映畵化容易であると云ふので審査員の意見が凡て一致した譯である。

防空都市建設の必要と空襲の恐ろしさの說明を學校に持つて行つた點は賢明なやり方と云ひ得るも最後の消防自動車による宣傳のところも前の學校のところに持つて來れば相當の實感を出すのに効果があらう。只難點を擧ぐれば扱つた戀愛の始末が付いて居らず此の點充分なる加筆を行へば一般向の良い作品となる。

"不燃燒都市"全體が長過ぎて豫定の長さにおさまらない樣に思へる。

防空並都市の災害の恐るべきことを模型を使つて説明せんとして居る點思ひ付きで面白いと雖も單に模型に終始して仕舞つたのは迫力にとぼし。取り扱つた人物なる兄妹を小さい建築研究所の所員にした方がストリーとしては面白く、且つ此の兄妹以外に一、二人人物の挿入が望ましい様思ふ。

"鐵筋禮讃" 讀物風の物語と云ふ主旨には添はざるも他の入選せる作品の欠點を補ふデータを多分に持つて居る點で最後に殘つたのである。

エピソードとして嘗て新聞紙を賑はした成功美談を用ひたところなどは洵に面白い。

"建築の秋" 應募原稿に誤字及當字が多く判讀の爲めに最も審査員を惱ましたもの一つであるが、物語りが變化に富んで居り相當面白い。此の點で兎に角最後まで殘つたのである。

即ち理想と希望をいだいた青年主人公と舊時代の先輩との意見の衝突等があり、それによる多くの壓迫や物質的苦しみに耐へて理想への歩みを着々進めて行く主人公の姿に相當興味をそゝるものがある。だが原稿の字が示す如くもう一息と云ふところで力不足の感をいだかしめる作品である。

審 査 經 過 報 告

都市武裝に關する映畫の脚本を募集しました結果公募發表の日より締切の日まで約1ヶ月未滿の短期日であつたにも拘らず 86 通もの應募脚本を得、且つ大半は相當力作が多く募集の目的に添ふて居つたのも審査する者の喜こびであつた。が然し審査員は我が建築協會が都市武裝に關して持つ使命の重大性に鑑み勢ひ嚴選を斷行せざるを得なかつた事はけだし止むを得ないであらう。

今應募脚本を應募者が選んだ題目より分類すれば下の如し。

1. 都市を主とせるもの	27	2. 個々の建築を主とせるもの	8
3. 防空及空襲を主とせるもの	5	4. 單に建設を主とせるもの	5
5. 國家又は鄉土を主とせるもの	6	6. 一般の戲曲的題目を附したるもの	24
7. 題目を落しにもの	11		

次に書かれた内容より分類すると次の如き結果となる。

1. 興味本位とし戀愛を取扱つたもの	48	2. 單に教育的宣傳映畫的のもの	11
3. 防空に關する科學映畫として書き下したもの			6
4. 撮影用臺本として書き下したもの	5	5. 募集の目的をはづして居るもの	10
6. 讀むに耐へない程度のもの	6		

最後に應募者の地方別をすれば下の如し

						各縣1通宛次の如し
大阪府	19	島根縣	3	滿洲國	2	三重、山梨、高知、鳥取、岡山、香川、德島、山口、神奈川、富山、愛知、岐阜、長崎、靜岡、宮城、關東廳、中華民國
東京府	13	福井縣	3	北海道	2	
兵庫縣	10	奈良縣	2			
京都府	7	埼玉縣	2			
廣島縣	4	和歌山縣	2			

前記の結果より見るに全日本のみならず遠く滿洲國及中華民國等にも相當の反響があつたことを示して居る。

審査の方法に就ては第1豫選及第2豫選を行ひその結果最後に殘つた物の等級を定めたのである。

應募總數 86 通の内第1選を通過せるもの 15 通であつた。これは主として建築的專門の立場から審査して行つたので殘された 15 通に對する第2豫選は映畫の專門的立場より當選の4通を決定し之れを愼重審査の結果前記の如き等級を決定したのである。

朝鮮總督府始政二十五周年記念

博物館建築設計圖案懸賞募集

1. 朝鮮總督府は本規程に依り始政 25 周年記念博物館の建築設計圖案を募集す。
2. 應募圖案は審査の上當選者に對し（共同應募の場合は其の代表者に下の等級別により賞金を贈呈す）

1 等賞	金 5.000圓	1 名
2 等賞	金 3.000圓	1 名
3 等賞	金 1.500圓宛	2 名
佳 作	金 200圓宛	若干名

3. 應募圖案は下の期限迄に到達する樣朝鮮總督府會計課宛提出すべし。

昭和 10 年 12 月 10 日正午

1. 應募設計圖案は左の圖面及書類を具備するを要す。
   1. 配置圖　縮尺 6 百分の 1
   1. 各階平面圖　同 2 百分の 1
   1. 立面圖　各 2 面以上　同百分の 1
   1. 斷面圖　同百分の 1
   1. 主要部詳細圖　同 20 分の 1
   1. 透視圖　「ワツトマン」全紙大
   1. 說明書
1. 應募したる設計圖は下記の審査員之を審査す

（イロハ順）

審査委員長	政務總監	今井田清德
審査委員		伊東　忠太
同		渡邊豐日子
同		加藤敬三郎
同		武田　五一
同		內田　祥三
同		山田　三良
同		有賀　光豐
同		佐野　利器
幹　事		嚴　昌燮
同		兒島　高信
同		笹　慶一

1. 審査は昭和 10 年 12 月 20 迄に終了するものとし其の結果は朝鮮總督府官報を以て發表し且つ當選者には之を通知す。
1. 本規程には下の圖面及書類を添附す。
   1. 建築敷地並に略配置圖　1 葉
   2. 建築敷地附近鳥瞰寫眞　1 葉
   3. 參考平面略設計案　3 葉
   4. 設計心得
1. 詳細の規定は昭和 10 年 9 月 6 日より10日迄の朝鮮總督府官報に揭載しあり
1. 詳細問合は昭和 10 年 11 月 10 迄に朝鮮總督府會計課宛照會せられたし。

朝鮮總督府

日本建築、保存、手入、

新築住宅にお手入のいらぬ

美素加工請負

目下全國に亘り高級新築住宅で
美素を加工しない住宅はなくなりました

美素工業所

大阪市天王寺區生玉町一三二

電話 天王寺四〇〇三番

◎新築家屋美素加工

新築落成と、同時に、本所獨特のビソ液にて洗淨し木材變色の原因となる、樹液を取り、其の上をビソにて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり優美な艶を有し水拭き掃除の勞を省き頗る經濟的です。

◎古家屋新裝美素加工

百年の古家も一度ビソ液にて洗淨すると新築同樣となる其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。

（特種技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

カタログ贈呈

建築と社會

第18輯第10號　昭和10年10月發行

茶室建築

目　次

茶室建築と茶人 …… 木津宗一（27）

織部好茶室の一考察 …… 北尾春道（35）

桃山時代の茶室遺構 …… 澤島英太郎（49）

松向軒と蓑庵 …… 藤原義一（59）

近代數寄屋住宅と明朗性 …… 吉田五十八（64）

道慶作三疊大目數寄屋指圖解說 …… 佐古慶三（71）

茶室建築寫眞 …… （1）

國際新建築 …… （75）

建築法規に關する質疑應答欄 …… （74）

會　報 …… （89）

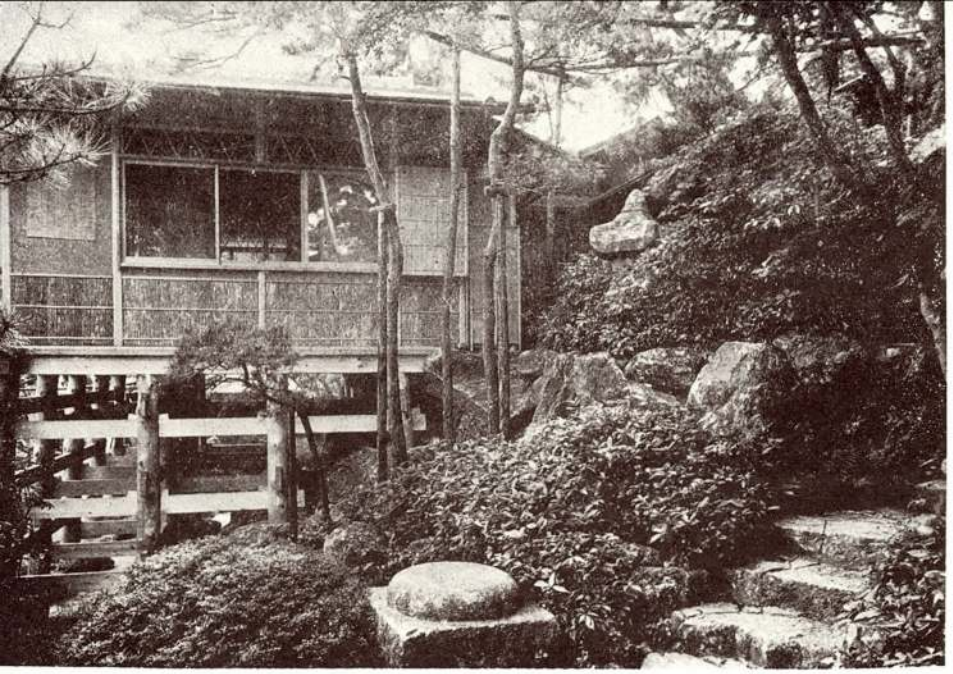


茶　席

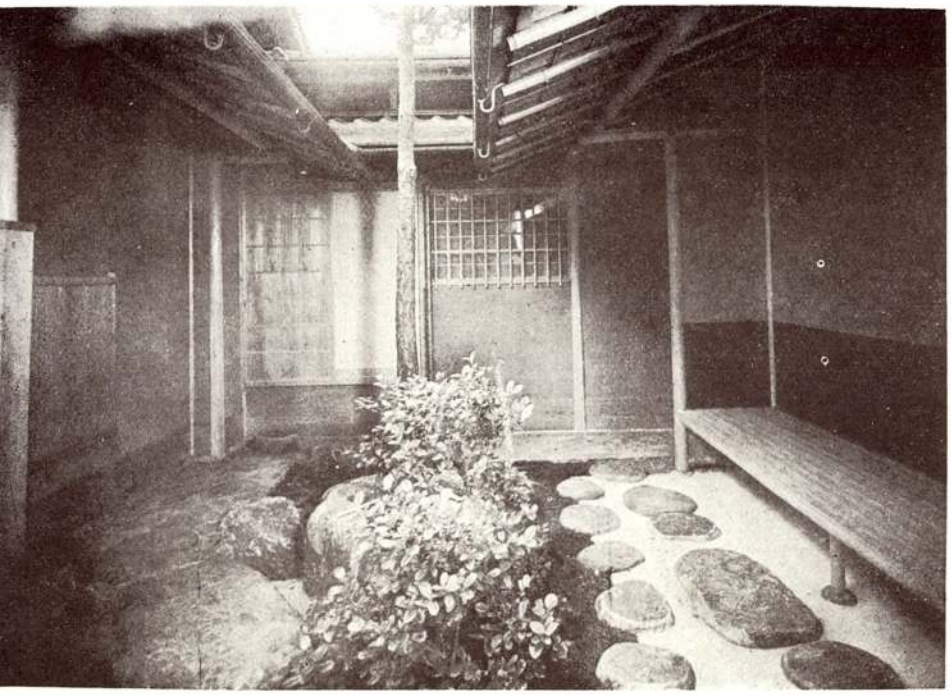
舞臺造りの茶席で急に間に合せる

爲２ケ月で仕上げたものである

兵庫縣芦屋某氏邸茶席　木津宗一作



舞臺の側面
石燈籠はすべて朝鮮
より取りよせたもの



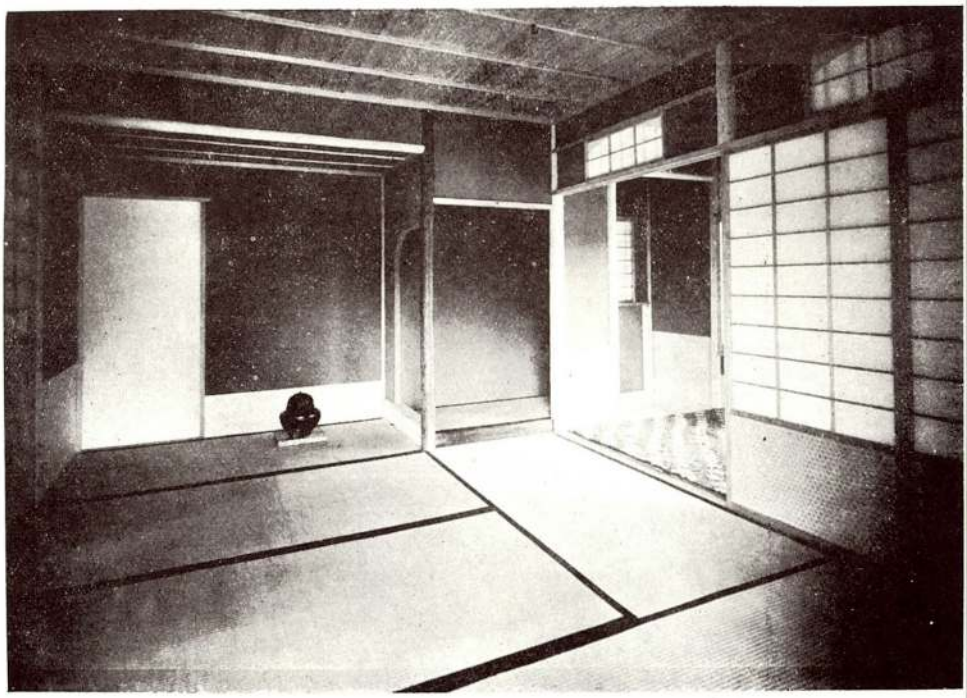
路地及腰掛待合

兵庫縣芦屋某氏邸茶席　木津宗一作

×2

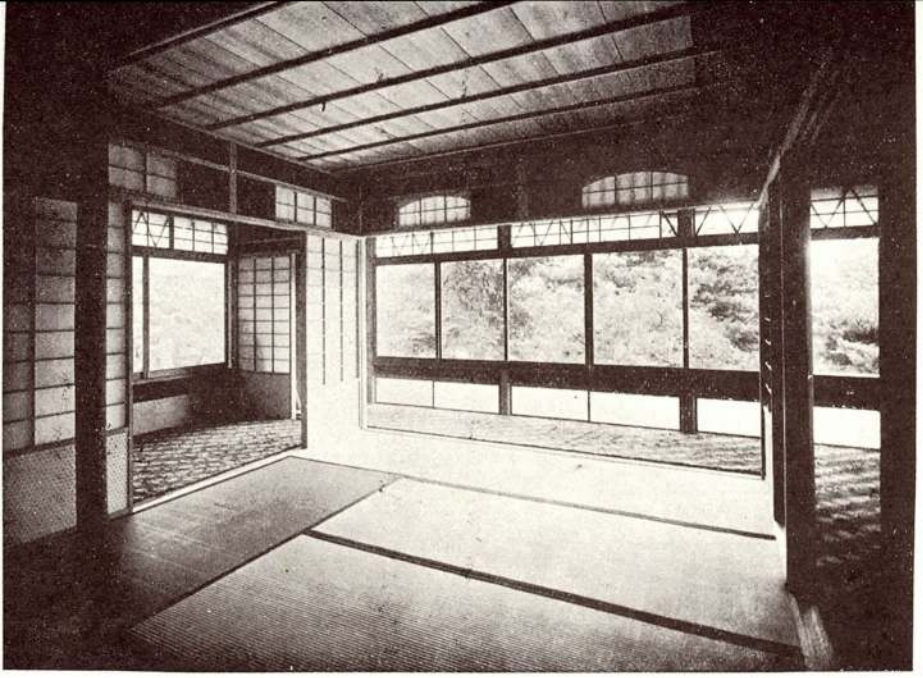


路地及腰掛待合



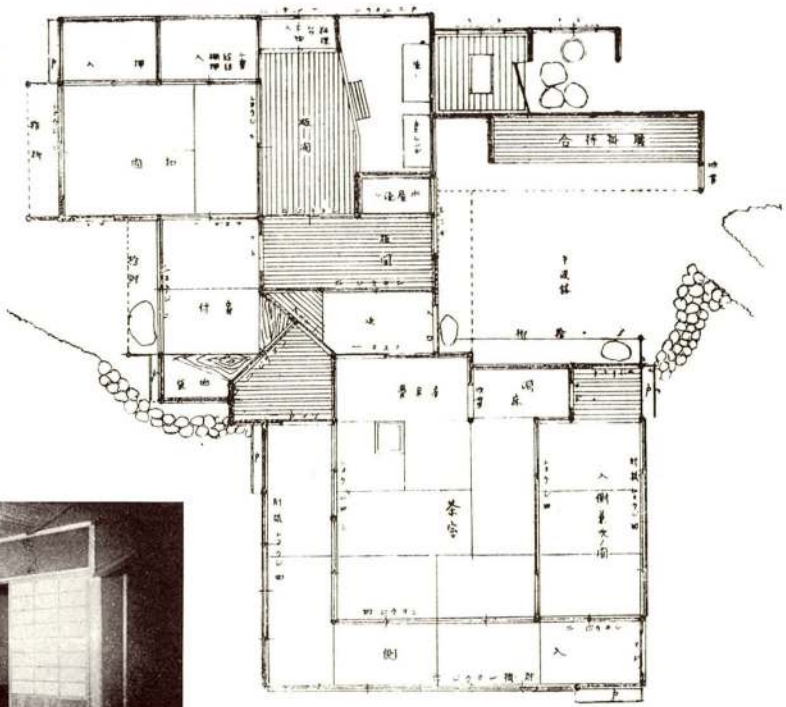
茶席六帖
床は桐床、柱赤松皮つき落掛杉、床框黒柿

兵庫縣芦屋某氏邸茶席　木津宗一作

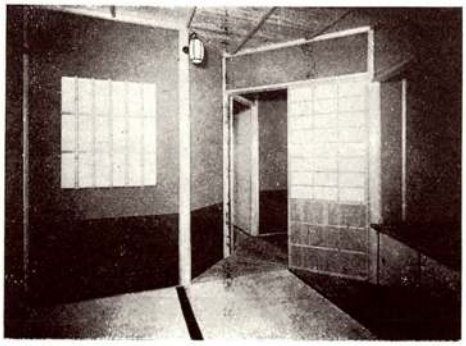


床の右側より入側
を見る
客大勢の塲合は障子
を外し13疊の室とし
て茶をすゝめる

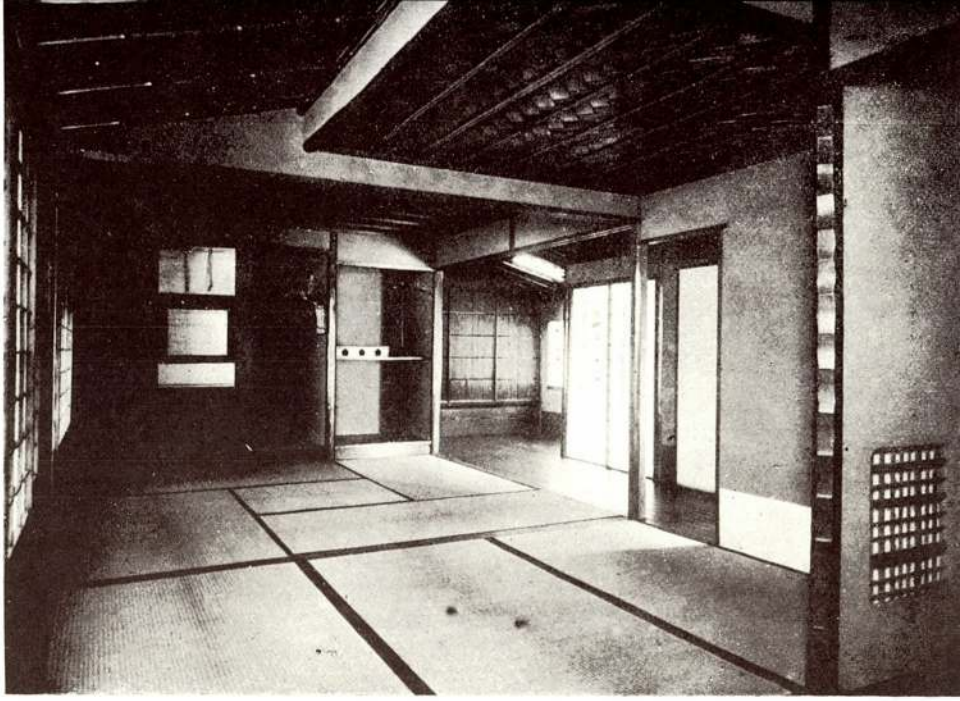
茶席平面圖

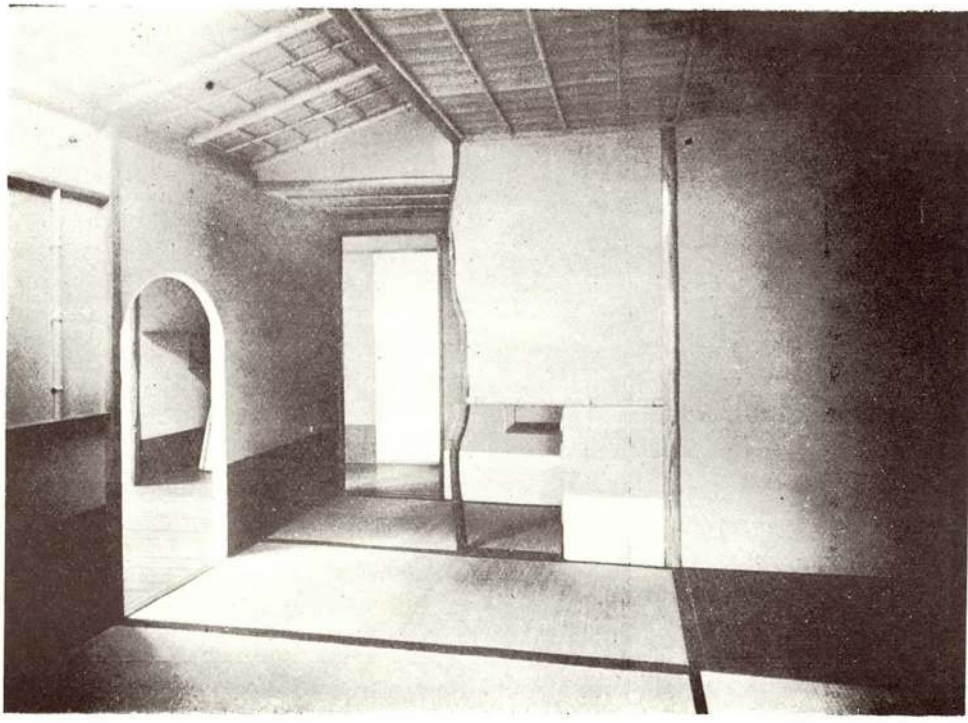


寄付二帖の地袋廻り

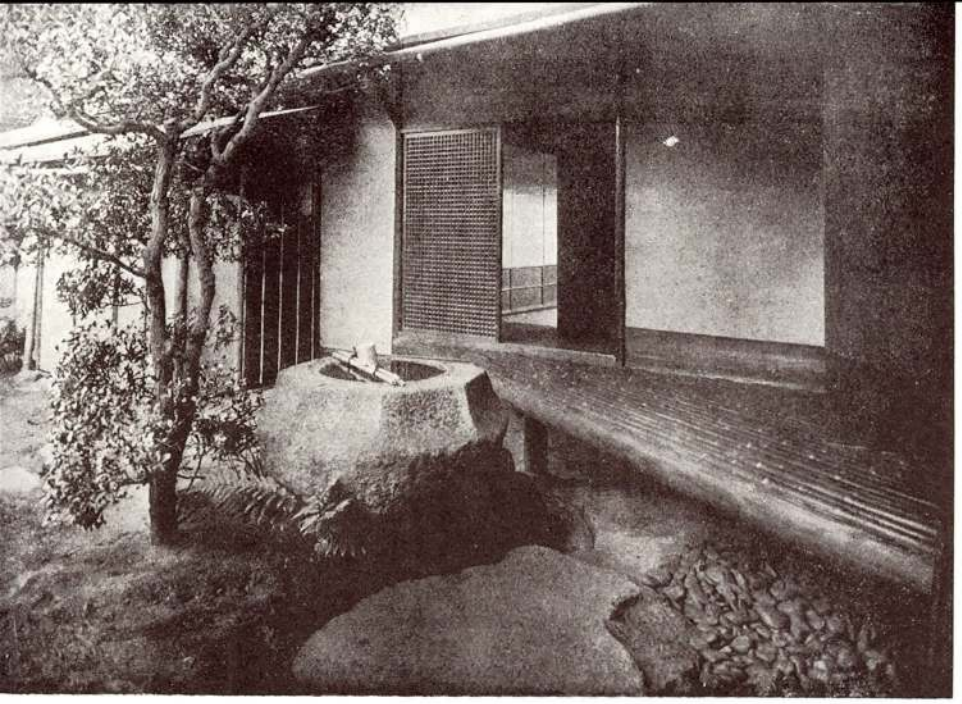


兵庫縣芦屋某氏邸茶席　木津宗一作





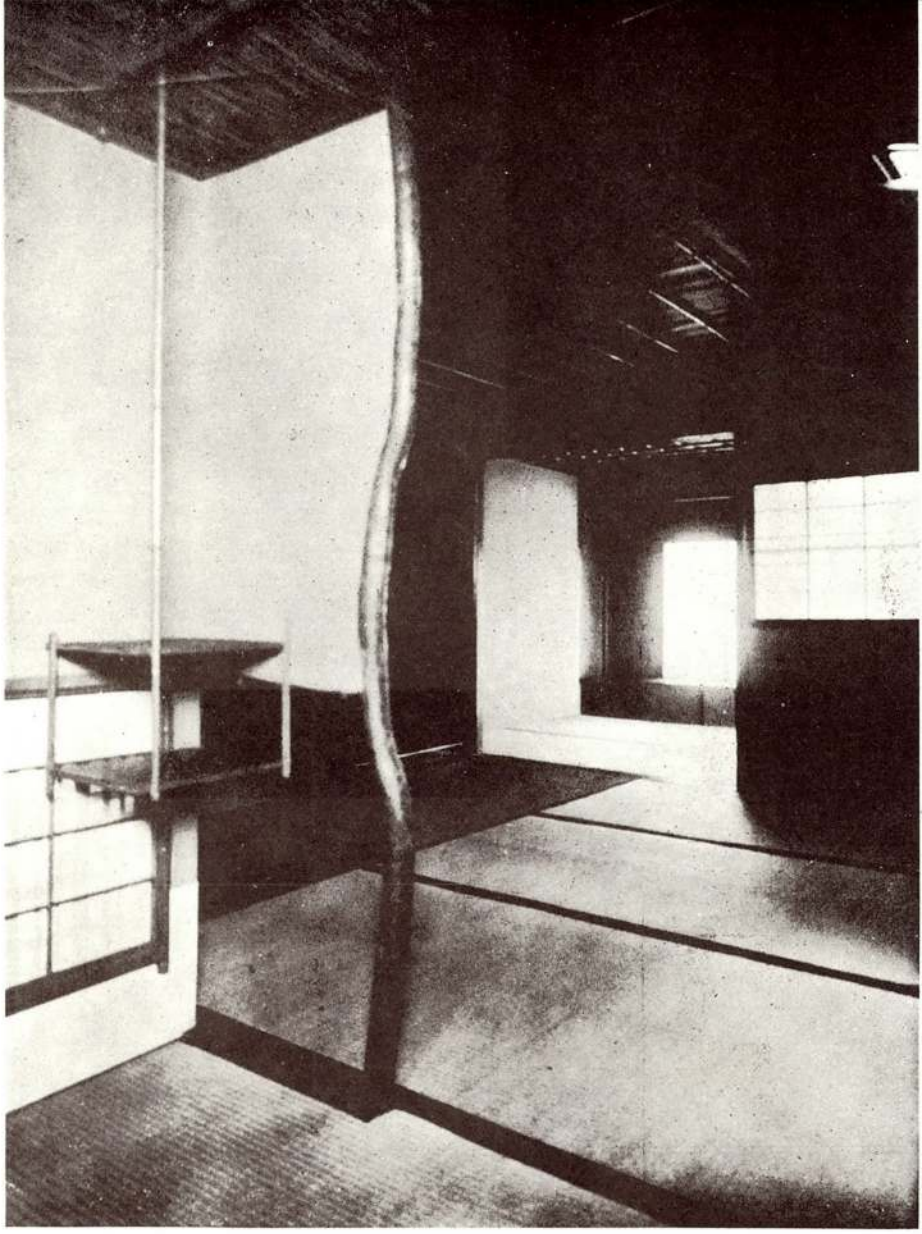
鴻池板屋橋別邸茶席（大阪市南區瓦屋町三番丁）





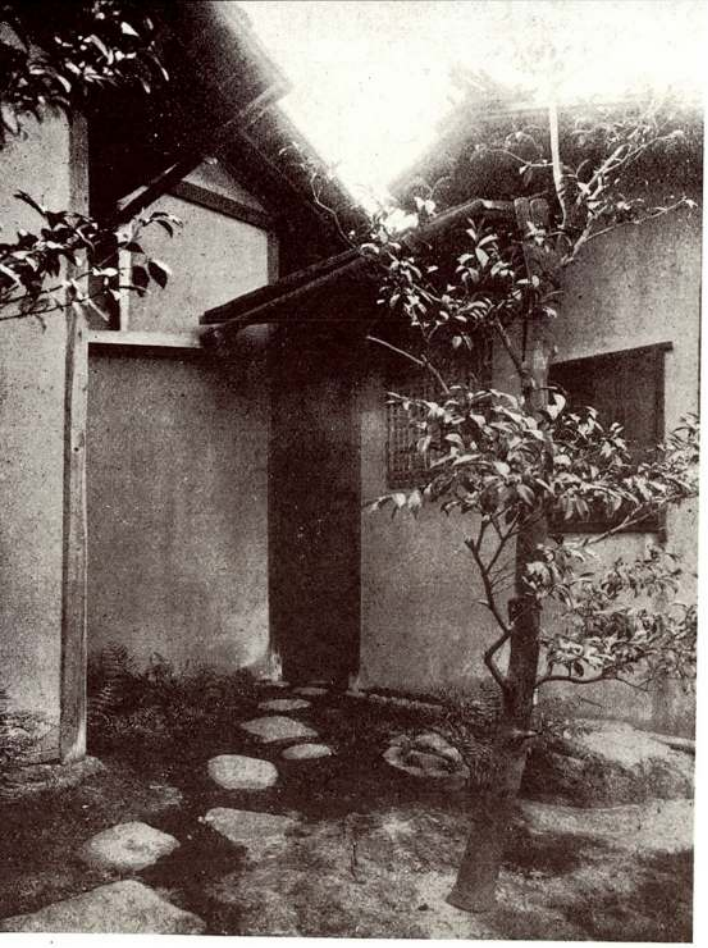
鴻池板屋橋別邸茶席（大阪市南區瓦屋町三番丁）

×6



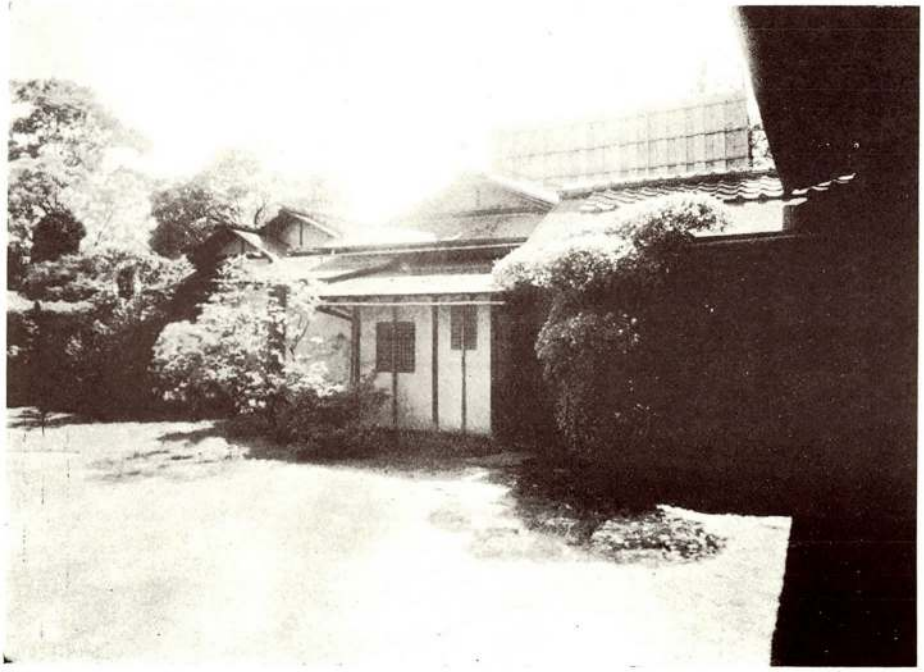
御茶席内部桐釣棚の圖

鴻池板屋橋別邸茶席（大阪市南區瓦屋町三番丁）



東側庭より御茶席外觀を望む

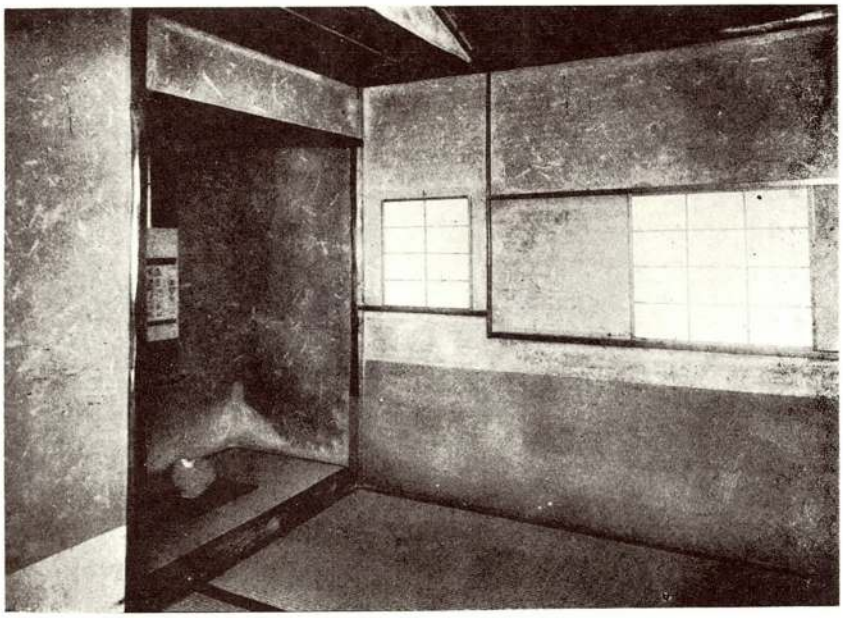
小屋の部分外觀



鴻池板屋橋別邸茶席（大阪市南區瓦屋町三番丁）



3・妙喜庵待庵外観



4・妙喜庵待庵内部

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌説明参照

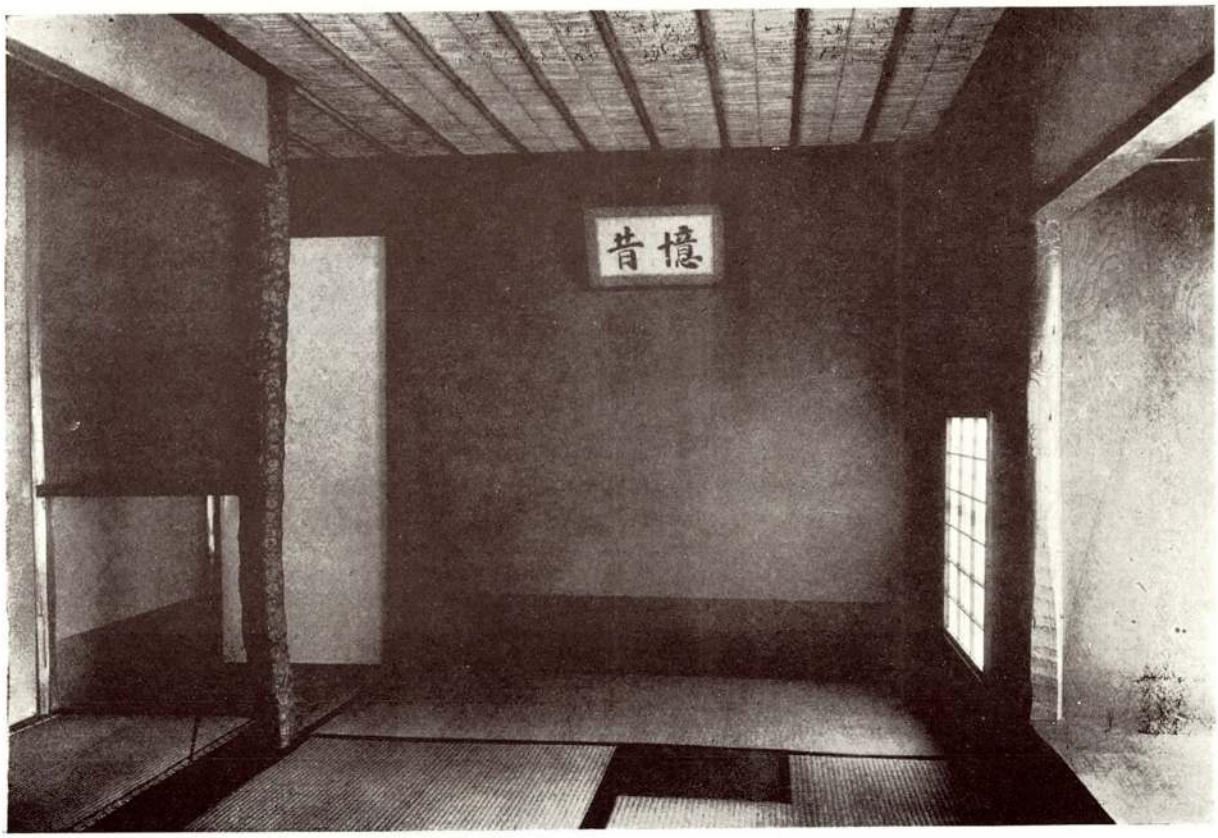


5・飛雲閣全影

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌説明参照



6・飛雲閣茶室近影



7・飛雲閣茶室内部

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌説明参照



9・臨春閣第一屋第二屋全影

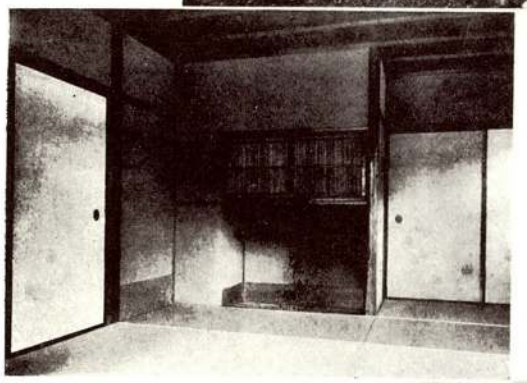


10・臨春閣第三屋全影

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌説明参照



12 · 三寶院庭園（飛鳥園寫眞）



11 · 臨春閣第一屋臺子の間

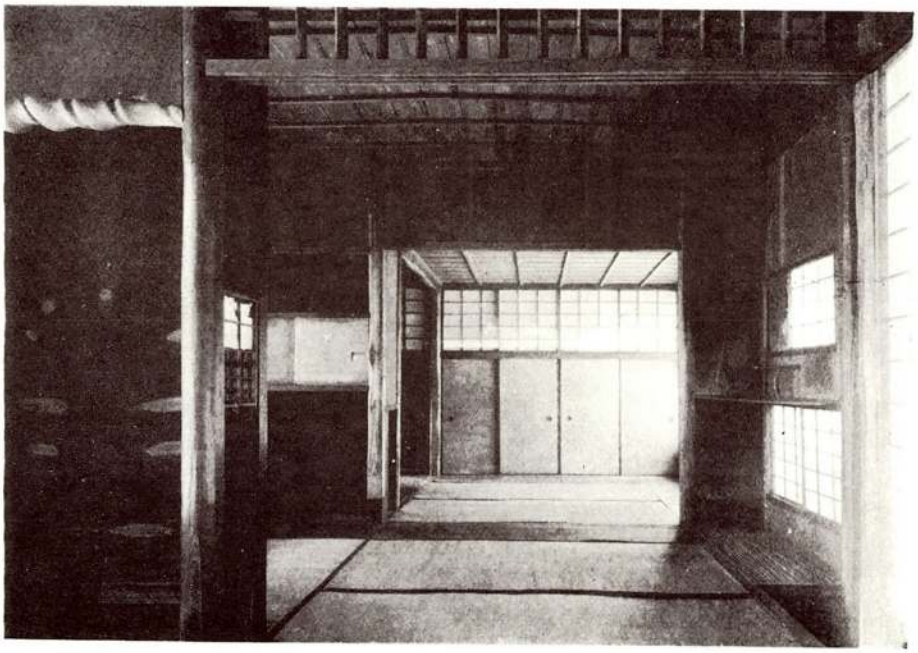


13 · 三寶院表書院泉
殿より枕流亭を望む

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照



14・枕流亭全影



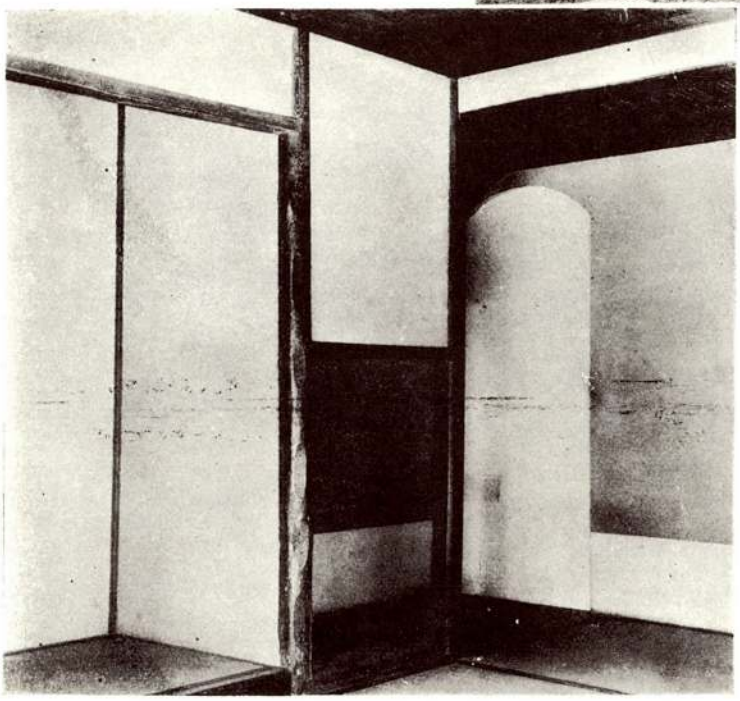
15・枕流亭内部

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌説明参照

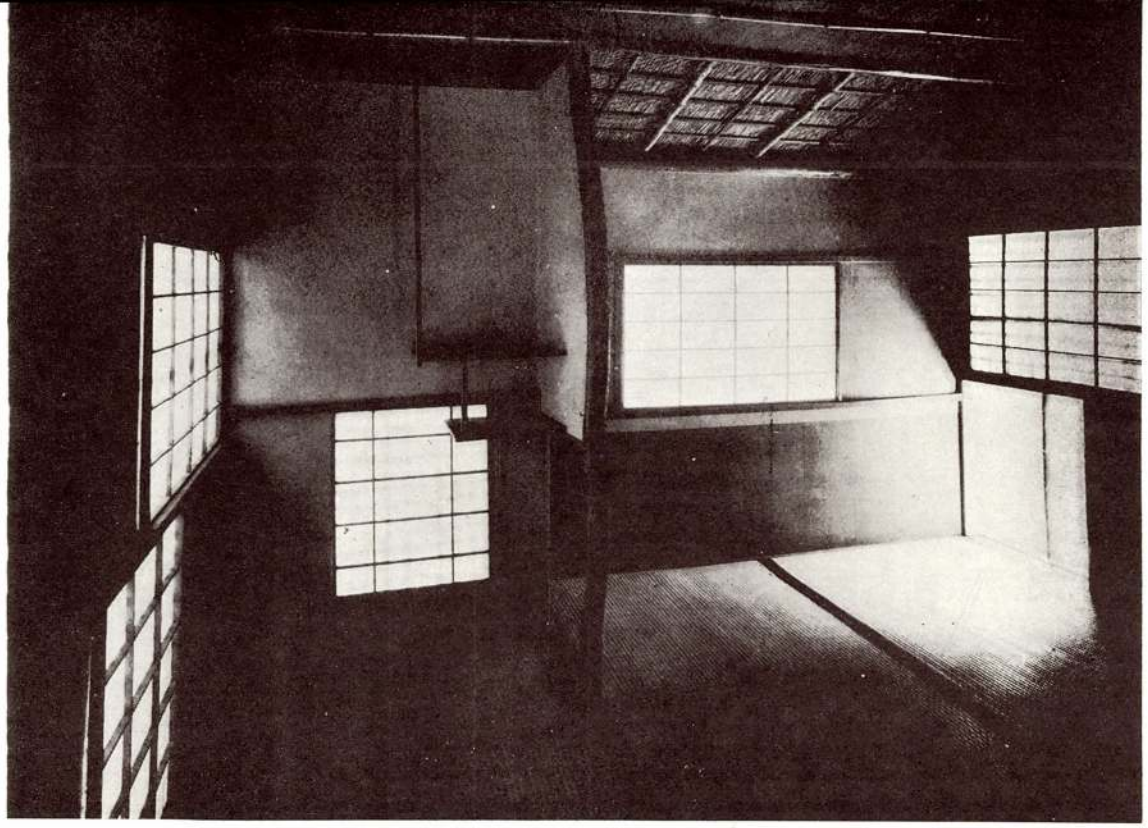
16・湛浩庵全影



17・湛浩庵内部



澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌説明參照



19・東陽坊茶室内部

18・東陽坊茶室全影



澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構" 本誌說明參照



20 · 高臺寺傘亭

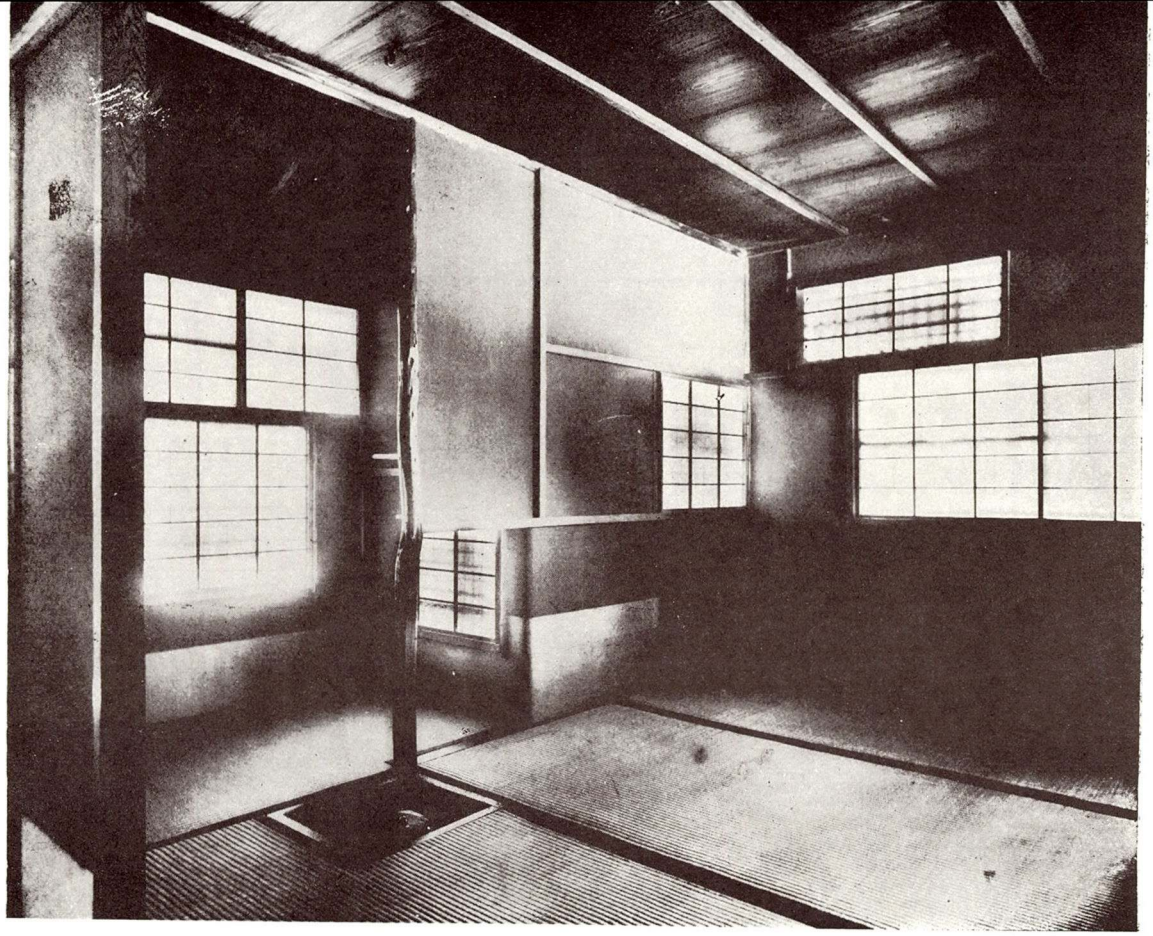


21 · 高臺寺時雨亭全影
（昨秋風害前）

22 · 春草廬外觀

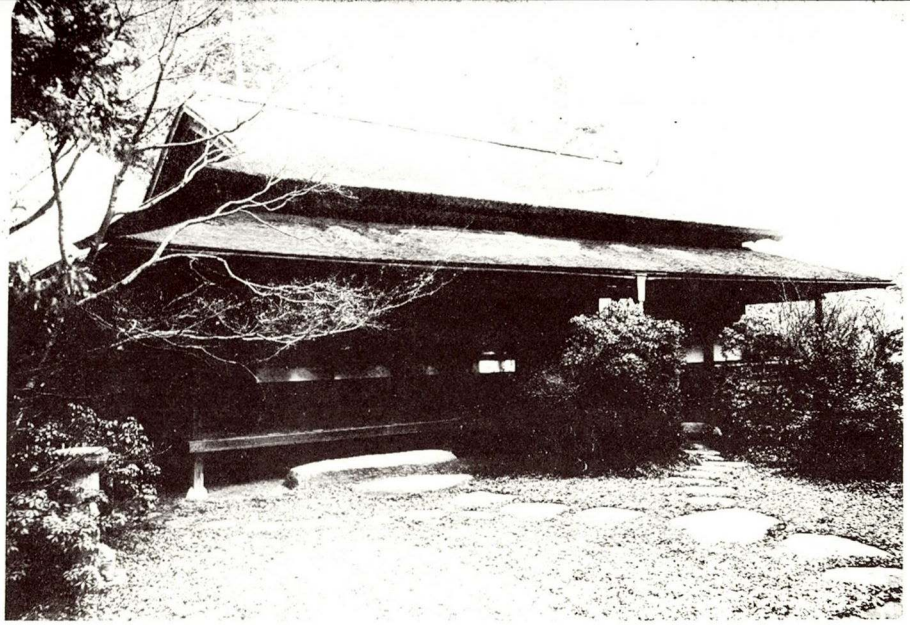


澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌說明參照



23・春草廬室内部

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌説明参照

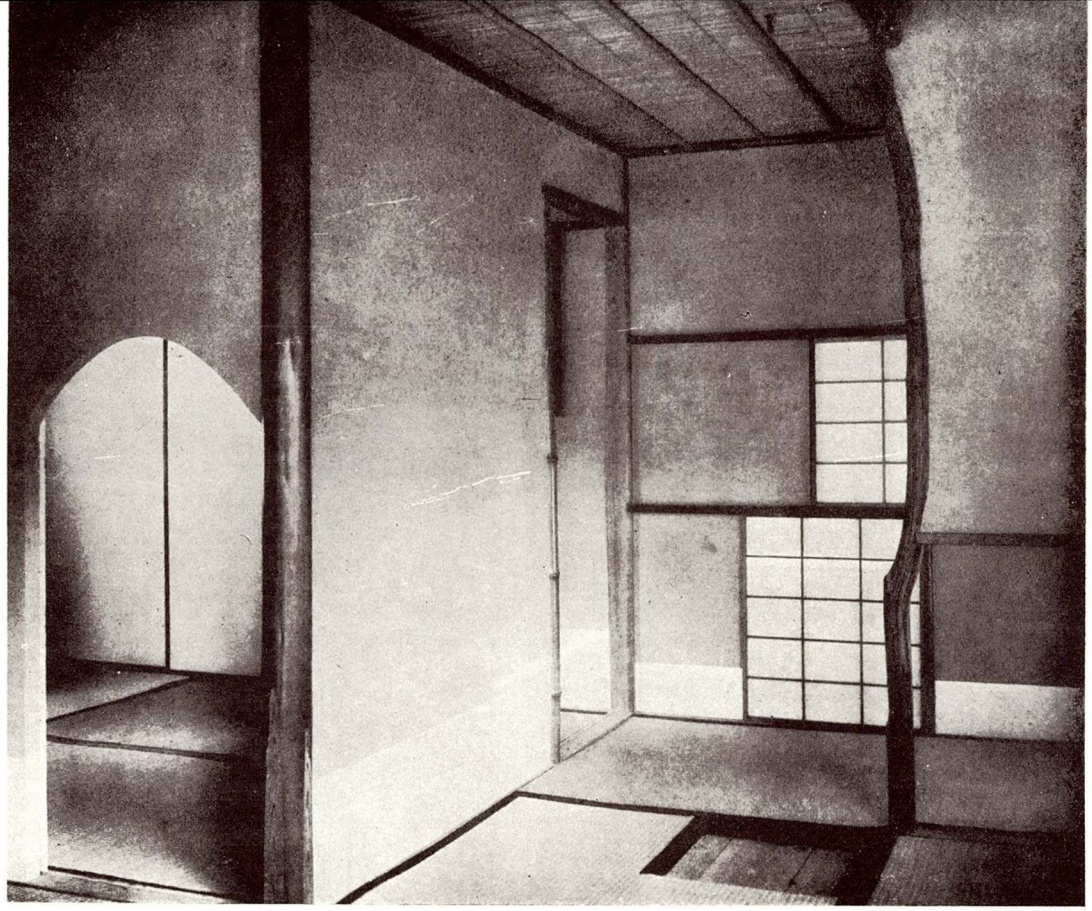


24 · 月華殿全影



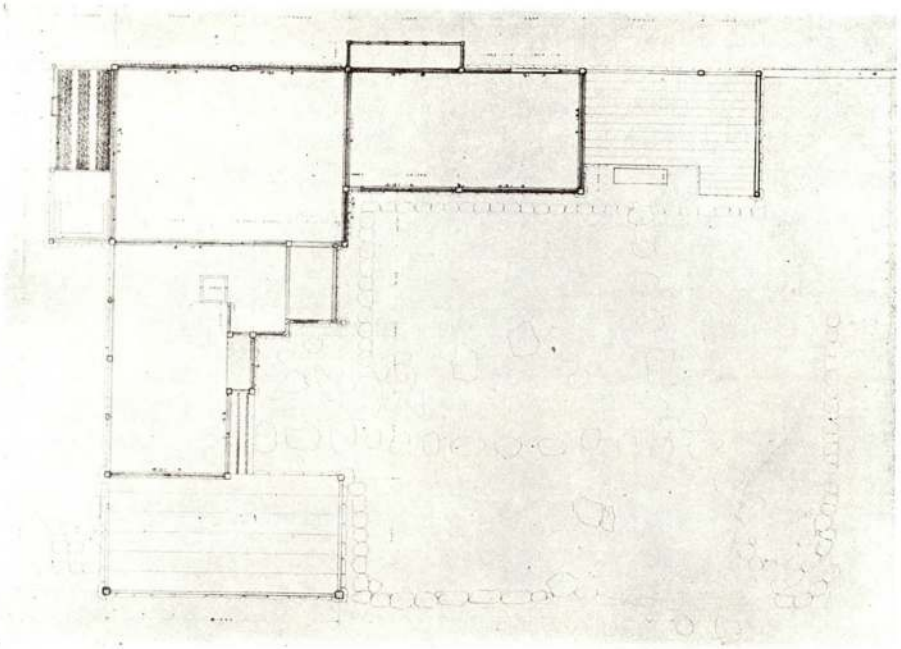
25 · 奈良帝室博物
館構內八窓庵全影

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照

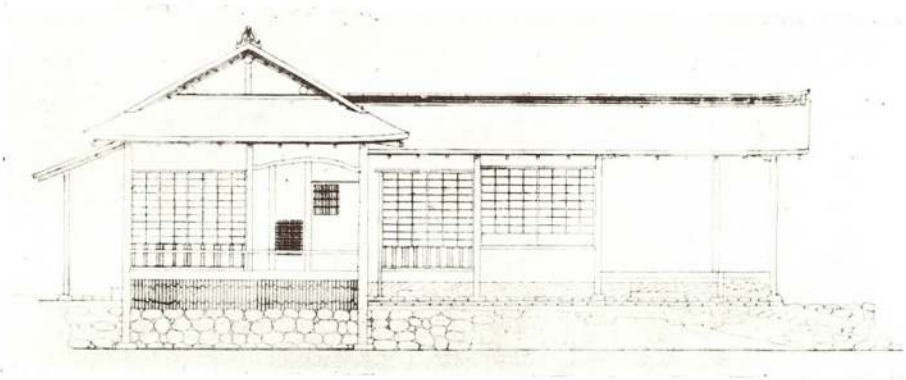


26·奈良帝室博物館構
內　八窓庵茶室內部

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照



27・西芳寺
湘南亭平面圖



28・西芳寺
湘南亭正立面圖

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照

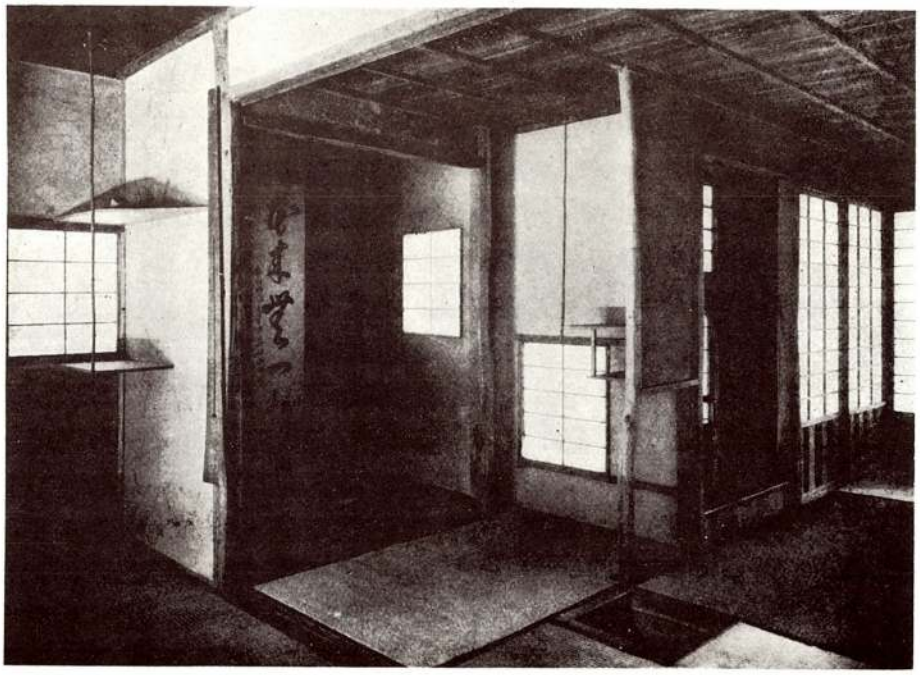


29・西芳寺湘南亭近影

澤島英太郎氏“桃山時代の茶室遺構”　本誌說明參照

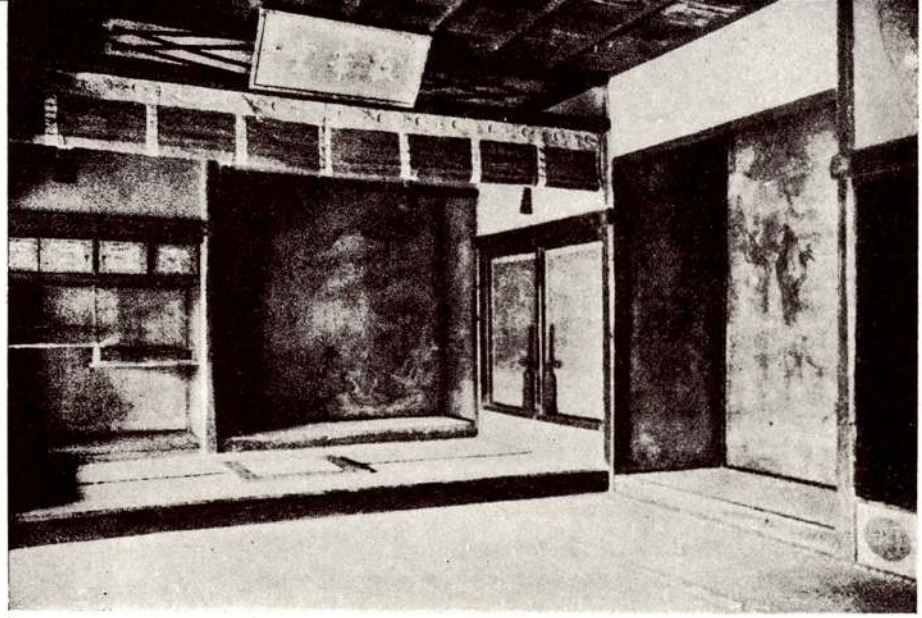


30 · 西芳寺湘南亭

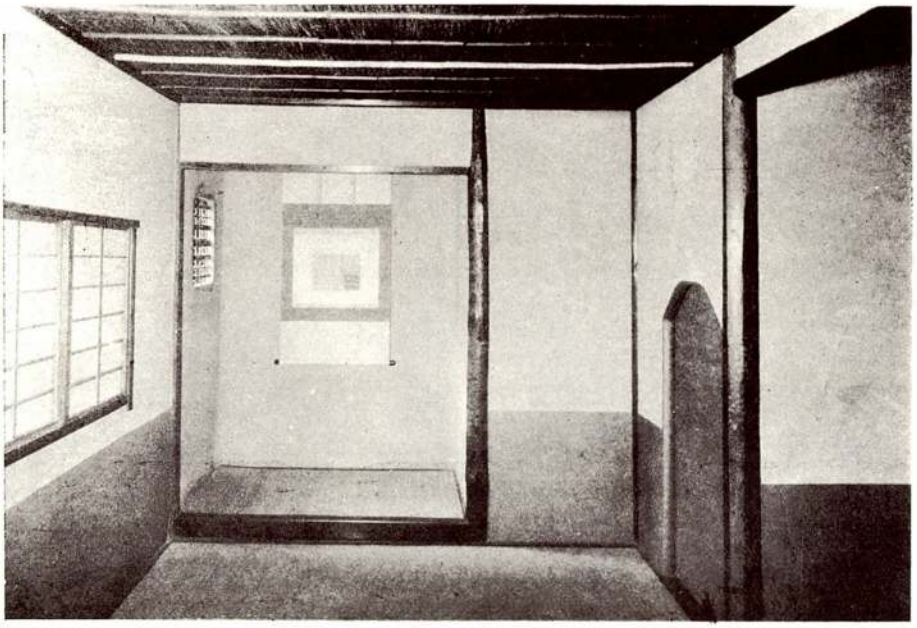


31 · 西芳寺湘南亭
松庵茶室内部

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照



32·願泉寺蔽茶室内部

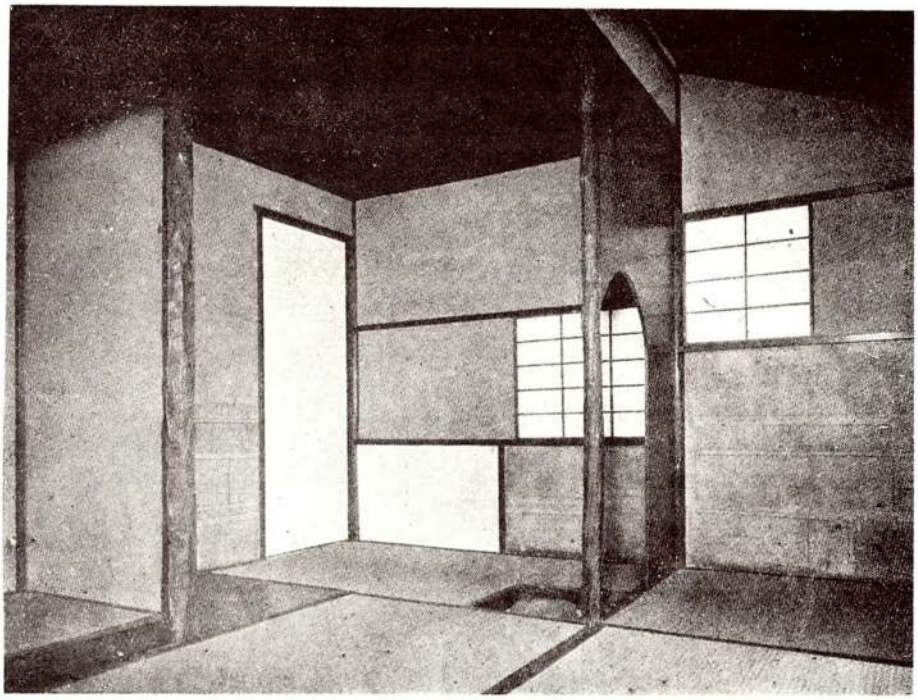


33·願泉寺茶室泰慶堂内部

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌説明參照

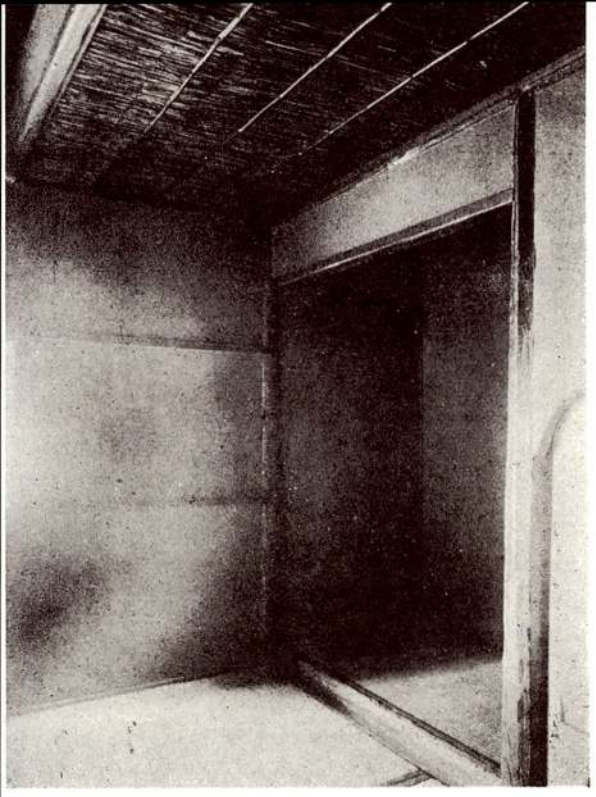


34 · 如庵外觀



35 · 如庵內部

澤島英太郎氏"桃山時代の茶室遺構"　本誌說明參照



御茶室内部

八窓の南方より觀たる外觀



一心寺茶席　慶長18年小堀遠州作にして大阪城中より現在の一心寺へ移建のもの（大阪市天王寺區逢坂町一心寺）

茶室建築と茶人

木津宗一

茶室と茶人と題し、菲才陋文を顧みず、又建築の技能に乏しきも、茶人としてのたてばより些か茶室のことを書き現さんとす。茶室と云ふ名稱は、480餘年前室町時代中期の頃よりならん。

茶を我が國に用ひ始めたるは、確かならざれども、凡一千餘年前弘仁頃よりならん。下て鎌倉時代末期に至りて、武士の間に行れたるも、只だ遊樂の興となし、又は豪華を示すの、對照物に用ひられたりき。そは太平記、又は異制庭訓往來、喫茶往來により知り得べし。室町時代中期足利義政の頃に、珠光現れ一休禪師俗弟子となりて、修道するにあたり常に眠を催せしより、茶を喫せしが或時禪師の一喝以て、茶味禪味を悟了したれば、夫れより茶道を起し、維摩經中の間疾品を基として、佛家の方丈十八疊の室を四分して、四疊半に圍ひて、其個所を茶道則ち和敬靜寂の心境を練磨して、茶道を味ふの道場とはなせり之れを茶室と云ひ圍ひと稱せし、起原とはなすべきか。

足利義政は、其先義滿の頃より和漢の名器は勿論繪畵の類を聚集し、同朋眞、藝、相、等を倍し、諸侯豪族を集めて、豪華なる茶會を催し、或は歌合せ、俳諧、源氏、虫合せ、扇合せ、の遊興をなせしが、遂に之れをも厭きて、同朋の進言に從ひて、珠光を召し茶道を聞き、其修むる處の和敬靜寂の境地を慕ひ、其當時華麗なる、東山銀閣の山莊中東求堂を圍ひ、則ち茶室を造れり。

是より先に足利義滿は、金閣山莊を造るに當り、茶室を設けたり。世俗南天床柱の茶室と云も、その當時の茶室既に燒失して、後年造れる變形なれば、其當時の構造を知るに由なし。思ふに南天と云ふは、我國の「ナンテン」にはあらず。彼の西本願寺桃山時代建築悲雲閣に屬する憶惜と稱する、茶室床柱南天木は、南洋に產する「バイナツプル」と、同木のことならんか。後ち紹鷗出で、大黑庵と稱する茶室を造れるも、矢張四疊半なり。利休紹鷗の門となりて、紹鷗と謀り三疊半、二疊半の茶室を造れり。半疊とは大目疊を用ゆ之の疊の所を、點茶をなすの場所となす。

造れる茶室は、佗び數寄をば基とすれば、用材の如きは有合せたるを、取集めて適所に使用するなり。則ち柱は丸太、床柱、中柱、は雜木の皮付の儘、竹垂木、片木板、杉皮、蒲等を用ゆ。之れより茶道を好む者輩出し、茶室の構造も之れに慣ひて、多種多樣の形狀をなせり。元伯は今日庵とて二疊の茶室を造れり。遠州は茶室に寢殿式樣を加へて造れり。現に京都大德寺中孤蓬庵茶室山雲床の如き存せり。

以上の如く述べ來れば、茶室は四疊半以下の小室而已の如く思ひ得るも、然らず六疊もあれば八疊もあり。それは其構造の、佗び數奇の現れたるものを、概して茶室と總稱し得べきものなり。

茶室には其構造の、各所に名稱あり。之れを擧れば、普通建物と同じく、外姿よりすべきなり。

屋　　根

屋根にては萱又は藁にて葺きたる佗びの形。又は檜皮、杉皮、片木板、瓦、銅、葺きもあり。何れも形は入母屋、寄せ棟、切りづま、片卸とて、普通建物と異なることなきも多くは入母屋造りを用ひらる。

突き揚げ窓

屋根より見るに戸を付着し、其上部肘坪を打て、內部より之を突き揚げ、開きて明を採る用をなす。

從つて內部に渡りて、概略を擧ぐれば

床

床は何れの建物の內部座敷にては、主要のものとす。床は佛家の佛前莊嚴より起り、掛物を主とし、之れに花花瓶を配し、又香及香爐を飾る。

茶 道 口

茶室の小室にては、杉削木見付 8分位のものを角被帆立とし、又は火燈口とて、壁を穿ち其の周圍に紙を張りたるもの。何れも內法5尺1寸乃至5尺2寸。巾2尺1寸乃至2尺2寸とす。夫れに太鼓張障子を入る。其口より入室して點茶するものとす。

廣き茶室にては、次室との中間襖障子の入口を之れに代用す。給仕口又同じ

給 仕 口

四疊半已下の茶室は多く之れを設く。それは火燈形とて、內法3尺8寸乃至4尺2,3寸、巾2尺前後壁を穿ち、其周圍に紙を張り、之れに太鼓張障子を入れ、引き明け又は開きとし、客に對する給仕をなす口とす。

躙り上り口

之れは客の入室する入口とす。內法2尺3寸乃至2尺6寸、巾2尺1寸乃至2尺3寸とす。之れに外部に戸夾みの敷居鴨居を取付け杉戸を入る。

突き揚げ窓

掛け込天井に長さ1尺8寸乃至2尺1寸、巾1尺5寸乃至1尺7寸に、切り開け垂木一本を中間とし、之れに單障子及び袖引き單障子（今は多く硝子入り障子を用ゆ）を入れ室內へ光線を調ふに設く。

窓

窓は下地窓櫺子窓とす。下地窓は壁を穿ち壁下の葭を現せしに起れり。今は特に葭にて

組子を造り、藤莚をかけたるもの、襖子窓は中敷居鴨居を付け、白竹を折り並べたるもの。窓の稱は風爐先窓、墨跡窓、透見窓、其他光線を入るるか通氣に要する窓とす。

中　　柱

茶室中爐邊に建つ。彎曲したる細き柱。之れは多く皮付松、又は皮付の儘なる雜木を用ゆ。疊より凡そ2尺2寸5分乃至2尺5寸上に、横に竹にて壁止を入る。

棚一重又は二重

茶室中柱あるときは、其内側道具疊の方、又は其反對の隅に取付く。多くは桐板厚さ4分位のものを用ゆ。最も其一方壁に入らざる個所に、端喰をなし細き竹にて釣る。

爐

茶室中主要のものなり。爐は木にて櫃を造り土にて塗りたるもの。又たは石爐とて石にて造れるもの。其寸法は、

普通1尺4寸方形。之れは疊の長さ6尺3寸を、9分—7寸となるを2倍せしなり。

大爐1尺8寸方形。之れは疊の長さ6尺3寸を、7分—9寸となるを2倍せしなり。

爐の寸法は紹鷗と利休とによりて、定まれりと茶人等の傳ふる處なり。

茶室に爐床に穿ち切るには、4疊半切り、其4疊半切りを疊の上座に切るを、上げて切り、疊の下座に切るを下げて切ると云ふ。其の外向ふ切、隅切と云ふ。總て茶室によるものとす。

天　　井

床天井は多く杉1枚板とす。間々塗り天井とて壁にしたるものあり。利休造る所の、山崎妙喜庵茶室床天床之れなり。平天井は片木板網代組み竹棹緣、又は平片木板竹か杉削りの棹緣、掛け込み天井は多く、白芽竹、竹木舞片木版張藤莚掛けとす。道具疊天井之れを落ち天井と云ふ。多く蒲を編み用ひ竹棹緣とす。

道　　幸

流しを設け取付たる道幸、置き道幸の2種あり。之れは必ず茶室に用ゆるとにはあらず茶室の構造によれるなり。

以上は茶人として、茶室を造るには最も意を用ゆる要所とす。之れに勝手則ち水屋を附設すべきなり。水屋には棚及び水流しを造るべし。其水屋流しに2種あり。普通平水流し水屋と、立ち水屋とて床より1尺斗り高く、其下に炭及灰の類を入る引出しを設く。水屋の棚には濕棚とて、枠を組み板に竹を夾みたるもの。茶桶棚とて枠を組み板斗りのもの。炮烙棚、炭斗棚、上棚とす。

其外腰掛待合。之れに屬する砂雪隱も必要とす。それは茶室考案者の意、又は場所の模様にて之れを省略し、他の建物を代用することあり。

茶室を造れば。是に相應の庭園を作るべく、茶道にては之れを露路と云ふ。露路には外露路と内露路を分つ。之を分つには中門、蔀戸、猿戸、京潜りを以てす。

露路を作るには、躙り上りに對する沓脱石。蹲手洗鉢等の据方。腰掛待合の石中門猿戸の石据へ。露路中の飛石茶室へ通路腰掛待合との聯絡。足もと照しの燈籠の位置尤も意を用ゆべきなり。

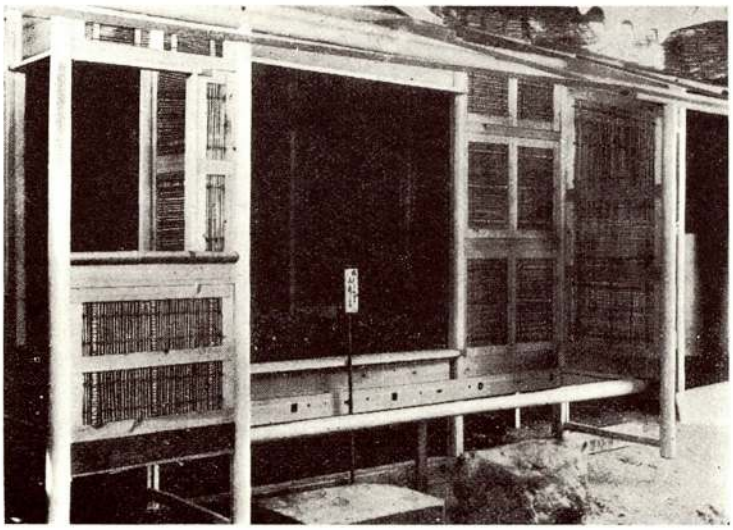
元來利休元伯等は、閑寂の境地を基として作庭せり。小堀遠州は其範圍を弘め、眞、藝、相、の建築作庭と、閑寂なる作庭とを融和して作庭をなすに至れり。則ち桂離宮の德川時代初期に御增築の御幸の間、松琴亭茶室、其他腰掛待合及庭園の如き、寢殿式建物庭園と靜寂なる茶室庭園との、配合見るべし。遠州の後ち茶人としての、建築作庭に夫れを學びたる跡少なからず。

茶室を造るに當りては、始に地形又は現存する住宅との對照、其住宅との聯絡に考慮を用ゆるを要す。假令茶室が精美を盡すと雖も、之れを缺くるときは、其茶室にして茶を點する動措に澁滯を生じ、又た客入室に不便を起し、折角招請せられたる客を滿足を得せしめず、元來茶會は主客相和し介意なく、互に相敬禮を失はざるを本意とすればなり。茲に水戸景山烈公の茶對語味ふべし。

曰　或問子學茶法乎吾對曰未也嘗聞之其味也苦而甘其器也麁而淸其至撲而閑其也隘而幽其交也睦而禮數會而不費能樂而不奢如此而已莫其反之者吾所不知也

之を熟讀玩味するに互に睦く禮を失はず儉にして奢りを謹む。人各々其の行を顧みるべし

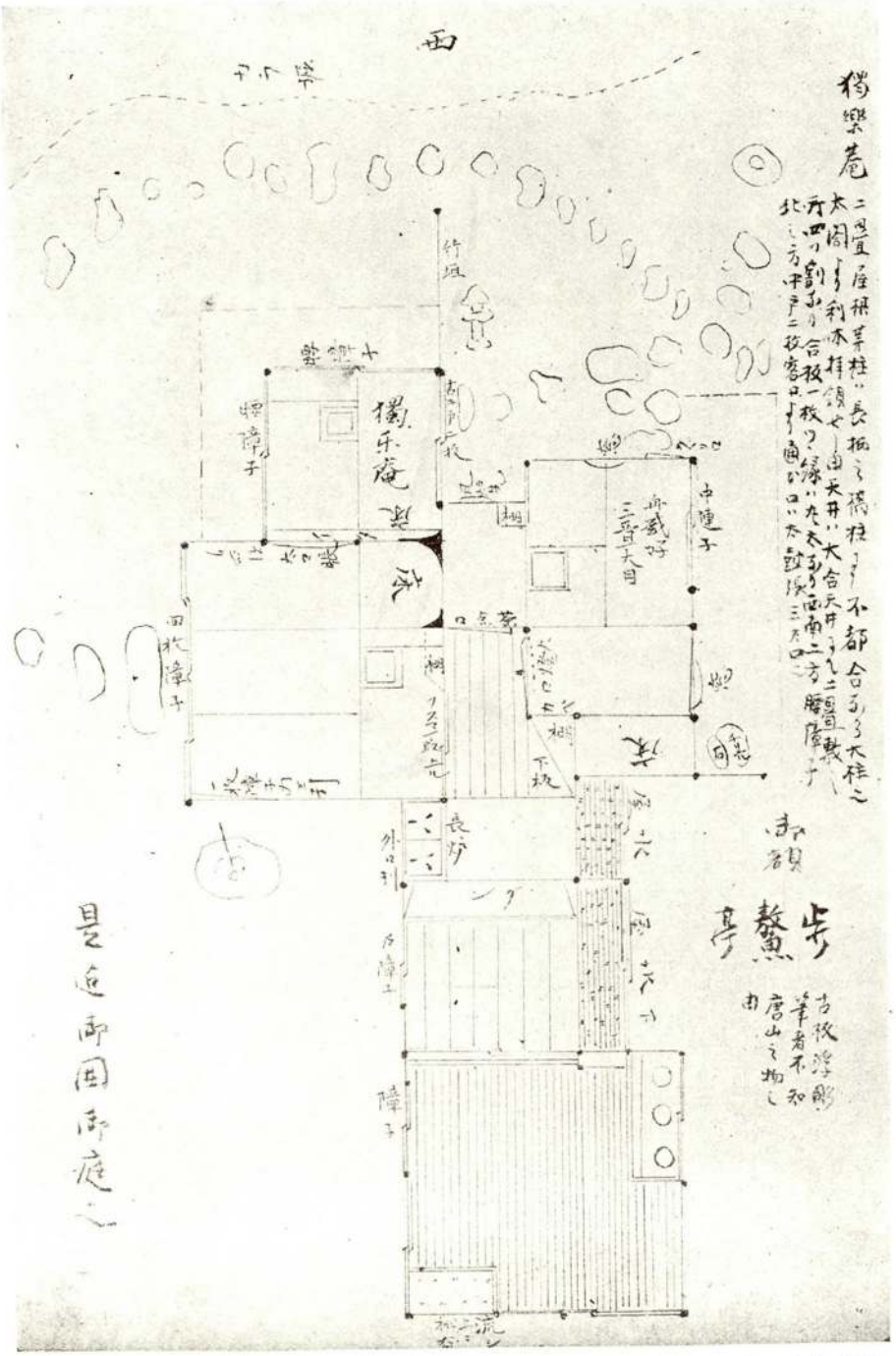
茶室は質朴を要とするも、又た美化せしむるも宜しからん。德川時代中期不昧宗納は、江戸大崎に別墅作り隱棲せられき。其別墅に數個所に茶室を建築し、夫れ等は相當美麗にして、特に壁下地の如きは、壁畵をもなし得らるゝ切壁下なりと。先考宗詮より傳承せり切壁下を造るには、柱と柱の間の樋は盡く鉋にて削りて、鋸にて双互に切目を付け、栓を用ひて之れを堅くし、樋と樋の間に樋と同材にて枠を組み、之れにも鋸の目を付し、其枠中に竹を細く割り削りて、割麻苧を以て編み入れたるを、入れ栓にて堅むるなり。之手段を以てすれば建物は堅牢なり。大阪には切壁下の茶室二三存せり。先年或る御用命を蒙り茶室を造りたるに、之手段を用ひたり。



切壁下地寫眞

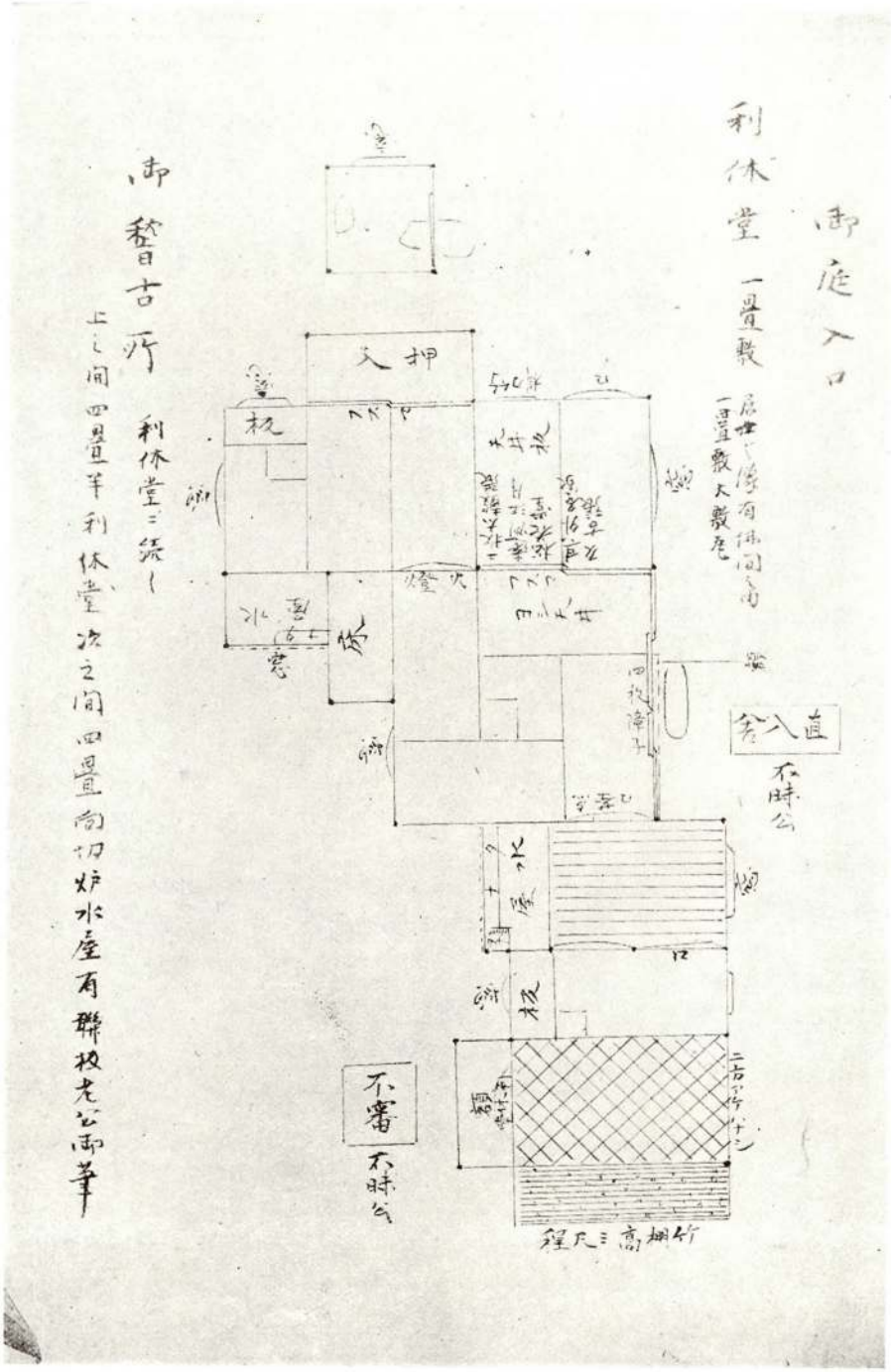
以上不順序に列記せり。誤れる廉は斧正せられんことを

獨樂菴平面圖及解說

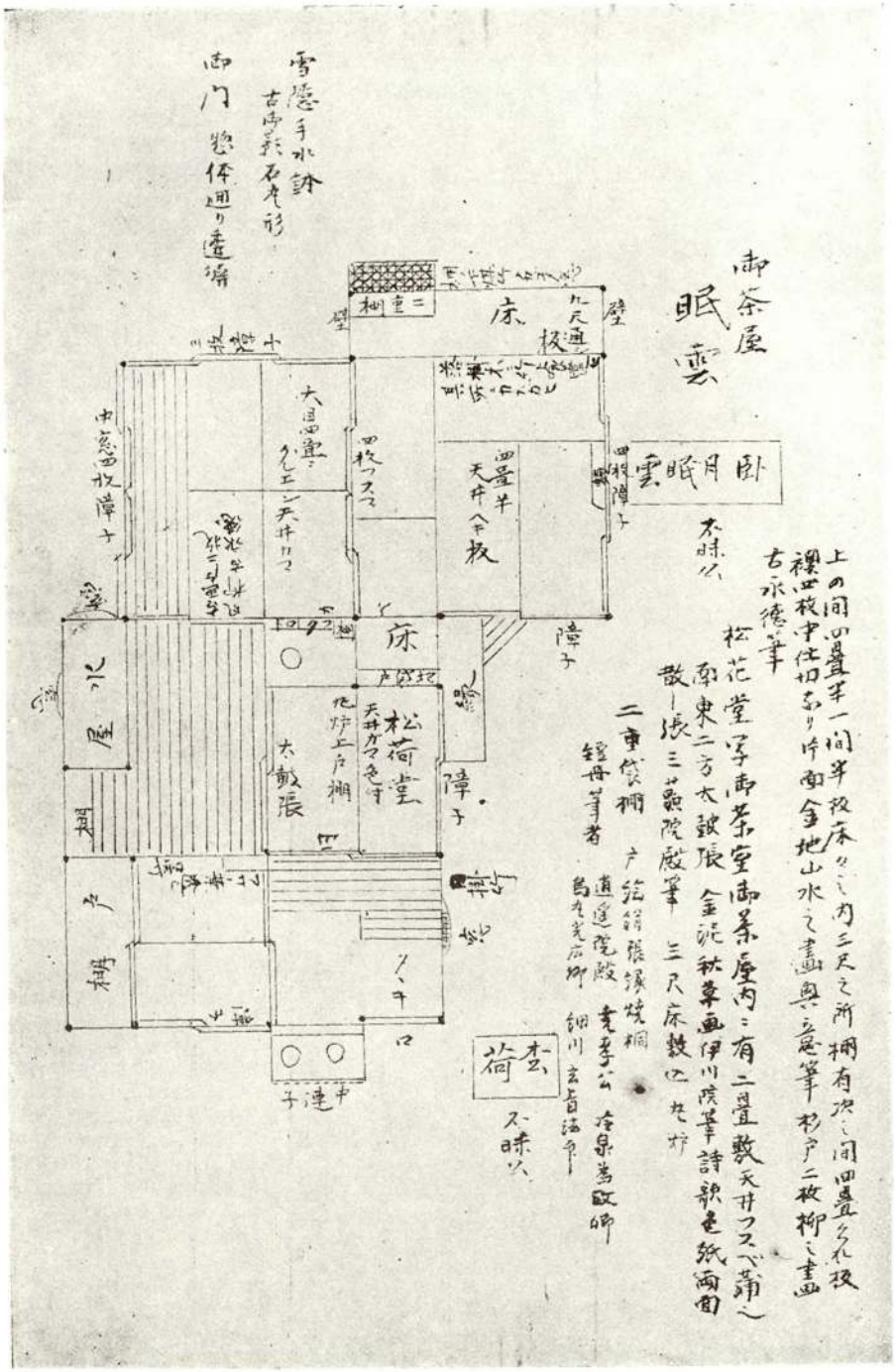


大味公・大崎別邸內數寄屋　芝の白金にあつた不味公の別邸には、大小十五の數寄屋が建てられて居たが、明治維新の際取り壊されて火藥庫が築造されたのは、惜しいことである。その數寄屋のうち比較的大きい平面のものを木津宗一氏藏書より撰出して揭げることにした。

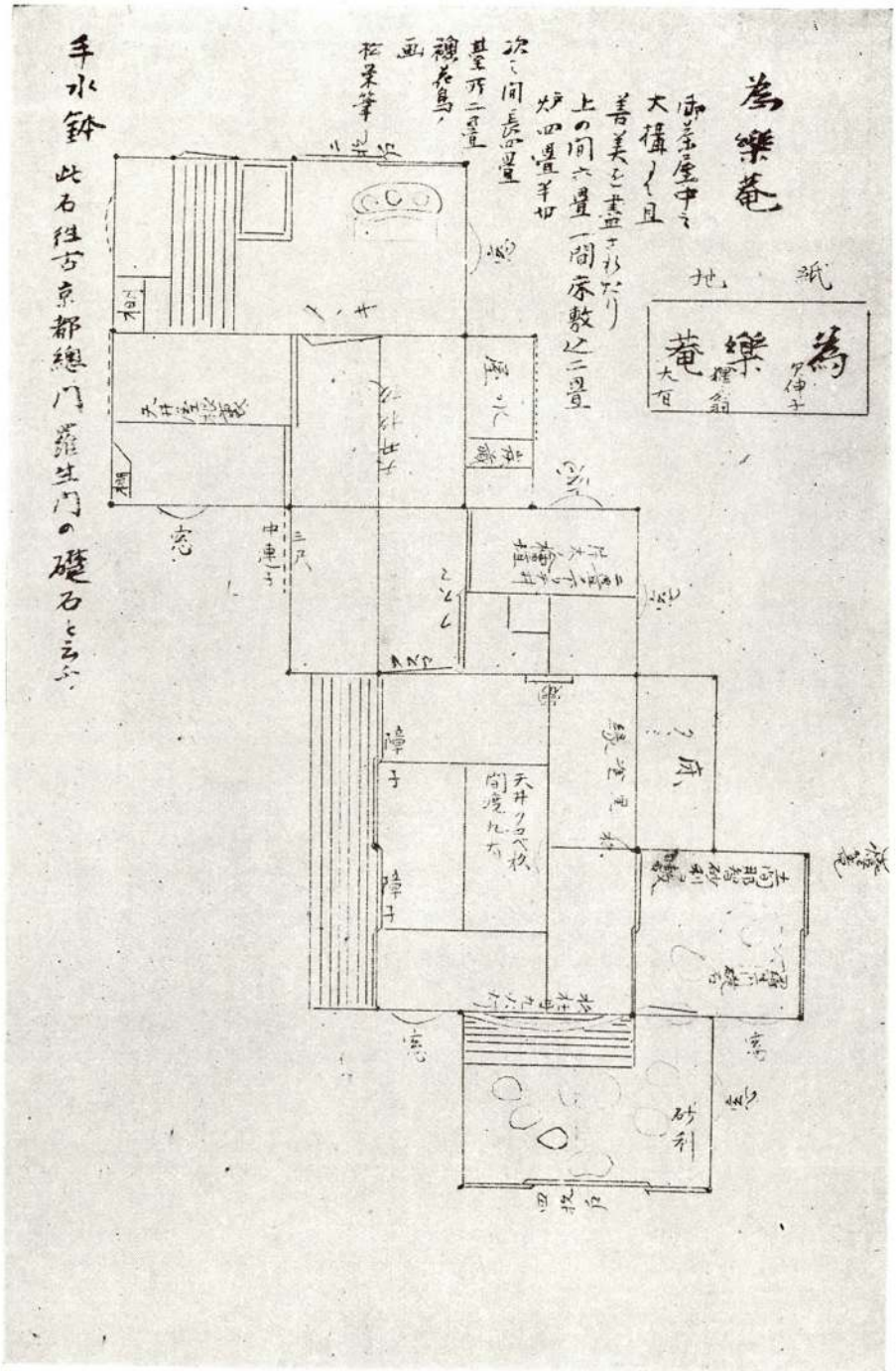
利休堂平面圖及解說


御庭入口
利休堂 一疊敷
御譽古庵
利休堂ニ続ク
正ノ間四疊半利休堂次ノ間四疊向切炉水屋有聯板先公御筆
入押
板
窓
燈次
直入
不時公
不審
不時公
竹柵高三尺程

御茶屋眠雲平面圖及解說



爲樂菴平面圖及解說


爲樂菴
手水鉢
此石往古京都總門羅生門の礎石と云ふ
次の間長四畳
上の間六畳一間床數ヶ二畳
炉四畳半切
書院
茶室
天井クロベ板
爲樂菴

織部好茶室の一考察

紫雲洞　北尾春道

1. 序

古田織部正に就いては今まで屢々發表もされ、論述されてゐるが、何分にも文献が乏しくてその傳記さへも異説、傳説が多く眞僞をさへ疑はれる點が尠くなかつた。隨つて「織部好」茶室に關してもその織部の唱導する茶道式事等が明白でない限り、その平面圖や起し繪圖によつて研究しても唯議論と想像に了つて終ふのである。今回計らずも織部正が慶長年中に建立されたる京都興聖禪寺に於て、古田織部正十五代の後裔が、織部茶道の復興を企圖し、不肖も亦多年織部茶室の調査研究に携はり、且つ今回の此擧に對しその事務の末席に加はるの光榮を得て、幸に織部茶道式事のすべてを拜聞するの機會を得ることが出來た。而此度日本建築協會の奬めによつて拙稿を草した譯であるが、不肖もとより淺學薄士未だ茶道の何たる所以を識らず、只抹茶の苦味を嗜好するのみ、幸に先學諸士の御教示を得ば幸甚の至りである。

先づ順序として古田織部正重勝の略傳を明かにし、その全生涯を徹する武士的生活や茶道の生活内容を見て、織部正の建築觀や、其茶室にあらはれた思想を考察して見たいと思ふのであるが、與へられた紙數では到底述べ盡すことは覺束なく、唯今回今まで疑問視され、異説傳聞多かりし茶匠織部正傳を略説することは、今後織部好茶室を調べらるゝ方々にも多少稗益することあると信し、古文書に據る茶室の平面圖數片を擧げ　現存する織部茶室の遺構を寫眞によつて解説することに止む次第である。

2. 古田織部正略傳

（下記は古田家に傳來する系圖及古文書に據り、且つ東京帝大藏「本光國師日記」及中川家に傳へられてゐる古文書等によりて略述せるものである。）

古田織部正重勝、初め重能とも稱し、（他書重然とあるは誤りなり）桑原某男として天文13甲辰年美濃國に生れ、桑原左助と稱してゐたが、當時織田信長公に奉仕する古田大膳亮重安の養子となり、その家系を繼ぎ、古田左助と稱した。其頃武野紹鷗に茶法を學び文武兼備の將として其名高かりし細川幽齋に就いて茶の湯の教へを受けてゐたのである。左助未だ廿歳位の頃幽齋の家士に百舌鳥目某なる兄弟とも勇氣すぐれたる者ありて、この百舌鳥目兄弟不屆の事あり、放討に致すべしと思へども、常に兄弟相伴ひ居るため討つこと困



第1圖（京都興聖寺所藏）古田織部正之像

難なりしが、左助ならば討果すべしと思ひ幽齋は左助に百舌鳥目兄弟を討果すことを命じた。左助畏つて一日二人を茶の湯に呼び饗茶し、さて歸る時露地まで見送り、百舌鳥兄弟は何れも刀、脇差を帶び、左助は大脇差一本にて肩衣に袴をつけ、「上意」と一聲拔打に兄の首を討ち、驚く弟の二の腕を切つて落し、其場に切り伏せた。幽齋樹立の蔭より出でて、其の天晴な手腕を賞美したりと。其後信長に奉仕したるもこの手柄によつて召されたものと傳へられてゐる永祿の初年信長が尾張清須在城の頃既に茶の湯を紹鷗に學び、又利休にも教を受け、天守にて利休の默茶手前を上覽せられたこともあつた　其頃信長は清須城內に茶室を造營せんと欲し、重勝をしてその設計に當らしめた。これはおそらく重勝として最初の處女作とも稱すべき數寄屋で、細川幽齋の指導を受けて四疊半臺目の席を造つたのである。（世にこれを呼んで猿面茶席と稱せるも、其名稱はおそらく天正2年頃信長が盛んに茶會を催した時分に名づけられたものである）永祿11年信長が京都へ上り播州を討伐の際、重勝は一武將として信長に從軍し、永祿12年正月には信長の奥意をもつて中川清秀の妹と婚姻し、其節清秀より御引出物三原の銘刀(長2尺9寸)を拜受してゐる。天正の初年頃は信長の命によつて清秀を輔翼し、利休の高弟荒木攝津守村重等と交友し、利休に就いて茶道の教を受け印齋と號した。天正6年11月信重の乞によつて、重勝は其緣者中川清秀を信長に奉仕させて、攝州拾貳萬石を與へさせられたり、或ひは信長の末の姫君を長霧公に緣付、御入輿等に對して奔走する等、當時は信長に近侍し、而して茨木城や伊丹城を駈け廻り或ひは丹波國討伐の將となり武人としては可なり繁忙な生活ではあつたが、其反面に於ては利休の唱導する佗の茶道に指導せられつゝも、常に重勝は幽齋に教示された書院式茶事の方面に獨自な見解をもつて徹した茶の湯の生活であつた。天正10壬午年3月9日信長は家康と共に甲斐の武田勝頼を討伐する際は重勝先手にて出馬してゐる。當時羽柴秀吉は宇喜田氏を從へ中國征伐に赴き備中の高松城を圍み之を水攻めになさんとせし時、毛利輝元等大擧して來援せしかば、秀吉も亦信長に援兵を求め、乃ち信長明智光秀を先發せしめ自分は信忠と共に入京し本能寺に宿した。然るに光秀俄かに叛いて本能寺を襲ひ信長を殺し、信忠を二條城に殺したのである。本能寺の變が秀吉に達するに直ちに毛利と和して、光秀を山城山崎に破つた。時に天正1 年6月13日で、彼の利休が山崎妙喜庵に待庵を造つて秀吉に献茶したのもこの時である。重勝も當時光秀勢を切崩じ戰功を立てゝゐる。斯くて重勝は父重安と共に

信長公に奉仕し、終始戰陣に臨み武將としての生活が其主なるものであつた。天正11年正月秀吉の命により中川清秀と共に勢州へ出馬し龜山城を攻め、同年4月朔日賤ケ嶽に出陣し、天正12年4月小牧合戰の際も、又同13年3月紀州根來の攻代にも中川秀政の後見として出馬し、秀吉公より同年6月27日附で感狀を頂いてゐる。天正13年9月より重勝は上方に殘つて秀吉公の側に近侍し、秀吉公の奥意にて、古田重安の實子平次重續に重勝の嫡女を秀政の養女として嫁せしめ、古田家の養子として後に家系を繼がせた。

天正13年9月重勝は秀吉公より知行三萬五千石を賜はり、山城西岡城主を仰付られ、同時に從五位下に叙せられ織部正に任ぜられたのである。天正15年3月朔日秀吉公九州を平定するために古田織部正、瀨田掃部等を隨へ小隈城を攻め西方一帶を平定し、7月豊前小倉を經て中國を通り歸陣された。天正13年秀吉公は聚樂第を造營するに當り、織部正をしてその建造の主任に當らしめたことは勿論である。是處に於て、織部正の奇才非凡な藝術的著想や、新意匠的構法は所謂桃山時代を代表する豪放、華麗な豊公好となつてあらはれたものである。即ち書院式の端麗な形式と數寄屋の簡雅な手法を最も洗練された意匠として表現してゐる。この頃千利休、天王寺屋宗及、奈良屋宗久、神屋宗湛等も秀吉公に近侍してゐたが、伏見城や聚樂第の設計は到底織部正ならでは爲し得ない構想である　天正16年4月14日御陽成天皇聚樂第に行幸し給ひし際は織部正は秀吉に側近し左行前驅を相勤めた。この頃織部正の屋敷は堀川通三條の南と伏見に在つた。（今は伏見の田近平右衛門屋敷と稱されてゐる所）即ち「織部日記」にあるが如き殆んど連日連夜茶會を催し、數多の大名や武士達を招き、而其茶會の度毎に新規な茶事式を案出し、創作的な茶器を飾り、珍奇な道具を集めて、或る時は利休を招き、有樂齋や三齋を招き等してゐる。奈良の松屋の茶會に屢々通つたのも此時代であり茶法百ケ條を著はし、そして織部好三疊臺目、同二疊臺目等の織部獨特の茶室を造營したのもこの時代であつた。利休は常に自然主義に生きた茶の湯の生活をなし、織部は常に超自然的な審美主義であつた。その頃織部正の門に茶道の教を受けたものとしては近衛信尋公（後陽成帝第四皇子）大野治長、平野屋宗貞、土屋宗俊、本阿彌光悦等があつた。同16年10月朔日（一說には天正15年）に秀吉公の命によつて開かれた北野松原の大茶會には京極高次、細川幽齋父子等と共に茶事を營んでゐる。天正17年4月有馬へ御湯治の節は織部正も隨伴し、同18年3月小田原御討攻の際は利休も秀吉に御供をなし織部正は一武將として出陣した。天正18年11月27日利休は秀吉公の譴責を蒙つて翌年2月13日堺へ閉門蟄居した。利休堺へ赴く時、三齋、織部正は淀まで送り師と訣れを惜しんでゐる　同年2月28日利休は堺で切腹したと傳へられてゐるが、秀吉公譴責の原因は種々傳說はあるが未だ明白ではないのである。

天正年中の末秀吉は正親町院の親王陽光院の第六子八條宮智仁親王のために京都桂に御書院庭園を造營された、それを小堀遠州に一切を任せたと傳へられてゐるが、當時遠州は未だ十二三歲の頃にて到底その任に當るべくもあらず、利休は既に蟄居しこの造營の任に

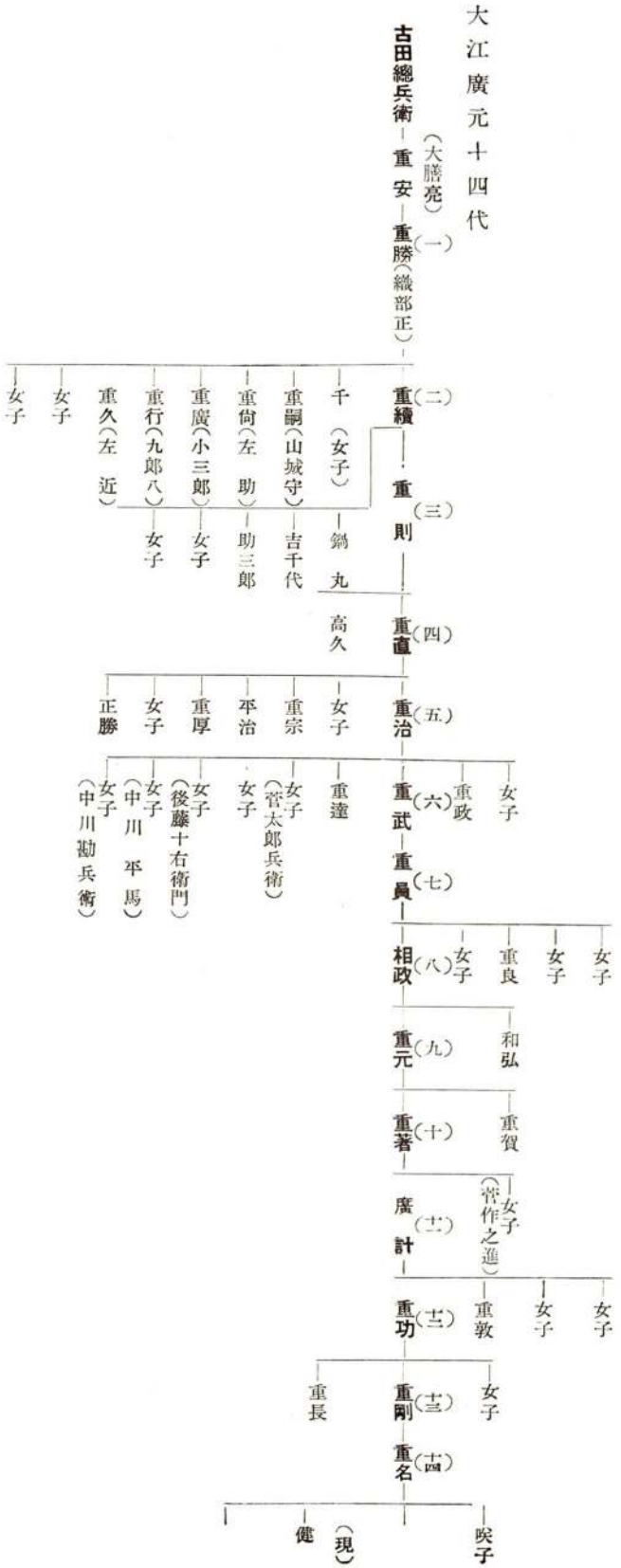
當らしめたものはおそらく當時織部より外に適任者はなく、是處に桂の書院庭園の設計者は織部正なりと考へらるゝのである。（この問題は更に文献と考證的に研究して發表の機あり、第2期造營は勿論小堀遠州が擔當してゐる。）天正19年秀吉朝鮮攻伐のため肥前名護屋に出陣中織部正その本陣にあつて要職を務め、陣中に於て鎧櫃に灰拵へをなし茶を點じ、軍扇にて茶碗を覆ひ、所謂立禮の形式をもつて秀吉に献茶したと傳へらるるはこの時であり、文祿二癸巳年9月秀吉公大阪へ歸陣の節も隨伴した。而秀吉公は織部正に對して曰く、「利休の傳ふる所の茶法は武門の禮儀に薄し、仍りて茶法を改定せられよ」との上意によつて、織部正は是處に於て土屋宗俊を介して紹鷗門の幽琢に茶道の蘊奥を授かりし大野道可に就いて臺子の皆傳及茶事の秘事蘊奥一切を受け、又春屋國師に參して、書院式茶事を主題とする武門に適應する茶法を制定した。即ち織部茶道と稱せられし所以である。文祿3甲午年2月25日秀吉公吉野花見の茶會に於ては、この織部の改定された書院式茶事によつて行はれ、秀吉其他の諸候も感服し、それより各大名武將等織部正の門に入るもの多く出で、慶長3年春醍醐の花見茶會の際もそのすべての執行を織部正が指揮してゐたのである。その時家康秀忠もこの茶會に侍り、秀吉公に對し、織部正を何卒秀忠の茶道指南に乞ひたれば、秀吉公は織部に對し汝の意に任すべしと言はれ、公の眼中に深意あるを早くも悟りて御意を受け、茶會終りて翌日織部正秀吉公に會見言上して「琴の音は松の葉風にありと聞く、常盤の操色もかはらじ」と詠じ、關東に赴くことを約した　慶長3年8月18日秀吉公は病を得て薨じ、織部正は家康と共に伏見城に在つて政務を輔佐してゐた。この頃小堀遠江守政一、佐久間將監、大久保相模守等も織部正の門に入り茶道の教を受けた。秀吉公も織部正の伏見屋敷に御成になつて御茶事の指南を受けられたのである。惟ふに天正16年豊公伏見城を築き聚樂第を造營せられしより慶長5年頃まで約 8,9 年間は織部正の茶道全盛期にて其極に達し、茶室建築造園に關するあらゆる創意著想や、茶事に對する新意を發表したのである。この頃美濃の久尻元屋敷の窯に於て自ら陶器の釉を創始して當時唐物高麗物を珍重して居た頃に、全く獨創的な織部燒を案出して、瀟洒、清新、雅致に富むものを創作してゐる。殊に黑織部燒の如きは全く純日本的な色彩と香りを表現せしめ唐物名物に對抗したのである。即ちあらゆる名物茶器を全く日本化せしめた點に於て、單に目利、尊重、保存を本旨とした他の茶人達よりも遙かに優れてゐると言はなければならない。

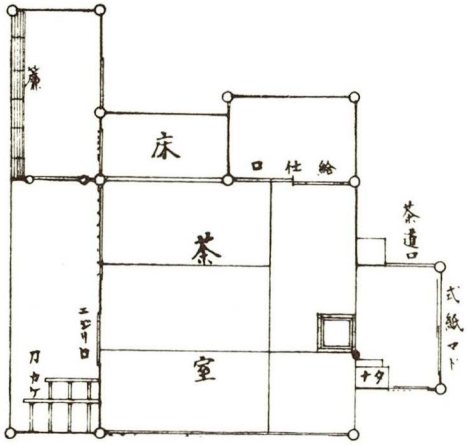
慶長5年7月家康は會津に向つて上杉景勝を討伐の際織部正は伏見城より家康と共に隨伴した。其虛に乘じて石田三成、宇喜多秀家等は伏見城を陷れ進んで美濃に陣した。家康は下野の小山で之を聞きその子秀康を留めて會津に向はしめ、軍をかへして關ケ原に會戰した。この時より織部正の心境に一大變化を與へ、如何に戰國の世と言へ昨日の味方は今日は敵、その嫌はしき世相を歎じつゝも茶禪の眞理に慰められては、過ぐる日の、聚樂第の華麗なりし時や、吉野花見の茶會、醍醐の茶會等を追想して、今は戰場の身の上なることにも深く考へさせられたが、同年9月15日關ケ原合戰の節、福島刑部大輔、大野修理亮等

と共によく戰つた。是處に西軍は大敗して天下は德川の手に期して、再び世の中も平定し慶長8年家康は江戶に幕府を開き、同10年その職を秀忠に讓つて駿府に隱退した。古田織部正は當時金森宗和、細川三齋等と共に武門の茶匠としてその第一位を占めてゐた關係上將軍秀忠は織部正を召して我師となし江戶城へ止ることを促し、同10年4月5日わざわざ織部正宅へ下向あつた。これより織部正は專ら茶道指南として秀忠公に側近し、慶長15庚戌年8月15日千代田城奧の大書院に於て將軍以下18大名に對し、眞の臺子三葵盆六天目臺扱の點前をもつて獻茶式を行ひ同8月19日秀忠將軍に臺子の皆傳茶事一切の蘊奧御傳受申上げたのである。其後江戶城內に於いては法度制度等定められるゝに際し、豊臣氏の殘黨を全部撲滅することの密議秘談が頻りに起り或時は茶事の裏面に隱れて茶室內にての密議も屢々であつた。織部正は乃ち大阪にあつて秀賴の後見を爲しつゝある片桐且元大野治長等の下へ、この密議の報告をなすために飛脚を大阪に向けて走らすこと十數度であつた。この頃德川家においては、豊臣家の財力を減ぜしめんがために方廣寺大佛や、或ひは北野神社其他古寺社の再興等をなさしめたが、所謂「國家安康」の鐘銘によつて家康の激怒をかひ遂に豊臣氏を責め、慶長19年の冬の陣が起つた。翌20乙卯年5月再び大阪方は家康の不信を憤り兵を擧げて夏の陣が起り大阪方の諸將眞田幸村、木村重成等もよく戰つたが、秀賴及淀君も相遂いで自刃し、慶長20年5月7日（元和元年）大阪城は陷落した。これよりさき慶長19甲寅年11月家康、秀忠兩御所が江戶を發して大阪城に向ふ時、家康は織部正が屢々片桐且元や大野治長に密使を出してゐること等も充分知り乍らも、豊公より特に乞ひて秀忠の茶道の師として今日まで江戶に止めたるものなれば、織部正の心境を察し、共に大阪城に迎はしめたのであるが、冬の陣の時は主に京都にあつた。彼れ獨り靜かに考ふるに自分はさきに豊公の知遇を受け、高祿を賜はり、今は德川秀忠將軍に對し茶道をもつて厚遇に預り居るもの、實に進退極まる苦慮のうちに陣中を過したのである。やがて双方和を結ばれて織部正は稍々安堵の胸を撫で下した。そして翌慶長20年の春まで伏見の屋敷に滯在して居たが、德川方の嚴重な監視は織部正の身邊を怠らなかつた。織部正今年73歲の老齡、豊臣の運命將に風前の燈火なるを察し、永祿のはじめ織田信長に仕へ、次いで豊臣德川の諸公に奉仕して過去50年の生活は戰陣と茶道の眞髓に徹底したのである同年4月27日再び大阪へ家康、秀忠兩將軍御進發の其夜京都に於いて出火あり、其科人を召捕御詮議せし處、織部の家人宗喜と云ふ者に似たる者も交つて居たと稱するものがあつて、織部上に御不審を蒙つたのである。兩將軍の出發は4月28日に延期された。5月6日織部正は遠山勘右門、妻木雅樂助、佐久間備前守等と共に枚方合戰にて激戰し、織部正の末男重久は大和田にて戰死した。翌7日大阪城は陷落し、この時織部正は既に死を決心してゐたのであるが、其後京都出火に就き詮議を受け、遂に同年6月11日織部正重勝73歲、長男重嗣37歲父子共切腹を仰付られ、鳥居土佐守成次檢使の下に伏見屋敷にて切腹されたのである。遂いで二男重尙、三男重廣は6月13日に切腹し、四男重行は6月24日切腹した

古田家系圖

大江廣元十四代



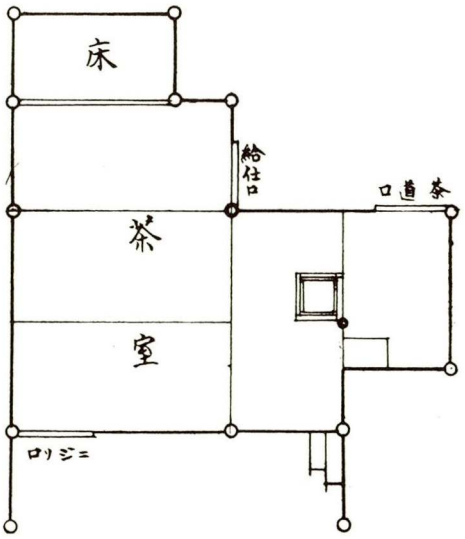


第2圖　織部四疊半臺目

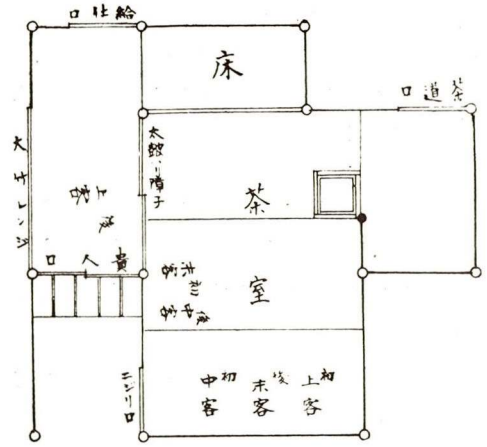
（京都出火の原因は一說に同年5月1日、織部正は大野治長、眞田幸村等謀を合せ、德川家康、秀忠兩將軍京都を發したる後、京を燒拂ひ、諸大名の驚き騷ぐ處を織部の長子山城守重嗣、後藤、木村等と手を分けて兩將軍を襲ひ、手詰の勝負をなさんと云ふ隱謀を企てたりと云嫌疑なりとの說がある、）斯くて桃山時代に於ける武人の茶匠として華かなりし織部正の最後を告げたのである。織部正嘗て春屋國師の命下にて洛陽に菩提寺として、金20貫を寄附して興聖禪寺を建立せしことあり、織部正自刃後、奥方は尼となり京都北野に小寺を建立して青霄院と名づけ、後興聖寺に移り、前記織部正父子の靈を祭り、寛永6年5月29日72歲を以つて逝去した、織部正は雲了院殿金甫宗屋居士と稱し、この金甫の二字は春屋國師の授けたる號で、雲了院は元祿8年6月古田家第5代の藤兵衛重治が高流寺住職の快首座に依頼して院號を追溢し雲了院と稱した。又大德寺三玄院には拜塔を設置されたのである其後前記系圖の通り代々織部正の茶道を傳へて今日に及んだものである。

3. 織部茶室の平面構成

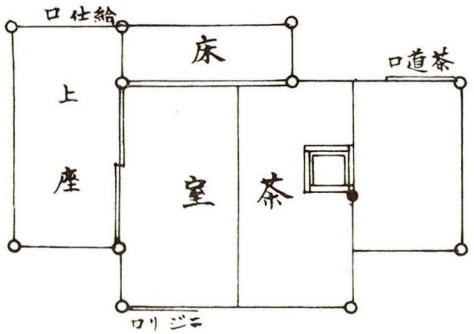
第2圖は織部四疊半臺目席の古繪圖（元祿頃の寫本）の寫しである。名古屋の猿面茶席四疊半臺目席とよく相似し、其當時猿面席は名古屋城內に建てられて在つたものであるがそれを寫圖したものとせば、現存の同席は相當變革されてゐるものと言はなければならぬが、この席はおそらく伏見の屋敷に建てられたものと思はれる。それは「織部日記」に記された茶會の床飾や點茶の形式より考證して斯く考へられる。この平面は當時の利久好四疊半や、利久好三疊臺目席の平面を基礎として織部は自己の內面的生活に適合するやう構成されたものである。躙口が外壁面の中央にあることや、床の間や給仕口の位置は猿面茶席と同一であるが臺目疊の位置が餘程變つてゐる。次に第3圖に示す四疊臺目席は、彌勒の瑜伽論に彼の眼耳鼻舌心意の六識に未耶と阿羅耶の二識



第3圖　織部四疊臺目



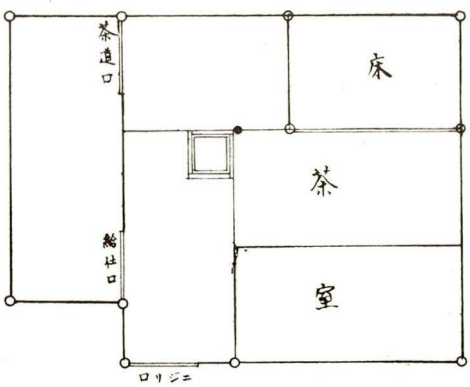
第4圖　織部三疊臺目



第5圖　織部二疊臺目

を加へて、八識となす加上説によつて、奈良の瑜伽山に造らしめた所謂「織部好」八窓庵の平面であつてこれは奈良の大乘院門主某が織部に依頼したものと傳へられ、後世遠州好の八窓庵はこれより出でたるものである。

織部好三疊臺目席は世に織部好の代表的平面とも稱され、即紹鷗時代の行の四疊半構から昔座敷三疊半（實は四疊敷なるも客附より道具疊が半疊丈見える故三疊半と言ふ）形式に變化し、この座敷を利休は道具疊の向ふを1尺3寸7分5厘を切り捨て、爐際の柱より横竹を入れて下を吹抜となし爐際の柱を中柱と名づけ、利休好三疊臺目を創始したのであるが、織部は常に利久の唱導する佗の一徹と、武門の禮儀をこの茶席に加味するために、貴人招請の際における平面構成を爲して、乃ち織部好三疊臺目なる最も特色ある茶室を創作されたのである。第4圖はその略圖を示すもので、即ち下座床にして太皷張障子の外尙一疊敷がありて、貴人招請の時は上段の形式となす。初座には床脇の太皷張障子を明けて通口となし中立の間に右太皷張障子を外して上段の形式となし置き貴人は其位置に座し、茶の時は床脇前に進む、斯く初座後座客の居替りを爲す等、茶席における新意をも創めたのである。この茶席の例として現存するものは藪内宗家にある燕庵の形式がそれであり、且つ織部好三疊臺目席を寫して最近造營された興聖寺內即近亭がある。また名古屋市內岡谷邸內の茶室も織部の遺構として保殘されてゐる。次に三疊臺目席より更に變化して第5圖織部好二疊臺目席があり、また織部好道幸を設けたる織部道幸の間がある。或ひは第6圖の三疊臺目の織部の居間座敷や、其他二疊半臺目向切、或ひは隅爐等の形式もある即ち臺目疊を自由に取扱つて、最も變化に、

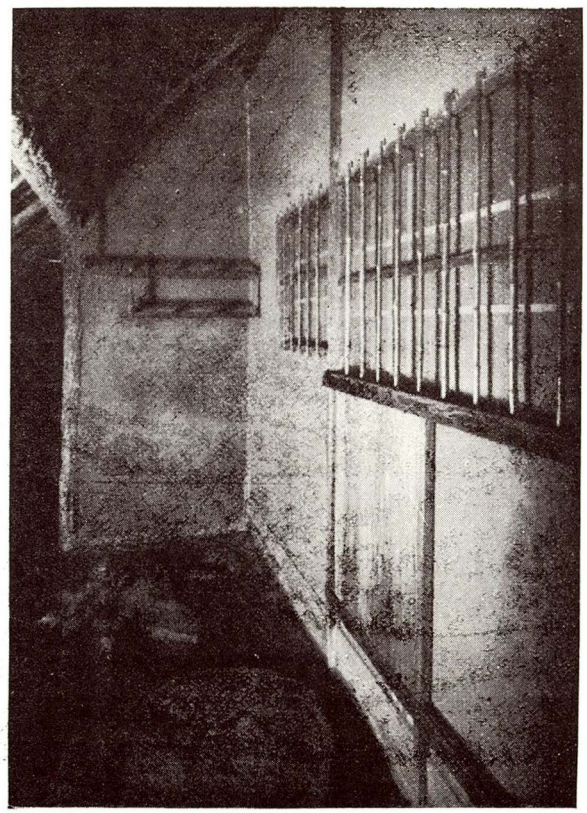


第6圖　三疊臺目（織部の居間座敷）

富む多くの茶室を造つてゐるが、何れも草庵風の數寄屋としても、武家らしい構想が含まれてゐる其他草庵式茶室以外の書院式茶事を主題とする廣間や大廣間、即大書院等も特に織部の意匠として殘されてゐるものもあるが、それは次の機會に述べたいと思ふ。要するに織部好茶室として特色あるものは四疊半臺目、及三疊臺目である。その形式的に稍々確かなる遺構として現存せるものは猿面茶席があり、奈良の八窓庵、藪内家に存する燕庵である。それらを織部の唱導せる茶法式事より見たる考察も述べたいと思ふが、今回は限られたる紙數の爲め遺憾ながらこれにて止め、以下遺構の寫眞を掲載することにした。



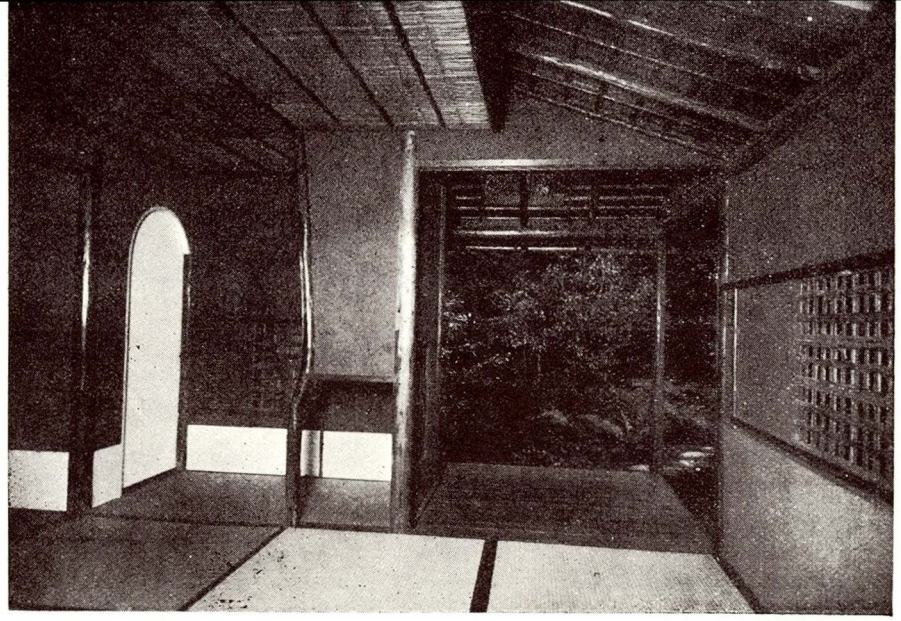
猿面茶席外觀



猿面茶席躙口詳細

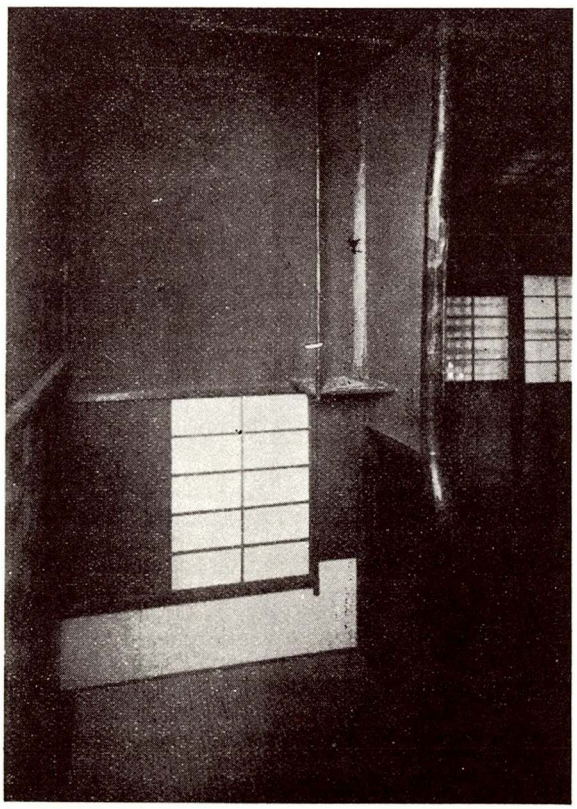
(4)
現存せる織部遺構の茶室と・其形式を寫せる茶室

創建年代　永祿年中
茶　　室　四疊半台目
樣　　式　草庵式
名古屋市鶴舞公園内　猿面茶室



猿面茶席内部

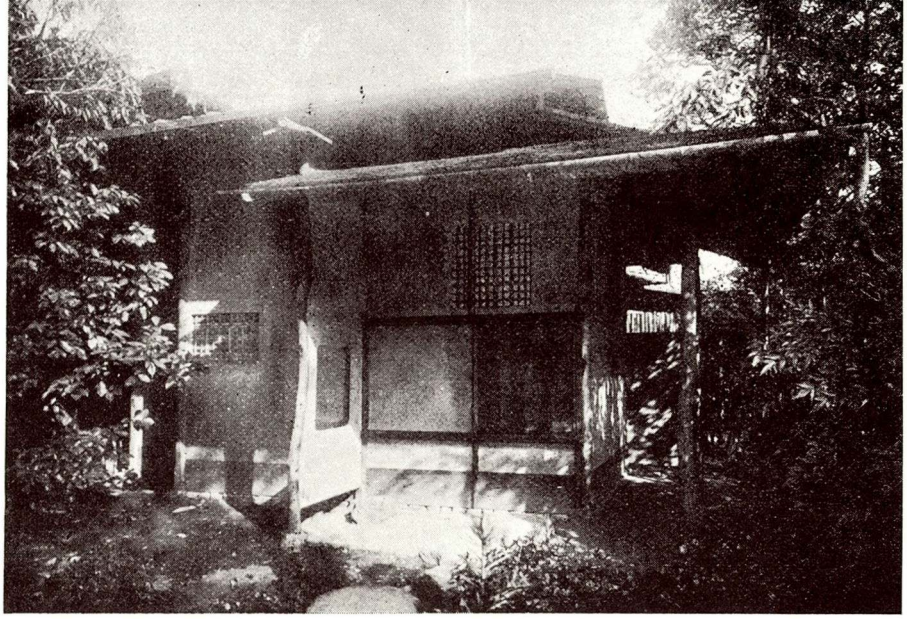
猿面茶席の風爐先



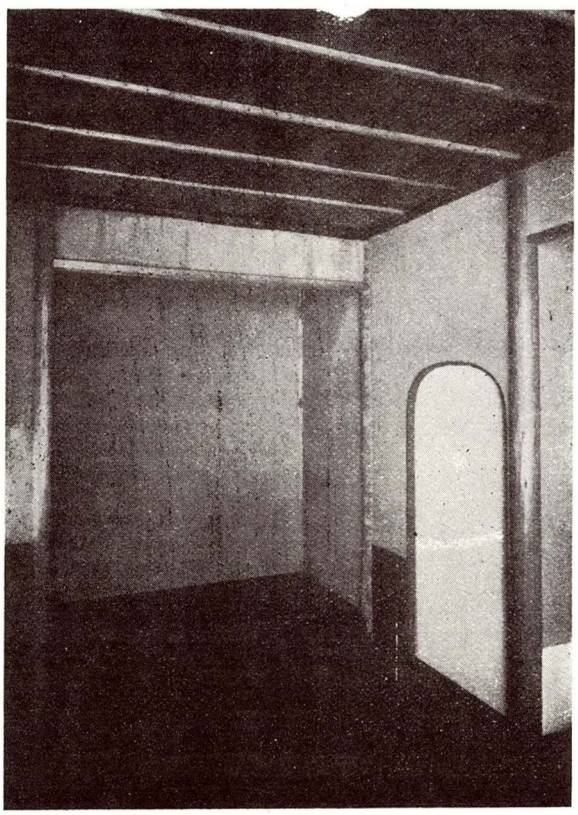
様　式　草庵式
茶　室　四疊半台目
創健年代　永錄年中

名古屋市鶴舞公園内　猿面茶室

興聖寺織部茶室外觀



興聖寺織部茶室內部

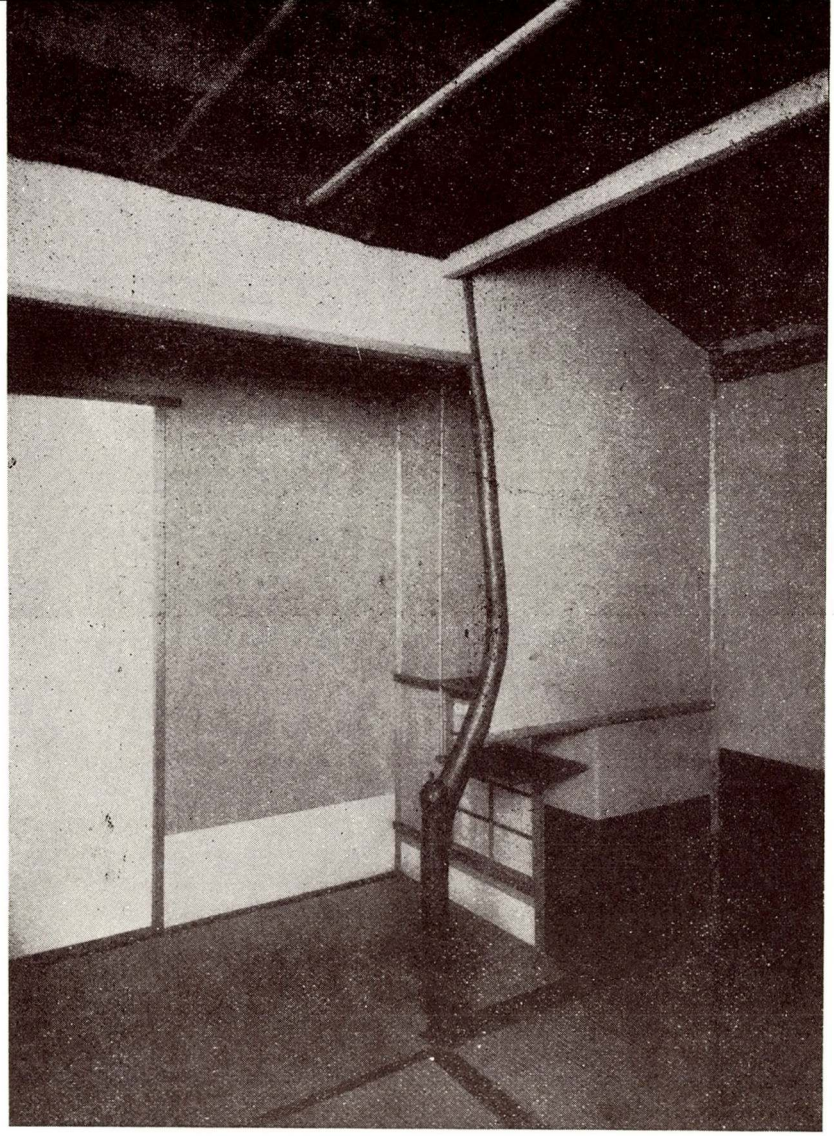


様式　書院草庵折衷式

茶室　三　疊　台　目

古圖三疊台目席を寫す（昭和三年）

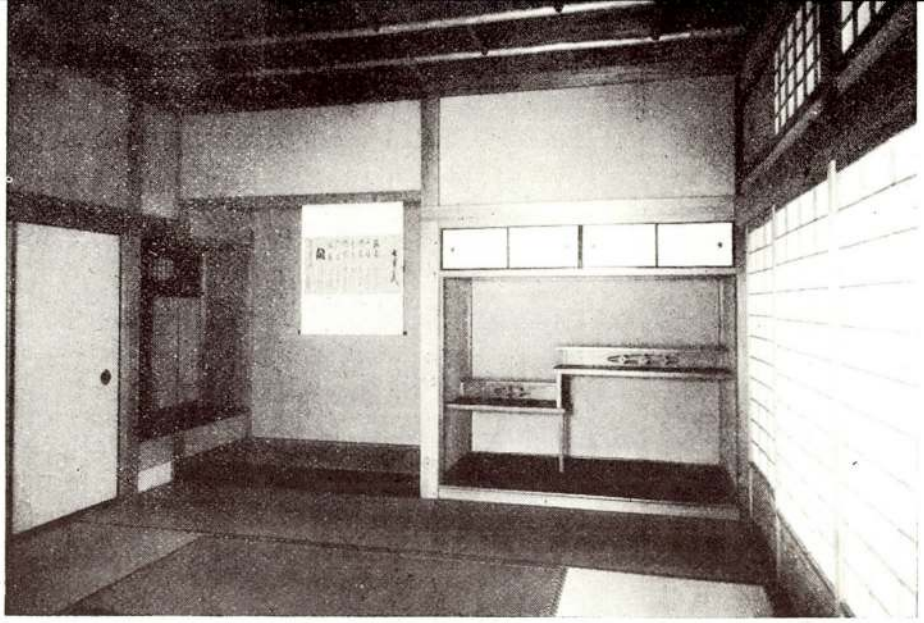
京　都　興　聖　寺　織　部　茶　室



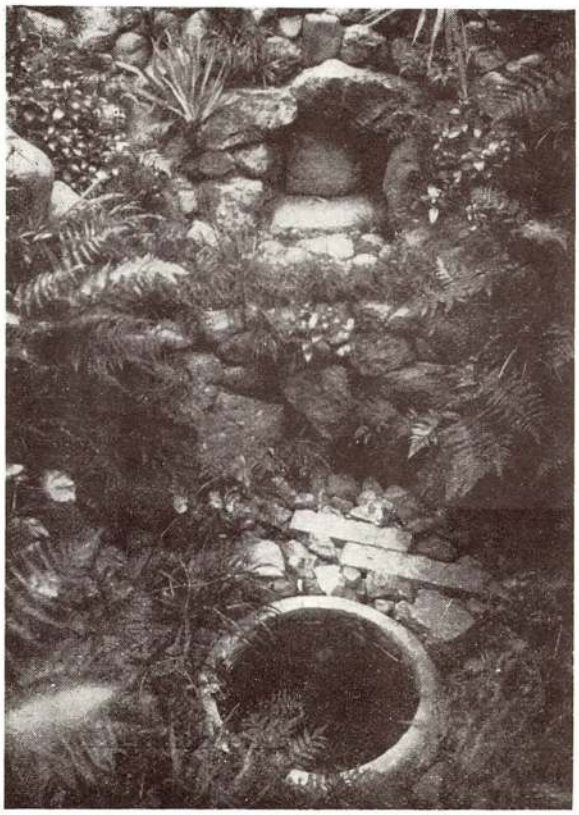
興聖寺織部茶室風爐先

京都興聖寺織部茶室

古圖三疊台目席を寫す（昭和三年）・茶室・三疊台目・樣式・書院草庵折衷式

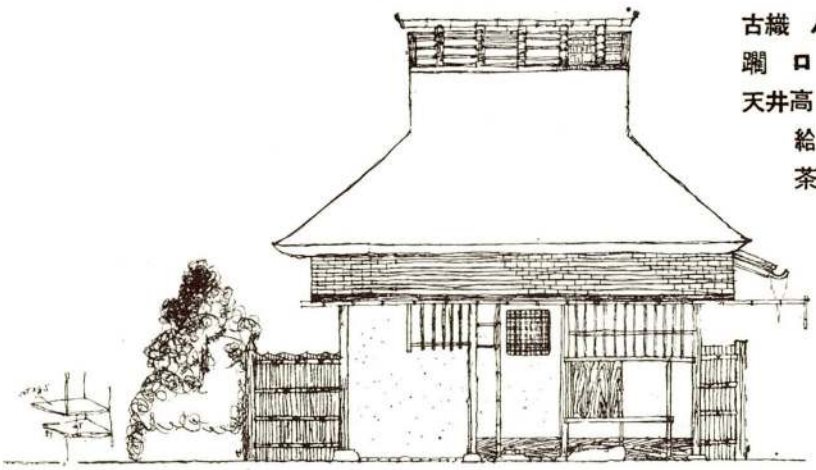


興聖寺織部茶室の廣間

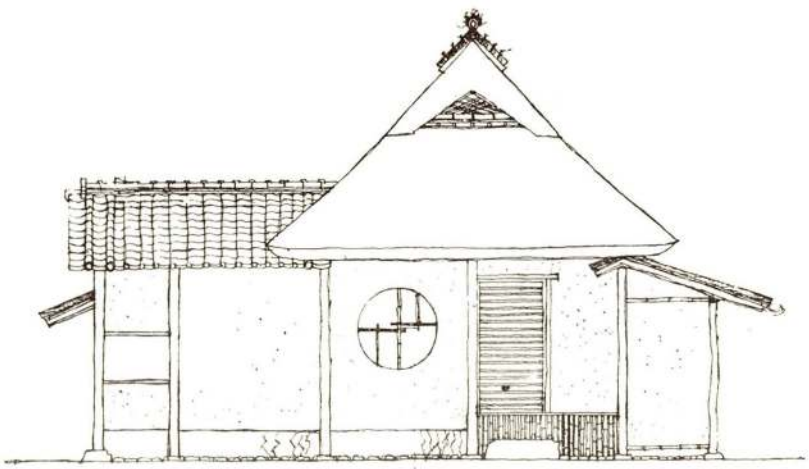


織部好蹲踞（即今享）

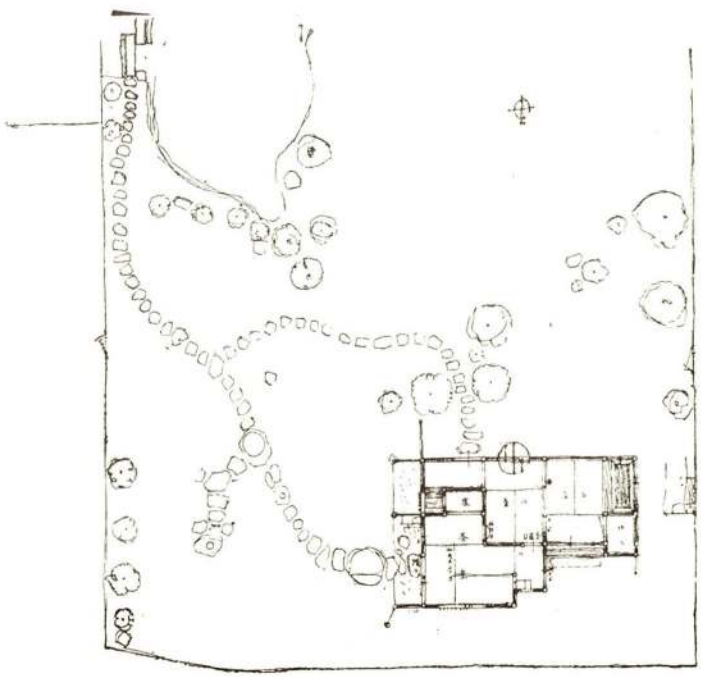
様式　書院草庵折衷式
茶室　三　疊　台　目
古圖　三疊台目席を寫す（昭和三年）
京　都　興　聖　寺　織　部　茶　室



古織 八窓庵 奈良帝室博物館
躙 口 2尺、2尺2寸
天井高 6尺
給仕口 3尺8寸、1尺9寸5分
茶道口 2尺3分、5尺2寸5分
床 高 4尺9寸、巾 4尺
框は黒塗、床
柱杉檜丸太
床 窓
1尺3寸5分
1尺5寸5分
鋸 天 井
天 井 竹棹縁 ハコマ 荻天井



古織八窓庵
奈良帝室博物館



織古八窓庵平面圖
奈良帝室博物館

桃山時代の茶室遺構

澤島英太郎

序

茶室の價値を語る言葉を岡倉覺三氏の「茶の本」及び野口米次郎氏の「藝術の神秘國」から借りる。即ち、「……日本が長い間、世界から孤立してゐたのは、自省をする一助となつて茶道の發展に非常に好都合であつた。我等の住居・習慣・衣食・陶漆器・繪畫等——文學でさへも——總てその影響を蒙つてゐた。苟も日本の文化を研究せんとする者は、この影響の存在を無視することは出來ない。茶道の影響は貴人の優雅な閨房にも、下賤の者の住家にも行き渡つてゐた。……」(茶の本)

又「この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は日本の古文化が極點まで發達した所のもので、自然と人生を融和させてそれを單純化させた日本人の態度は、彼等外人のこれまで夢にも見なかつた所の物であらう。しかし私は外人が日本で一番特色のあるものは何であるかと尋ねたならば私は直に茶席を擧げる」(藝術の神秘國)と兩氏は述べてゐる。味はふべき言であると思ふ。

以下少しく茶室建築の發達した桃山時代の茶室遺構に就て述べやう。

I

桃山時代に於ては、今更に茲に繰返すまでもなく、累代最高文化の象徴たりし佛教も漸やく衰微して政治の實權を握る階級の支持を失ひ、社會制度亦大いに改變を受け、中世より近世への大きい轉向を見せた。其間足利氏滅亡の天正元年から豊臣氏滅亡の慶長 20 年(元和元年)迄の僅かに半世紀に足らぬ短かい時代乍ら、疾風怒濤の如く破壞と建設との事業が一時に歷史の境域に行はれた時であつた。

建築史上にあつては既にその中心が宗教建築を離れて、宮室及城堡建築に移り、わけても茶室建築が飛躍的な發達を遂げてゐるのが注意を惹く。茶室は更新の時代に興りし新しい建築であつたのである。

從來建築史の上での桃山・江戸時代の名は、飛鳥・天平より鎌倉に至る各時代の名が、夫々各時代の優秀な作品をすぐに聯想させるに對し、稍ともすれば徒らな華麗に充ち、末梢的な技巧に墮した建築のみを聯想させたかの憾がある。事實一面に於て「日光や京都二條の城に於てはアラビヤ式又はムーア式華麗を盡した力作にも等しい様な、色彩の美や精巧を極めた澤山の裝飾のために建築構造の美が犧牲にせられてゐた」(茶の本)と認められても致方がない建築があつた。

思へば武を以て身を主君に致し、身に負ふ刀槍の創痕に昔日の武功を誇るものが、權力と富力とを兼ね有する身となつて、逐ふ所終に本能の滿足にあらすんば、露骨なる金銀五彩の色に外ならず、邸第の建築意匠の新調唯金碧青綠の燦たるを競ひしも、あながちに無理ならぬ次第であつた。又さうする事が簡捷な威壓の方策でゝもあつたらう。

然し戰國擾亂の世に人となれる武將ではあつたが、信長、秀吉等の英傑が他面「茶道」なる風雅の道を嗜み、又優れた美術の愛好者であつた事は幸であつた。從つて他面に「アテンのアクロポリスやパルテノンに比肩すべき日本の古典的な建築」（ブルノ・タウト：ニッポン）であり、「何代かの永きに涉る醇化に依つて、あらゆる個性とか遇然性から脫化したフオルムであり、一つの完成された“木·竹·紙”造建築のテクニツクである。」（同書）とまでの感激を與へた桂離宮が營まれつゝあつた。又其他の邸第や樓閣が濶達な力强い發達を遂げつゝあつた。簡雅な茶室もその優れた構成を誇つてゐたのである。（註：尙茶室は個性の尊重された建築であつて タウトの評は茶室に關する限りに於ては適切でないと思ふ）

かく今日遲蒔乍らその周到な計畫や雅致ある意匠を世界に注目さるゝ立派な建築が、着々と創り出されて、利休や織部正や有樂・遠州の如き名匠を輩出し、皇室には畏くも特に風雅の道に御湛能なりし後水尾天皇御在位あらせられて、一時期を建築史の上に畫しつゝあつたのは、實にこの桃山から江戶時代初期へかけてなのであつた。

豪華な桃山藝術が他の一面にかゝる閑雅靜寂な「唯美・主義の宗教」に醇化された美と共に榮えた事は、その時代の抱擁力の大きさ、その文化の幅の廣さが窺はれてまことに興味が深い次第である。

2

扨て桃山時代の茶室遺構を揭げる前に、一應かゝる時代に發展した茶道の隆盛せし因由と考へらるゝ概要な3·4の核心と、茶室の背景をなす思想とに觸れる事が必要であると思ふ。

後述する如く茶室を制約する茶道には深い意義が含まれ、且此のことが充分に了解出來ないならば、中世紀以後現代にまで貫流する日本美術の最も優れたる眞の姿は到底確實に把握し得ないといつて過言でない。

次に茶道がかく桃山時代に勃興普及せし要因を簡潔に要約すると次の如くである。

1. 茶道の興隆は室町時代以後の趨勢であつた。卽ち旣に「東山時代は曾に茶の湯の歷史に於て一新時期を畫した時代である許りでなく、其文化は茶の湯を中心として展開〜たものといふ事が出來る。」（三浦博士監修：堺市史）位であつた。
2. 應仁亂後荒廢しつゝも尙文化の淵叢たりし京都と、當時貿易港として豊かなりし全盛期の堺及び再興の博多の文化との交流。
3. 茶の湯の精神が禪の思想に基づく所多く、詩人の趣好に適してゐた爲甚しく迎へられた事。
4. 信長、秀吉の政策、殊に秀吉の茶趣味政策とは重要政策の一として、史家の必す揭ぐる所である。かくの如く封建時代の支配階級の政策として奬勵された事が茶道の勃興に非常に力强い原動力を與へてゐる。

上揭以外に細目の理由も色々あらうが、主たるものは大體上記の如くであらう。其の中

2 の堺及び博多は茶道發展の上には輝やかしい位置を占めてゐる。殊に堺には、紹鷗等斯道の先輩がこの地に住し、又茶に要する名器珍什が支那其他の諸國からこの地に舶載され尙又交易に依り富を聚めた富裕な一般庶民の間に一の教養として、茶の湯が澎湃たる盛を示してゐた爲、有名な茶人を多く輩出し、京都と肩を並べて茶道數寄者の淵藪であつた事實を注意しなくてはならぬ。博多も略、之と同じ意味に於て注意すべく、又神屋宗湛や島屋宗室の如き豪商で、且秀吉の征韓役に際し重要な政治的役割を務めた有力な數寄者を出してゐる事も亦見逃してはならないのである。

3 項は大德寺と茶道との關係に於て明瞭に認める事が出來やう。禪要三昧に耽りし大德寺派の寺院は、室町時代末期に至り、漸次その文化藝術の鋒鋩を顯して、こゝを中心として大いに茶道が勃興した。例せば茶の名匠が寺中の師に禪要を諮らひし數例を擧げても

茶　祖　珠　光——大德寺一休宗純

武　野　紹　鷗——同寺塔頭大仙院古岳宗旦

千　　利　休
古　田　織　部　——大德寺古溪宗陳

小　堀　遠　州——古溪及び江月

の如くであつて、禪との深い關聯を知り得るのである

茶室の背景をなす思想は、上述の要因から略推察出來る其處には日本人の傳統と性質である淸潔無垢を崇ぶ特質が見られる。又雅致を尊ぶ思想は均齊を嫌つて美を一段と高い段階に進めた。「禪の個性主義が勢力を得るにつれてその考へは茶室に聯關して考へられ」てきてゐた。(註、尙是等の點に就ては堀口捨己氏の著「茶室の思想的背景と其構成」(建築樣式論叢) 中に適確に叙べられてゐる、就て參照されたい。)

かゝる背景のもとに茶室は "**茶の湯なるヱチケツト或は生活に對し、驚くべき精緻さを以て、平面・構造・意匠・材料・採光等の各々が、用途に極めて忠實に考究された合目的な建築**" として、"**獨創と個性の崇ばれる建築**" として、"**閑雅淸楚な人をして心眼を開かせ且落著かせる空間を圍む壁建築(マウエル・バウ)**" として、又 "**自然と人生との——庭園と建築との極めて完全に融合せる營み**" として構成され發達した。是等の具體的な實證は他の機會に稿を更めて說く心算であるからこゝには省略する。

3

前置が大變長くなつた。以下桃山時代の茶室遺構數例を表示し、寫影と相俟つて簡明に說明しやう。蓋し此種の遺構は多くの茶室が「茅茨の座敷」たる草庵である爲、極めて腐朽損壞し易いのと、其の管理維持に人を得なくては到底長年月の保存が困難である爲、多くは其跡さへとゞめぬ中にあつて、幸に現在まで災を逃れよく保存され、以て創建當初の俤を偲び得る極めて遺重な建築なのである。帝室及び國寶のものは漸やく半數であるが、未指定のものも何れも國寶級の立派なものである。尙昨年の颱風で高臺寺の時雨亭が倒潰

し現在徒らに日を過せば、この名席も潰滅の已むなきに至るであらう事を恐れる。早く復舊保存の道を講じて悔を後世に遺す事無きやう識者の注意を促したい。

桃山時代の茶室遺構表　（昭和10年9月）

名稱	所在地	作者	年代	摘要
（傳清洲城遺構）猿面茶室	名古屋市鶴舞公園内	古田織部好	元龜以前	4帖半臺目　茶室
待庵（タイアン）	京都府乙訓郡大山崎村妙喜庵内	千利　休好	天正10年頃	國寶建造物　2帖茶室
（傳聚樂第遺構）飛雲閣茶室	京都市下京區本願寺門前町　西本願寺境内		天正14～15年	國寶建造物　閣の初層東北に附屬3帖半茶室
（傳聚樂第遺構）臨春閣	横濱市中區本牧町原邸内		〃	國寶建造物
（傳聚樂第遺構）枕流亭	京都市伏見區醍醐三寶院境内		〃	3帖茶室
湛浩庵（タンユウアン）	福岡市天神町25番地平岡邸内	神谷宗湛好	文祿元年頃	3帖半茶室
東陽坊茶室	京都市東山區建仁寺通町建仁寺境内	東陽　坊好	天正15年前	2帖臺目茶室
（傳伏見城遺構）傘亭及時雨亭	京都市東山區下河原町高臺寺境内	千利　休好	文祿3～4年	單層及重層茅葺の茶室
春草廬（シュンソウロ）	横濱市中區本牧町原邸内	織田有樂好	〃　？	國寶建造物　3帖臺目茶室月華殿に附屬
（傳伏見城遺構）月華殿	同上		文祿3～4年	國寶建造物
八窓庵	奈良市奈良公園帝室博物館構内	古田織部好	？	4帖臺目茶室
湘南亭	京都市右京區松尾町西芳寺境内	千少　庵好	慶長年間	國寶建造物　4帖臺目茶室
蔽芾堂及び茶室泰慶堂（ヘイヒ）	大阪市浪速區鷗町三丁目1101番屋敷　願泉寺境内		元和元年前	書院廣間及3帖臺目茶室伊達政宗建之
如庵（ジョ）	東京市麻布區今井町三井男邸内	織田有樂好	元和2～3年	略3帖半大茶室・又曆席（コヨミ）と稱す

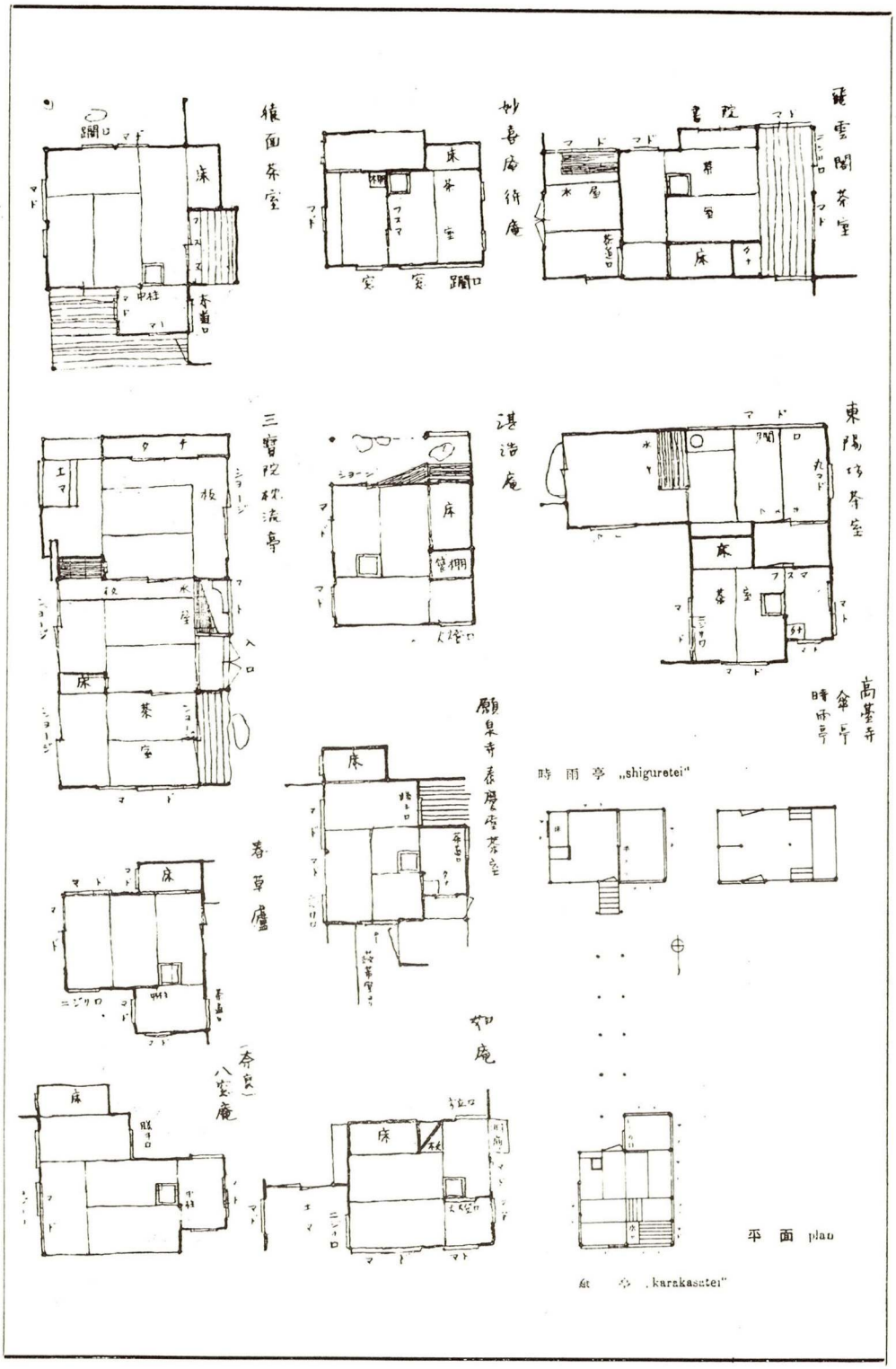
註　1:—　原邸内臨春閣及月華殿は邸宅建築と見る方が當然でこの表に含めるのもどうかと考へたが臺子ノ間等あり茶室の廣間と考へて加へた。

註　2:—　上記の他桂離宮の建物の一部をもこゝに入れるべきであるが尙研究を要するので割愛した。元龜以前及元和のものを入れたのは桃山時代と看做す方が妥當であるからである。

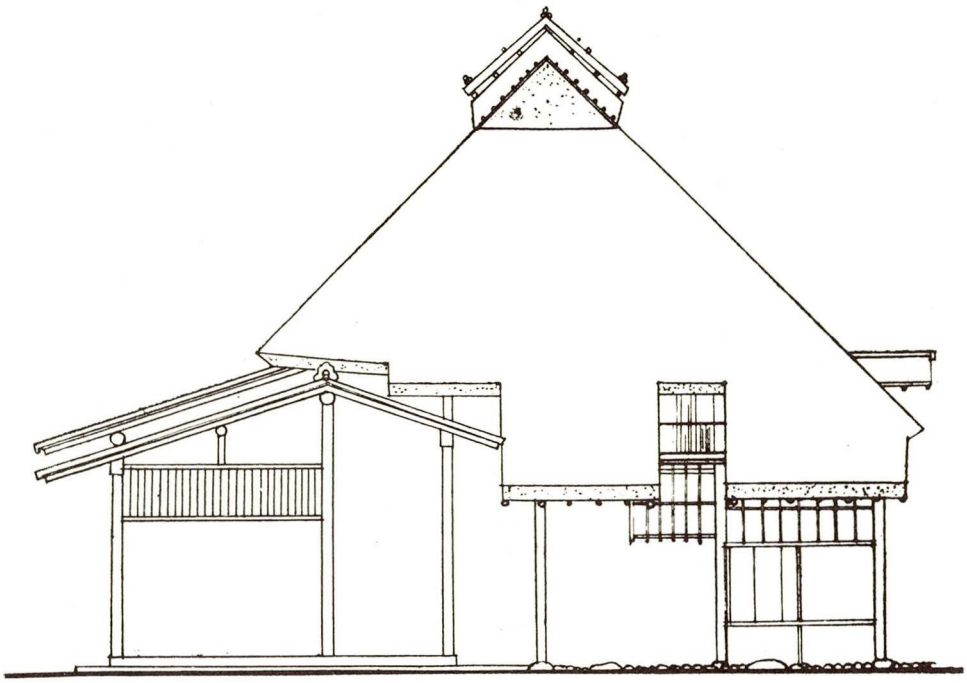
註　3:—　利休好の席でこの時代の遺構と考へられてゐる堺市南宗寺實相庵がある。然し今手許にある資料によつてこの所説を直ちには肯定し難いので他の機會に讓りたい。

尙作者は不詳乍ら京都市大德寺聚光院閑隱席はこの時代のものと考へていゝと思ふ。

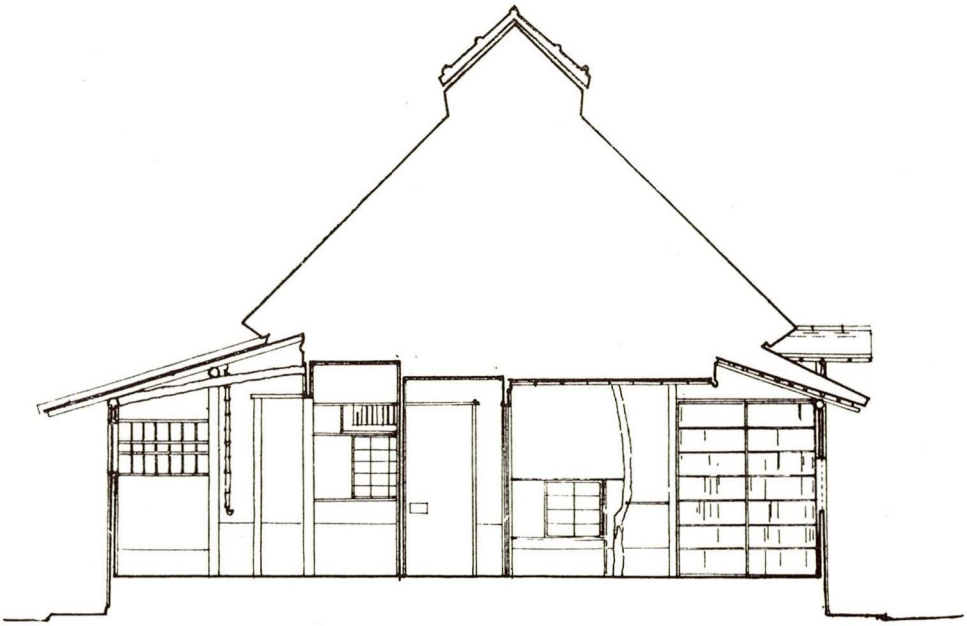
註　4:—　この他尙當代に屬する遺構と稱するものがある。又この時代に含めた方が適當と思はれるものもある。調査研究の上逐次補ふ心算である。



前表各茶室の平面圖　（昭和10.9. 澤島）



第 1 圖　猿面茶室立面圖



第 2 圖　猿面茶室斷面圖

表に記載した順序に從ひ說明すると。

猿面茶室　（第1圖及第2圖）

猿面茶室は創め清洲城（弘治元年永祿6年間信長居城）內に建てられたといふ。以前名古屋市中區門前町の商品陳列所構內にあつたが、近年鶴舞公園內に移建された。

席は四帖半台目で、平面は織部好の特徵をよく現はし、床の位置臺目疊附近の中柱や茶道口、勝手口の布置等注意すべく、台目疊の外に板椽があるのも變つてゐる。

妙喜庵　（第3圖—第4圖參照）

利休作の唯一の遺構として、且2帖隅爐の茶室として由緒正しい名だたる席である。天正10年8月秀吉山崎にて明智光秀を征討したる當時利休之を建てたと傳へられる。2帖茶室の西に、1疊板入の間があり、茶室の爐と袖壁を隔てゝ釣棚がある。席が狹くて而も躙口が普通より大きく、又床が壁、天井全部隅々を塗廻してあるのと、茶室の天井の意匠が變化が多いのを注意すべく、他に類例を見ない貴重遺構である。

飛雲閣惜音亭　（第5圖—第7圖）

西本願寺滴翠園中にある飛雲閣の茶室「惜音（イクジヤヤ）」亭に就ては、閣の記述中これに言及せるもの殆ど無く、相當重視すべきこの茶室が從來割合に閑却されてゐるのは遺憾である。この茶室が飛雲閣の建築當初からこの位置に續いて建てられたものか、或は移建後建增されたものかに就ては尙疑問の節があつて、遽かには斷定し難いが、平面の形式から見て、又內外の意匠から見て、當時代のものと考へられる。外觀亦本屋とよき階調を保つて瀟洒である。

席は閣の初層船入の間の東に水屋の間を隔て續き、又滄浪池の東岸池畔の飛石傳ひに腰掛「胡蝶亭」及潜りを經て、茶室東側の躙に達する樣になつてゐる。室は3疊半であるが躙口內部に板張りの相伴の席がある。第7圖に見る如く左に床を設け池に望んで出書院を作つた平面で、「臺灣產の蛇木」と稱ふる珍らしい床柱と、壁色に臙脂系の袋赭色を用ひたのは茶道の數奇の一面を語る興味ある資料である。是と共通するものを枕流亭內部（第15圖）にも見る事が出來る。

室の外側の刀掛の意匠も特徵あるものである。

臨春閣　（第8圖—第11圖）

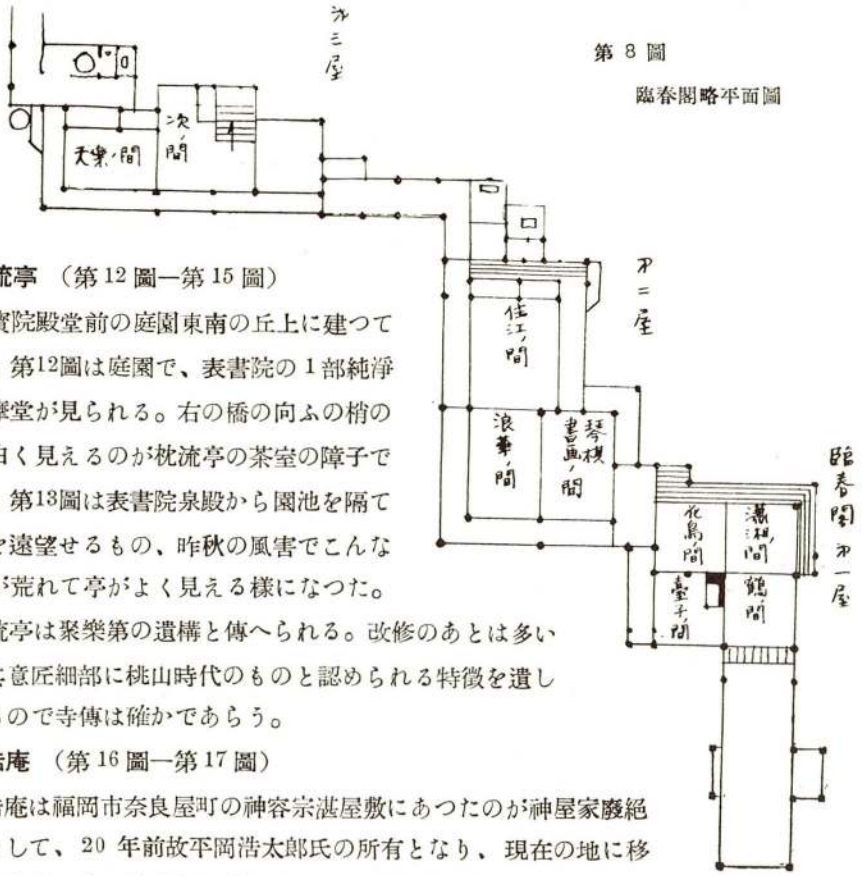
閣はもと豊公が華美を盡して經營した聚樂第の北殿附近に特に苑池に臨んで經營された別殿であつたといふ。千利休の意匠になつたともいはれる。

聚樂第が廢されるや文祿4年伏見城內に移建され、後幾變遷を經て明治3）年原氏の有に歸し、大正4年現在の地に建造修營されたもの。

現在の平面は第8圖の如くであつて、第9圖で向つて右に見える第1屋は瀟湘、花鳥、鶴の間、台子の間より成つてゐる。意匠は瀟洒、輕妙、飛雲閣と共に桃山時代別業風建築の雙璧である。第11圖は第1屋台子の間內部、その水屋の取扱ひは頗る巧妙である。

第 8 圖

臨春閣略平面圖



枕流亭　（第 12 圖—第 15 圖）

3 寶院殿堂前の庭園東南の丘上に建つてゐる。第12圖は庭園で、表書院の 1 部純淨觀護摩堂が見られる。右の橋の向ふの梢の間に白く見えるのが枕流亭の茶室の障子である。第13圖は表書院泉殿から園池を隔てゝ亭を遠望せるもの、昨秋の風害でこんなに庭が荒れて亭がよく見える様になつた。

枕流亭は聚樂第の遺構と傳へられる。改修のあとは多いが、其意匠細部に桃山時代のものと認められる特徴を遺してゐるので寺傳は確かであらう。

湛浩庵　（第 16 圖—第 17 圖）

湛浩庵は福岡市奈良屋町の神容宗湛屋敷にあつたのが神屋家廢絶後轉々して、20 年前故平岡浩太郎氏の所有となり、現在の地に移され、宗湛の湛と浩太郎の浩とをとつて湛浩庵と名付けられた由である。

3 帖半の茶室で、特に名器博多文琳を納める袋棚が床脇に設けてある。貴人口あたりの手法も變つてゐる。博多にとつては由緒深い名席で茅葺の閑雅な草庵である。



時雨亭倒潰狀況　　（昭和 9. 12. 3 撮）

東陽坊茶室（第18圖—第19圖）

京都黒谷眞如堂の僧で利休の弟子中尤も佗數奇の名にあつた東陽坊が天正15年の北野大茶湯の以前に北野の地に建てたものと傳へられる。現在の建仁寺方丈裏に移される迄には隨分轉々としたので、茶室以外は隨分補修が加へられてゐるが、茶室はその平面及中柱天井等の意匠手法に尙よく當初の俤を存し佗びの風趣豊かな草庵風の2帖臺目茶室の好例である。

傘亭及時雨亭（第20圖—第21圖）

高臺寺の靈屋の上、洛東を瞰下する山中の樹梢中に建つてゐる。元伏見城にありし茶亭を此山内にいつの頃か移建したものといふ。傘亭は單層、時雨亭は2層でこの2亭の間輕快なる土廊を通じ、何れも茅葺で、佗びの趣深き茶亭である。

傘亭は正しくは安閑窟といひ千利休の好に成るもの、屋根裏の構造其他に特徴ある席である。時雨亭も亦その平面や床其他の意匠卓越せる亭榭である。

春草廬（第22圖—第23圖）

伏見城内に建てられ、同城取毀の際宇治の茶商上林三入に與へられ、後上林家より同所三室戸寺金藏院へ寄附されたといふ。當茶室はもと月華殿に附屬してゐたもので、大正7年共に金藏院より原邸に移建されたもの。

傳ふに織田有樂の作であるといふ。九窓あり九窓亭とも呼ぶ。茶室は三帖臺目の好例で如庵と共に有樂齋の好みになる遺重遺構である。

月華殿（第24圖）

上述の春草廬と共に原邸に移建された。沿革は前者と同じである。數奇屋風の書院造で透彫の欄間等注意すべきもの。

八窓庵（第25圖—第26圖）

此茶室はもと大乘院門跡の庭園内にあつたものである。奈良の四軒寺慈眼院の茶室六窓庵（現在東京帝室博物館構内にあり、金森宗和好）及び元の四聖坊のオキロクと稱する茶室（東京市麻布井上公邸の八窓庵）と併せて大和の三茶室と稱へられたものの一つ、明治25年現在の奈良帝室博物館構内に移設された由である。席は四帖臺目で別圖の如くであると記憶してゐる。床の兩脇に壁があつた様にも思つてゐる。先年急いで見せて貰つたのみでノート等ないので、其中よく確かめたい。

同じ織部作の猿面茶室や京都市西洞院正面下藪内紹智邸の燕庵と比較して味ふべき點が多い。燕庵は織部の邸にあつたのを寶暦頃現藪内邸内に移建した由で、露地の庭石等はよく舊趣を傳へてゐる。

湘南亭（第27圖—第31圖）

亭は正しくは湘南亭及茶室松庵と名付くるのが本當であらう。即ち池に面せる三方開放土天井の廣椽が延元4年夢想國師創建にかゝる湘南亭であり、慶長中千利休の第2子少庵

がこの湘南亭を再興同時に茶室松庵を附設したものである。

茶室は4帖臺目の席で、點前疊にすぐ接して床があり、又入口脇に出書院が設けられた特徴のある平面である。苔蒸す幽寂の西芳寺庭中に建つ枯淡閑雅なる趣致は到底筆紙に盡し得ぬ。

薇芾堂及茶室泰慶堂（第32圖—第33圖）

願泉寺の31世定龍茶道を善くし、豊臣氏の大阪に居城するや諸公大夫士就て茶禮を學ぶ人多く、伊達政宗公も其一人であつた。秀頼滅亡後公の封地に歸るにあたり、その第舍茶室を定龍に贈る、當寺上記の建物がこれである。

客殿は書院造でその一部に爐を切る。茶室は三疊臺目でよく古趣を存してゐる。

如　庵（第34圖—第35圖）

創め建仁寺塔頭正傳院に建てられた。明治初年東京三井邸に移建され、今もよく舊觀を保つて完存してゐるのは喜こばしい。織田有樂（信長の弟で有樂齋如庵と號した。元和7年70歳沒）の好で、室内の壁の腰貼に古曆が貼つてあるので古曆の席とも呼ばれる。

躙口が屋根下玄關土間の様な所に面してゐる事や、茶室内床脇に三角形の床板が入つてゐてその爲に斜の壁が出來てゐる事、又爐の隅角に柱があつて、火燈形を刳抜いた杉板を嵌めてある手法等、變つた平面とその構成には頗る特徴がある。

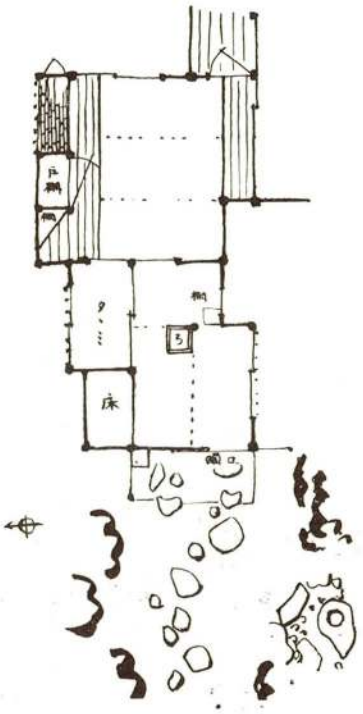
（昭和1?.9.7 澤島英太郎）

松向軒と蓑庵

藤原義一

〃建築と社會〃の本年7月號鄉土建築特輯號に於て、京都近郊茶室の名席2,3を紹介した。本稿は云はばその續きで、相變らず拙い寫眞を並べることを許され度い。

大德寺山內には天下に聞えた名茶室が多い。孤蓬庵忘筌及び山雲床の席、眞珠庵庭玉軒等はあまりにも名高い。松向軒や蓑庵は知る人は知り知らぬ人は知らぬ程度だが、淡雅な草庵で、巧みな意匠に成るところが甚だ多く、且つ兩者は頗る相似て、而もそれぞれ特色を有するものである。



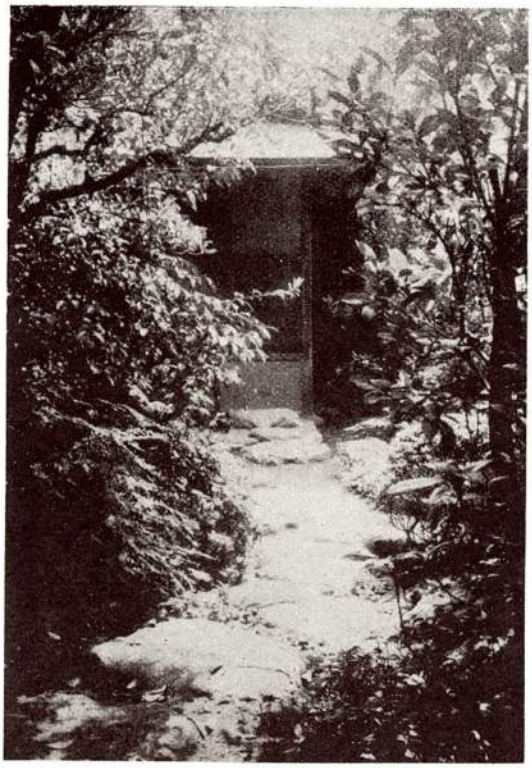
1・高桐院松向軒

松向軒は大德寺塔頭高桐院の庭內に在り、細川之齋の好みに成ると傳へられてゐる。路地の奥に切妻屋根を正面に見せ、そこに躙口を開き、內部は二疊台目の茶室とその奥に三疊の水屋がつゞき、一部修補の箇所もあるが江戸初期の甚だ古淡な味はひを漂はせてゐる

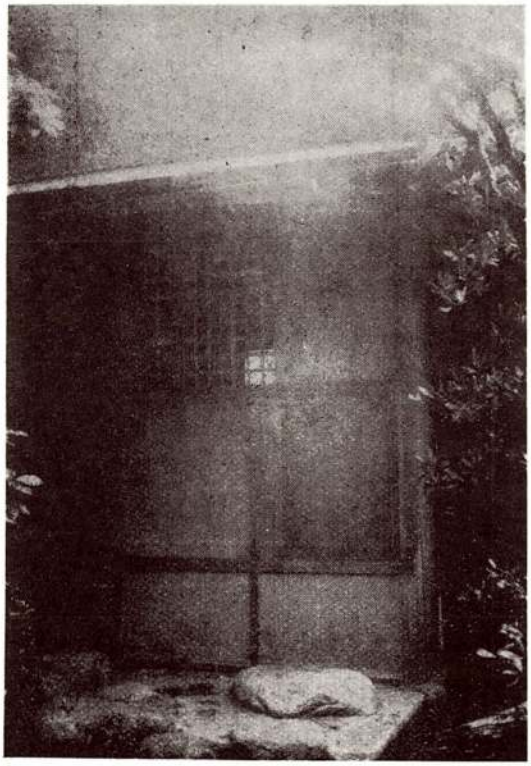
2・松向軒路地

松向軒の路地は實に靜寂である。苔は豊かに生ひ庭石にはえも云はぬさびが出てゐる。高桐院の庭を廻つて、此路地を向ふから來て、燈籠のところを右へ（寫眞では左に見える）折れて茶室に至る。









3（上左）・松向軒路地

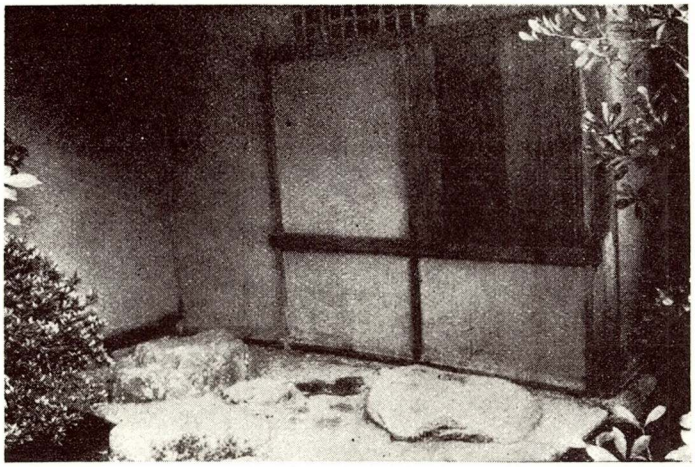
第2圖燈籠の後ろの路地から茶室の方を見たところ、飛石の雅致と配置の巧みさは、數ある京都名庭園中でも尤なるものである。

4（上右）・松向軒路地蹲踞

第3圖の庭石傳ひに茶室に至る右方に蹲踞即ち手水鉢がある。大きな礎石形の石に水鉢を掘り周りに樹石の配置よろしく、後方に織部燈籠を配してゐる。

5（下）・松向軒入口

路地の突當り、土間廂があつて潜口が造られてゐる。潜口の上方に粗い下地窓をあけ、その左方袖壁の隅のところには謂ゆる刀掛けの小棚が設けられてゐる。



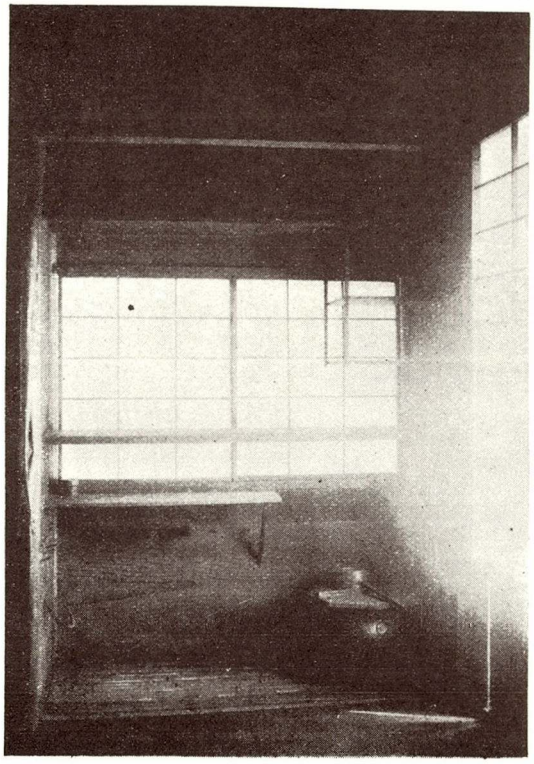
6・松向軒躙口

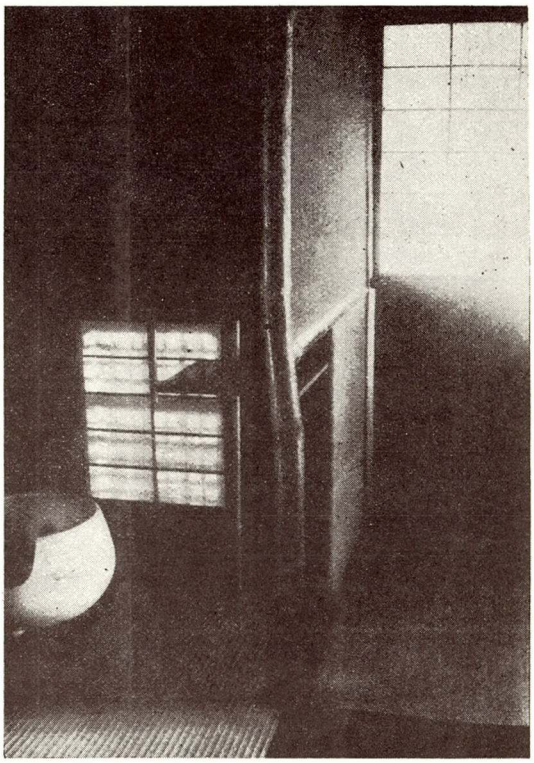
躙口と上方下地窓との關係が如何にも無雜作に出來てゐる。

土間廂の石の配置も極めて自然に狹い場所を巧みに處置してゐる。

7・松向軒內部

躙口を入ると二疊台目の茶室で、第1圖に示す如く、中柱の角に爐を切り、手前疊、隅棚、風爐窓等の關係が實によく出來てゐる。一方に床を造り、床脇は襖で一疊の疊廊下となつてゐる。天井は躙口を入つたところ掛込天井、床前は竹竿縁に杉薄板張り、手前疊の上は竹竿縁にまこもを用ひてゐる。





8・松向軒水屋流

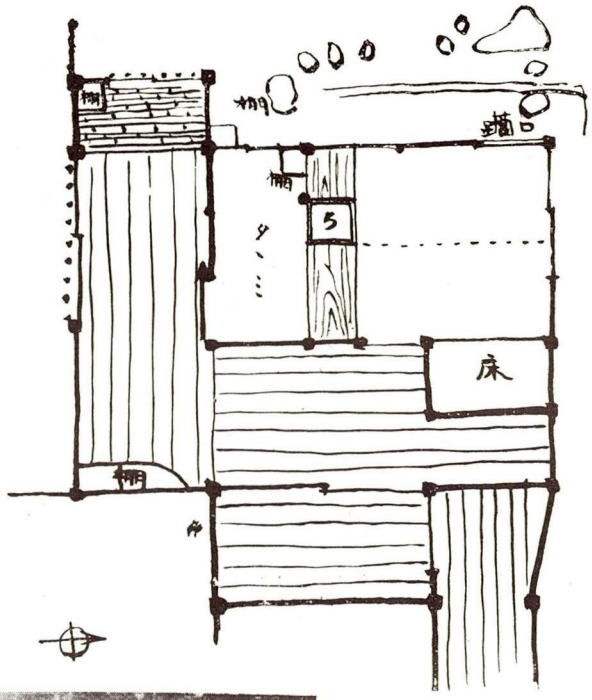
茶室の奥は三疊の水屋で東南隅は高桐院の建物に通じてゐる。

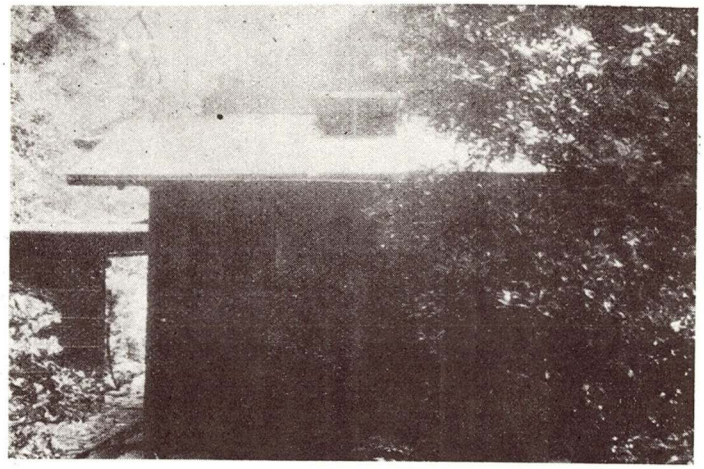
一方には戸棚を中央にして左に三角棚、右に流しがあり、棚の意匠は變化に富んでゐる。

9　玉林院蓑庵

玉林院も大徳寺山内の塔頭である。玉林院の廊傳ひ霞床の間の前を通つて行くと奥に蓑庵がある。如心齋好みの草庵で江戸中期のもの即ち、松向軒より少し後れる茶室は、三疊中板合目、水屋其他に板の間を廣く造つてゐる。

床の後ろ板間と撥形廊下との境は圖では壁のやうに書いてしまつたが實は通行出來るのである。



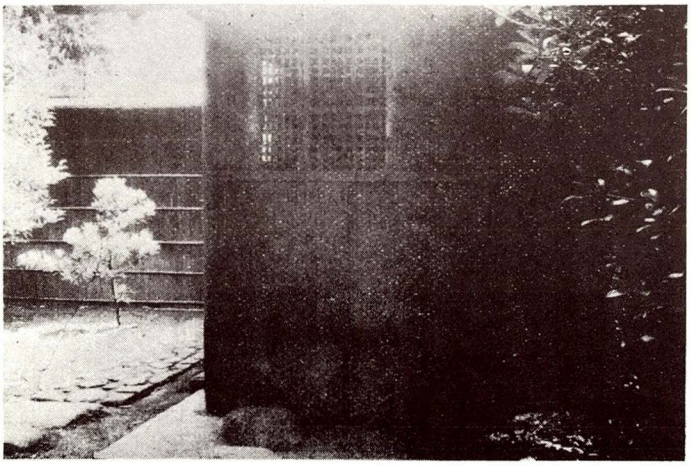


10・蓑　庵

蓑庵は切妻を正面に向け、前に土間廂を附け、そこに躙口を設け、躙口の上部に粗い下地窓を開けてゐるところ、松向軒に甚だよく似てゐる。路地の美は彼に及ばぬが、路地の中途に待合を設けたり、少し離れて蹲踞があつたりして、廣い感じを與へる。

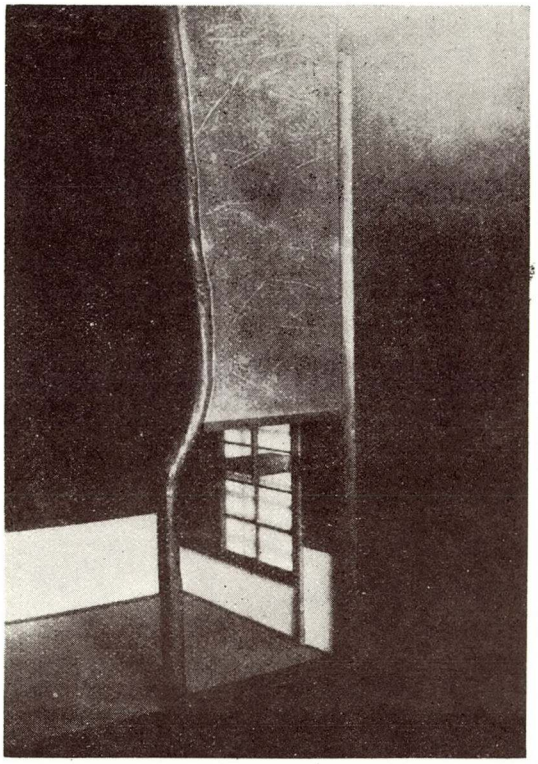
11・蓑庵　躙口

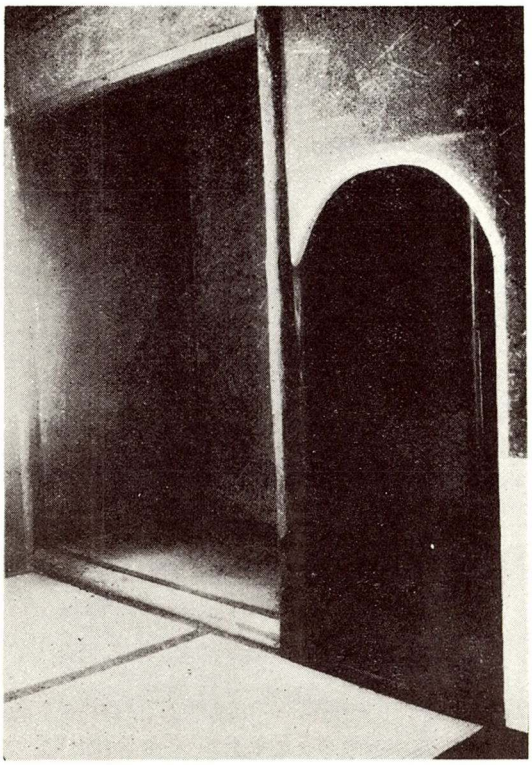
躙口、下地窓など松向軒そつくりであるが、土間廂の石の配置などは極めて簡單である。



12・蓑庵内部

路地は松向軒に及ばぬが、内部は意匠豊富で床、花頭口、中柱、二重棚、天井のあたり面白いところが多い。

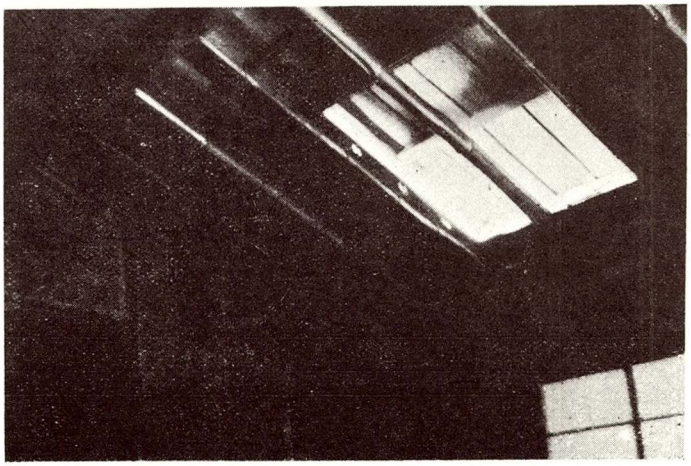




13・蓑庵内部

茶室の疊敷の間に幅1尺5寸ばかりの板を挟んでゐる即ち中板台目である。そして、中柱に近く爐が切つてある。

中柱から爐、隅棚、風爐窓、の關係は松向軒によく似てゐる。



14・蓑庵天井一部

茶室天井の一部は掛込みとしそこに天窓が造られてゐる。此天窓は最初からあつたものか後世造られたものかは一寸見たところでは判らない。材料や仕事の具合では新しく造つたやうに思へる。床前の天井は竹竿縁に杉薄板ばり、手前疊の上は竹竿縁にまこもを用ひてゐる。

近代數寄屋住宅と明朗性

吉田五十八

數寄屋と住宅

古來からの數寄屋建築に明朗性の缺如して居る事は、周知の事實である。されば如何にして、之を明朗化すか。明るい住宅とするか。聊か自分としての意見を述べて、先輩諸氏の御批判御指導を仰ぎたいと思つて居る。

由來數寄屋なる語譯には、古くから種々なる異說があるが結論として、茶席建築である事には一致して居る。從て數寄屋は茶道に對する道場、作法室と解してよいと思ふ。勿論住宅では無く、住宅の附屬屋として、而も衣食住の何れにもあて嵌らない部類に屬する建築である以上『數寄屋建築』と云ふことは云ひ得るが、『數寄屋住宅』なる語は第二義的の言葉にしか過ぎない。之を嚴密に言ひ表すなら『數寄屋住宅』即ち『茶室趣味を取入れた住宅』と云ふ事に於て初めて明瞭なる言葉を構成する譯である。

茶室は誰でも知れる通り、室町時代に足利家一黨が北山に金閣を、又北白川の邊りに銀閣を建立してその殷賑を誇つたとき建築したとかが始祖であるが、その客間のほんの一部として夕佳亭（建築年代は遲れて居るが）東求堂を建築して、金閣銀閣の豪華版に對して侘びの趣味、即ちその Contrast としての數寄屋を設備したのである。それより桃山時代の隆盛期を經て德川期に入るに及んで、之が追々住宅化して、竟に數寄屋住宅の存在が明かになつた譯である。

然して此數寄屋なるものを其まゝ住宅に取入れると言ふ事、それ自身が既に無理である由來茶室は前述の如く茶道と云ふ規格に從て建てられ、殊に德川期に這入てから、その約束は極めて繁雜多岐に渡り」寧ろ規格に墮し、諸流派がその勢力を爭ふに及んで全く當初の茶室出來の主意、味ひ等を沒却して仕舞つた。その繁雜なる約束を徒守した茶室特有の『ウルササ』の多い建築を其まゝ住宅に取入れる事は全く意味を成さない事である。住宅は本來どこ迄も『住む家』であつて形式をその主幹とする建築であつてはならない。

茶室建築の住宅として成立たない點は數多あつて、枚擧に遑がないがその諸點を一語を以て云へば『明朗性に缺けて居る事、即ち近代性に乏しい事』此言葉を以て從來の數寄屋住宅を評し得たりと云つてもよからう。

數寄屋住宅の明朗性とは何か

建築の明朗性——此命題は新興建築方面に於ては早くから喧しく云はれて居る建築條件の一つで Le Corbusier, gropius 氏等の建築の本質として研究され盡された事は建築家諸

氏の等しく知る所である。然るに何故に數寄屋住宅方面に於ては、此問題を等閑に附して居るか、而も近代數寄屋建築と號して居る輩が、その第一義とする明朗性に對して極めて無關心なる點、全く遺憾に耐へない次第である。

しかし又、數寄屋住宅の明朗性が奈邊に存在するかと云ふ點に於て、かなり誤解して居る處があると思ふ。或る人はその明朗性を解したと稱して、先づ家の軒高を上げ、天井を高くして室の容積を增し、尙且その開口を多くして事足れりと考へて居る人もある。又或る輩は屋根勾配を急にし、軒を短くし、欄間を廣くして能事足れりと考へた氏もあつた。之等は勿論、ある種の明朗性を考慮したには違ひないが、その結果としてその居住者から『此家は全く落付かないで困る』と云ふ不平を聞くに過ぎない事になつて仕舞つた。

所謂此處で云ふ明朗性とは、決して建築條令に依る採光面積を意味するものでは無い。言換へれば『感覺的の朗かさ』『感覺に訴へる明朗度』であつて採光量を計算して見たら、或は10分の1より採光面積がないかも知れない、しかしそこに理論以上の明朗性があつて居住者に滿足を與へられると信ずる。唯徒に硝子の面積のみ增大する事は、西日の强烈な我國、北歐の如くgloomyの天候に斗り禍されて居る國と違つて暑中は南歐北阿の氣候と變らない我國では、此硝子の面積のみを以て其明朗性を考へる事は考慮の豫地が澤山にあらうと思はれる。

明朗工作

(A) 平面

建築は言は竢たず、先づ考慮を拂ふ點は平面計畫である。平面に留意しない建築を評して『葬禮の豪華版』と評した佛蘭西建築家があつたが、穿ち得て妙である　明朗な平面——誰でも考へて居る事で實行し難い點である。殊に數寄屋住宅に於ては複雜なる屋根、重厚の平面、暗い廊下、從つて通風の缺如等、誰でも經驗する處であり、又地所の關係上Compactの平面、即ち獨逸風の平面になる場合には必ず暗部が出來て困るものである。此處に2つの方法を擧げて見たい。

(1) 中庭よりの採光法

(2) 中廊下にToplightを採る法

此方法は誰でも熟知して居て比較的實行されて居ない場合が多い。殊に總2階の數寄屋住宅など全く至難と云へよう。之には先づ平面計畫の際、中廊下の上部に2階が來ない樣Toplightが取れる樣計畫す可きである。

(B) 廣椽

近代の生活樣式はどこまでも二元的である。衣服に於ても、食物に於ても、又趣味に於ても然りである。勿論數寄屋住宅に於ても生活が二元的である以上廣椽を取つて椅子を配す事は現代建築界の常識であつて、も早やAnachronismとは云へない。

之は普通6′～9′取つて居る。然るに此爲め後の室は採光面積少く、殊に雨季にでも入れ

ば到底その役をしない程度の場合が多い。

此廣椽を取る事は自分としても非常に當を得てゐる方法と思つて、度々實施して居るが、廣椽の後の室に如何に明朗性を與へるかが問題である。

先づその方法として下に4つ記して見よう。

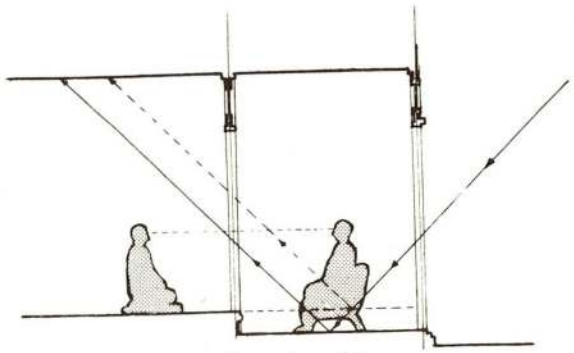
（1） 廣椽の內法を上げる方法

（2） 廣椽の欄間を高く廣くする方法

（3） 廣椽の床を下げて室內に對する反射光線を增加する方法

（4） Toplights を採る方法

以上の內で（4）が最も効果的であるが2階との關係上實行難とも云へる。（2）の場合は所謂落付かぬ座敷になる恐れがある。（1）は軒高が定つて居る以上餘り効果的で無い。自分としては（3）の方法が良いと思ふ。出來得れば之に Toplight を併用すれば最善の方法であらう。



第 1 圖

此（3）の方法は古くは寺院の正面に白川砂を敷いて、それに反射した光線が恰度佛體の慈悲の溫顏を 45° の角度に照らして、拜する者をして信仰の念を起さしめたと同じ樣な理論で、床へ反射した光線を以て室內を照明する方法で、間接で相當 lose はあるが、比較的効果的であるし又、此理由以外に床を落す事は、疊敷に端座した人達と、廣椽の椅子に腰を掛けた人との視線が同一の level に置かれて居り、座る人と腰掛る人とが甲乙上下無く快談し得る長所がある。（**第1圖**）。然し更に有効方法としては、室の前の椽を 3′～4.5 に取りその側面（椽側を南とすれば東に位する位置）に床を落した廣椽を取り、更に此處に Toplight を切れば全く明朗そのものゝ室が出來るであらう。

（C） 天 井 高

昔の武家建築の天井は隨分高かつた樣だが、數寄屋は性質上相當低めに天井を張つた。しかし御殿造は例外として近頃の面皮、丸太ものの建築に驚く程の高い天井を見受ける。殊に 10 疊でも 4.5 疊でも同じ天井缺きであつさり方付けてある住宅がある。

勿論天井高は個々の室に依て異なる可きではある。先頃天井高を疊數に從て公式に依り定めた建築家があつた。それは、例へば內法を 5.8′ と押へて、その上の小壁の高さを、その室の疊數に或定數を掛けて計算するものである。

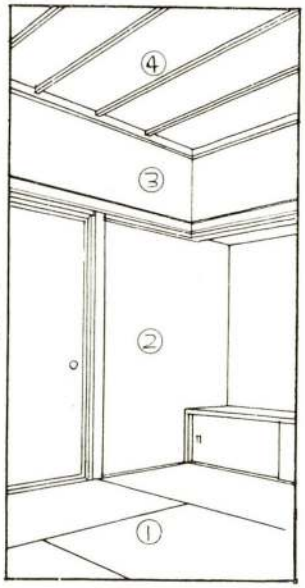
天井高＝內法＋{（疊數 ×（定數）＝（小壁の高さ）}

此方法は室の廣さの違ふ毎に天井高が異なる爲め理論上非常によい方法と云へるが、材

料、用途、採光の多寡等の諸條件が個々に違ふから、此れを一律の算式に依て決定する事は面白くないと思ふ。唯參考として置く可きだらう。

兎に角室の天井高はその明朗度（明朗さの量度）に大關係を有して居る事は明かであるが、概して客間を高く、居間、床の間を普通に、寢室を低く取るのがその原則である。

乍然、室の天井高を考ふると同時に柱と壁の部面を研究しなければ、はつきりした明朗度は出て來ない。次に此點を述べて見よう。



第　2　圖

（D）　柱と壁の部面

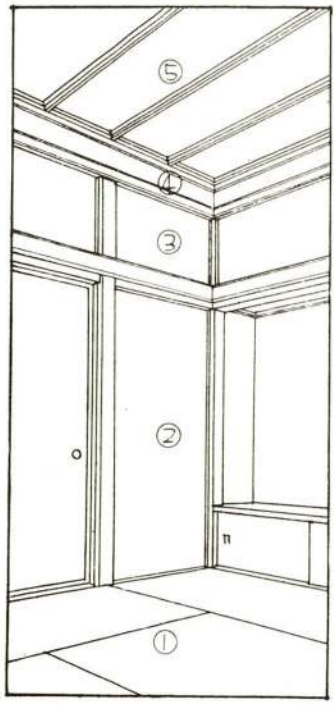
此問題は數寄屋住宅に對する明朗性と最も重大關係を有する事柄である。先づ從來の和風住宅の一般の壁面を考察して見よう。

普通壁面は寄敷居、內法、天井廻緣に依て壁面を２つの部面に仕切られて居る。更に之を言ひ換へれば、見る人の視野の內には、下から順に見上げて

（1）疊　　（2）內法下の壁　　（3）小　壁　　（4）天　井

即ち上下２つの平面と、木材に依て仕切られた２つの壁環（ring）合計４つの部面が視野に入る譯である（**第２圖**）。

第　3　圖



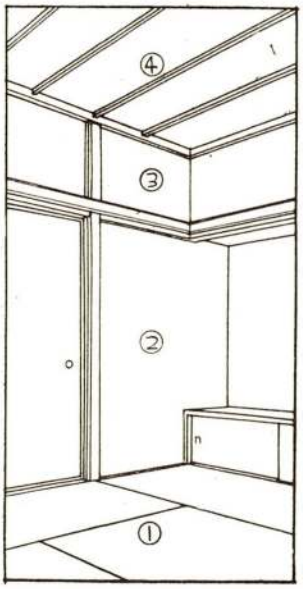
此上更に天井長押がある場合は、5 個の部面に仕切られる事になる（**第３圖**）。

之を別な Vertical の方面から詳察すれば、六疊の座敷として柱と柱との間の部面が 8、乃至 10 を算する事にならう。之に小壁の釣束、建具等を配するときは、その部面數實に 20 に近い數となるのである。又天井を竿緣と考へるときは１間５枚張として、60 齣に仕切られて居る事になる 。

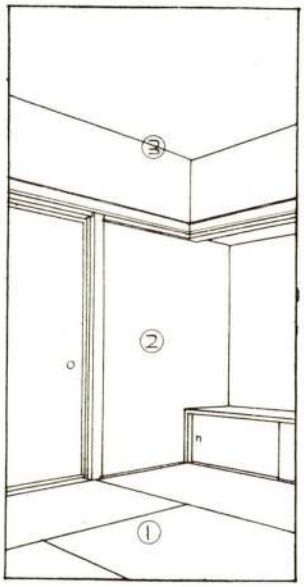
かく考へ來れば、その縱橫無盡に仕切られた壁面天井（疊も緣に依つて仕切られて居る）は室內の明朗度を減ずる事甚だしく、數寄屋建築特有の『ウルサヽ』が如實に表現されて居ると言はなければならない。

此繁雜さから脫し、『ウルサヽ』を排除して明朗度を增加せしめるには如何なる方法を選ぶ可きか次に述べて見よう。

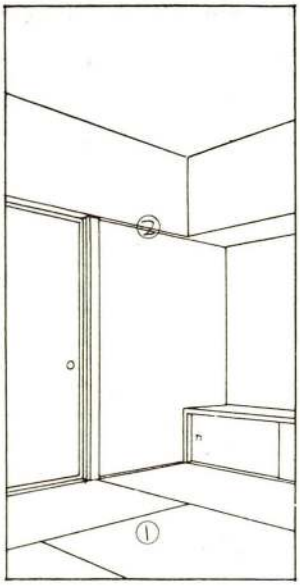
先づ室內の諸材料の變化を出來る丈け單純化して、前



第 4 圖



第 5 圖



第 6 圖

述の部面數を可及的に減ずるにある。それには下記の方法が考へられる。

(1) 內法上を大壁にする方法（**第4圖**）

(2) 天井を壁と同材にして、內法上の大壁とを連絡せしめ、之を一つの部面に見る方法（**第5圖**）

(3) 長押、附鴨居を見ず、(2) の方法に依り天井から下りて來た大壁と一つに見る方法（**第6圖**）

(1) の方法は長押のムネを少しく出して小壁を大壁に見るときは、小壁全部を一つの部面と考へ、相當の明朗度を增加する。

(2) の方法、之を (1) の方法に、更に天井全部を同材の壁として、小壁と天井を全部の一部面と考へる方法で、從來上下4部面に仕切られた視野は3部面に減じ、それ丈け明朗度を增加せしめる事 (1) より更に效果的である。

(3) の方法、最も近代性を帶びた考へ方で、長押、鴨居、附鴨居を全部大壁に見て、內法下の壁面と小壁天井とを同一仕上の一部面と考へ、建具を除くときは室全體を床の面と壁天井との2部面に見做す考へ方である。

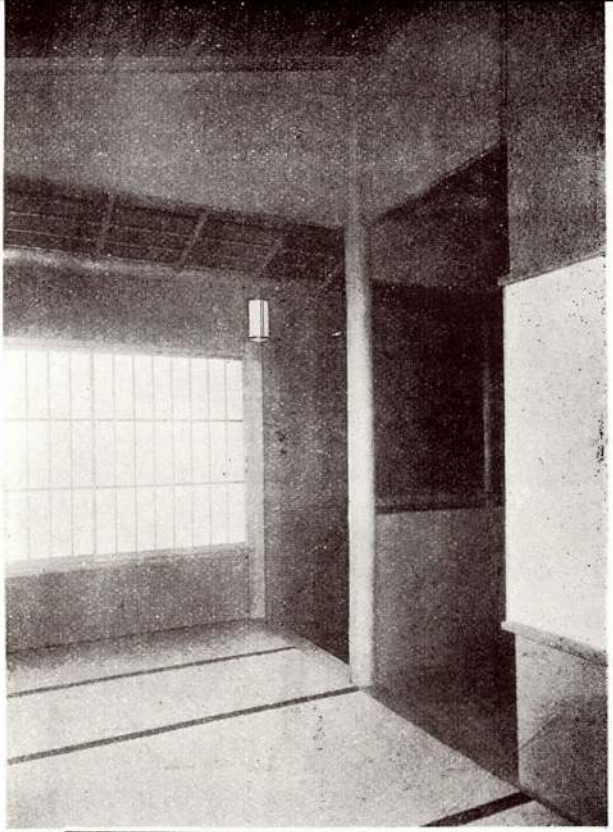
此れは最も效果的で、見る人の視野から縱橫架構材を大半排除して、明朗度を結論に迄增加した方法で是以外恐らく他に勝る考へ方は直ちには、見付かるまいと思はれる位である。その點全く近代新興建築に近いものであると云へよう。

結　　論

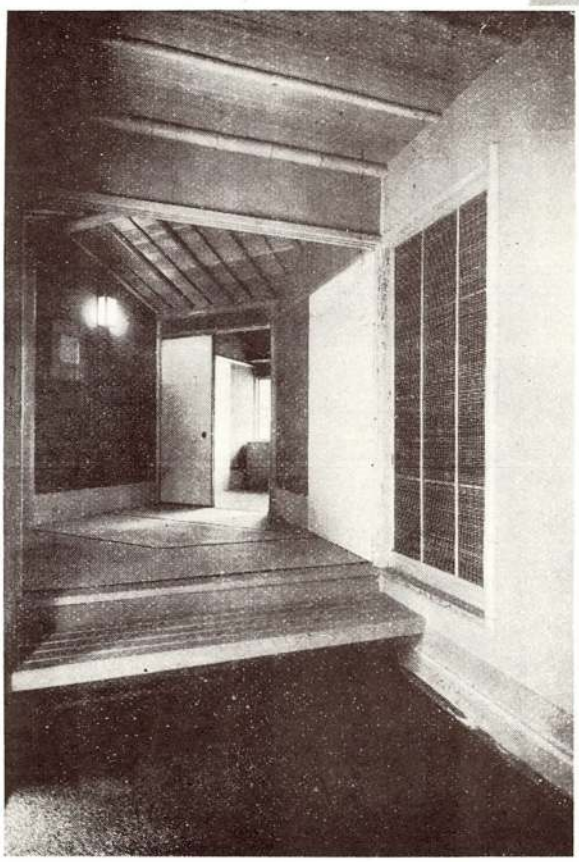
以上述べた數寄屋住宅に對する明朗性は必ずしも、數寄屋住宅に限られては居ない。兎

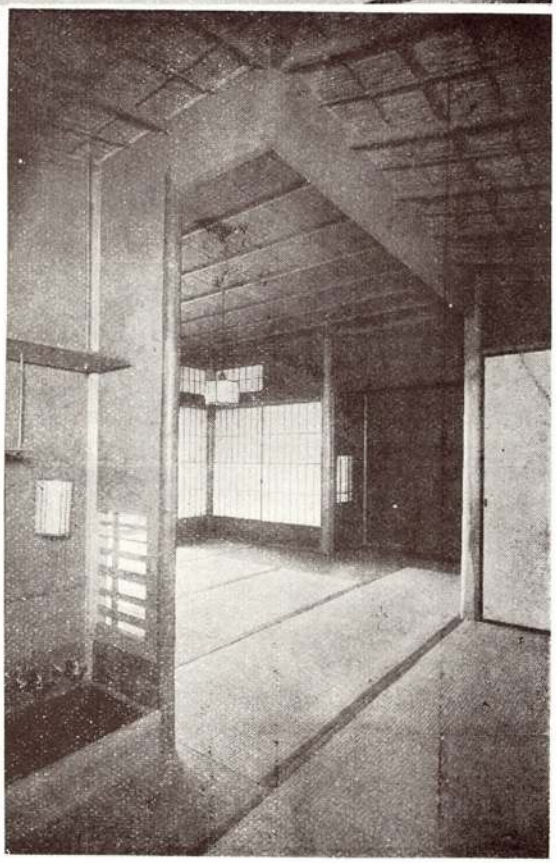
角古來からの數寄屋は明朗度少く、近代生活と全然背馳した點が多いので、特に數寄屋住宅として考慮して見たのである。

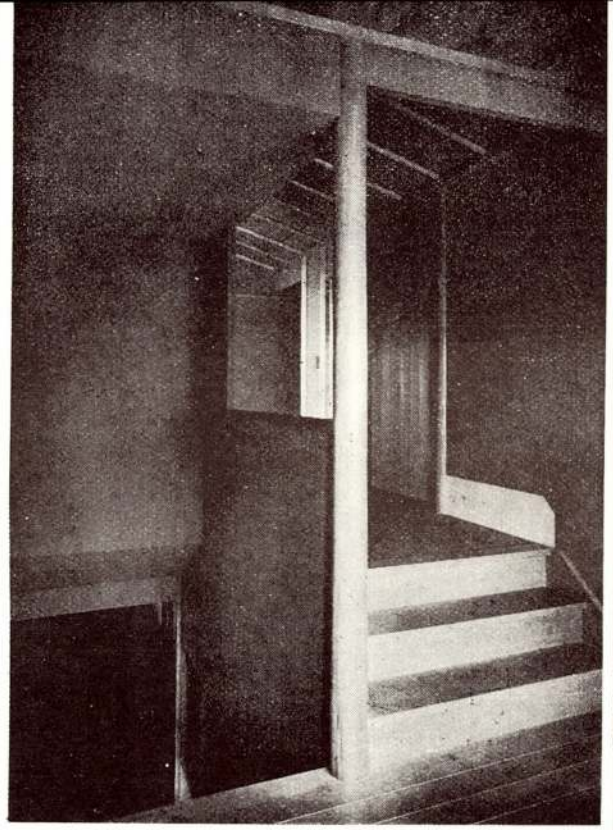
從來の數寄屋住宅は兎角、過古の住ひ。老人の住宅。と云ふ感念が強く現代の第一線に立つ近代人には何の關り合も無い如く考へられて居る點、全く自分等の樣に數寄屋建築、を手にする者にとつては、甚だ遺憾の限りである。之は過古の數寄屋住宅に『明朗性の缺如』と云ふ重大な短所があつた所以で、此點何と云はれても、一言の申開きも立たない譯である。それ故、今日よりの數寄屋住宅は一段の明朗化 。朗かさ。に生き生きとして若き近代人を大手を廣げて迎へねばならない。それが數寄屋建築家の責任であり義務である。



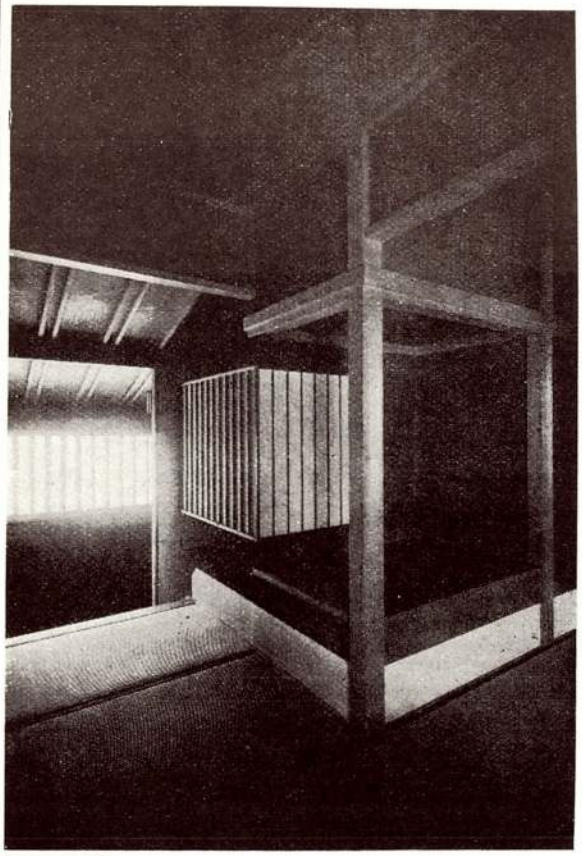
（上左） 杉本邸・階上入側
（下左） 倉田邸・玄　關
（下右） 熱海吉住邸・
水屋と座敷







岡田邸・階上廊下



岡田邸・階段



岡田邸・ヴエランダー

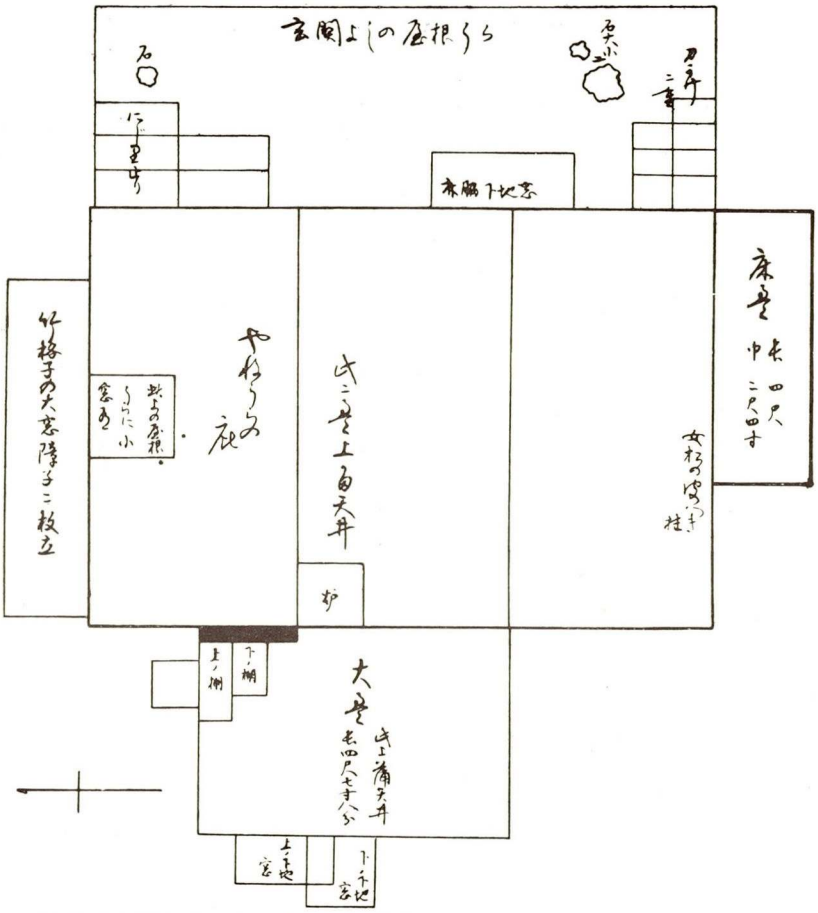
道慶作三疊大目數寄屋指圖解說

佐古慶三

千宗易、利休居士に道慶といふ高弟のあつたことは、世に知られてゐる。茶人傳には多く平野道桂と書かれてゐるが、その系圖に從へば道桂の方が正しく、また姓を平野とするは彼の生地をもつて誤り傳へたものである。拙文「道慶傳」（瓶史、昭和十年十月號所載）に於て述べた如く、道慶は攝州平野鄉の名門、坂上七名家のうち成安家の出であつて、通稱をば五郎左衛門といひ、利休の姪聟に當るといふ續柄まで、成安家の系圖によつて最近判かつて來た。この道慶に二人の姉があり、次姉（法號妙作）は從兄弟の成安宗作に嫁いでゐる。宗作夫婦が儲けた女お鶴は、平野鄉の奥野家に入つて6代清順（慶長十八・正・二十行年三十五）の妻となりお鶴の弟次郎左衛門も亦その養嗣子になつて、7代清純（寛永十六・閏十一・七行年四十四）と改め家督をば繼ぐ。してみれば道慶と奥野家の7代清純とは、叔父甥の續柄になるわけで、清純が假親となつて道慶の息女（法號壽慶）を平野次郎兵衛（德壽）に嫁がせてゐることの次第も判かる筈。奥野家は京、佛光寺了源上人の佛弟子、覺舜といふ念佛行者に出で、元德2年以來この平野の地に居住し、家傳の秘藥調胎湯を弘め（文明年間）現在は十八代清順に及ぶところの舊い家柄である。また世職の傍ら文藝に嗜み深い家筋であつて、十代清順（祐可）十二代清順（保悟）の如きは歌人として世に著はれ、ともに法橋位を拜授してゐた（拙文「平野鄉の歌人 法橋奥野保悟」大阪史談會報、昭和十年七月號所載記事參照）。

かゝる因緣をもつ奥野家（現住吉區平野新町三丁目）に、利休好みの數寄屋が道慶の指導によつて、その邸內に設けられてゐても當然ではないか。たゞ憾むらくは既に明曆2年の昔に、取毀されて了まつて現存してゐないことであるが、幸ひ詳細を極めた指圖が殘つてゐるから、およその結構は窺ひ知ることが出來る。數寄屋は三疊大目であつて、利休の作、京は高臺寺のものにおなじとか聞く。指圖は美濃紙を七枚續いだ長尺で、平面圖（挿繪第一）の次に先づ惣記として、

1. 床の內天井高
   下地敷居より天井まはりふち下まで7尺3寸、
1. 蒲天井高
   蒲より地敷居まで6尺2寸、其より下に天井ふちもたせ有、天井まはりふち下までは地敷居より6尺1寸、
1. 同天井ふち竹
   床外1間2疊の間、上には竹9本、兩方天井まはりふちそばに竹有、大疊上には6本



三畳大目板敷之格圖

平地住城安乃亭作

勝手口上天井まはりふちそばになし、

1. （略）
1. 床の左は女松柱也、皮つきにて
1. 障子共みぞの廣さ6ぶづつ、
1. 棟の高、軒けたより3尺9ぶ、
1. （略）
1. 本座敷より勝手數寄屋共、疊5寸上る、
1. 柱共ふとさ3寸4方也、
1. （略）
1. 爐は1尺4寸4方に切也、3疊の中疊に切也、
1. （略）
1. 板敷の高さ、石より地敷居上はまで1尺7寸7ぶ、
1. 疊長はゞ如常、大疊長4尺7寸5ぶ、
1. （略）
1. （略）
1. 地敷居より軒の高さ7尺9寸、

1. （略）

以上の19目を擧げてから、

床の内分、　　窓の事、
下地窓よし數の事、　　にじりあがりの事、
北の方つきあげ窓の事、　　火とう口かつて口の事、
中柱付棚の事、　　刀かけ棚の事、
こしはり又反古張の事、

右の9項目につき更らにこと詳しく認めてゐる。

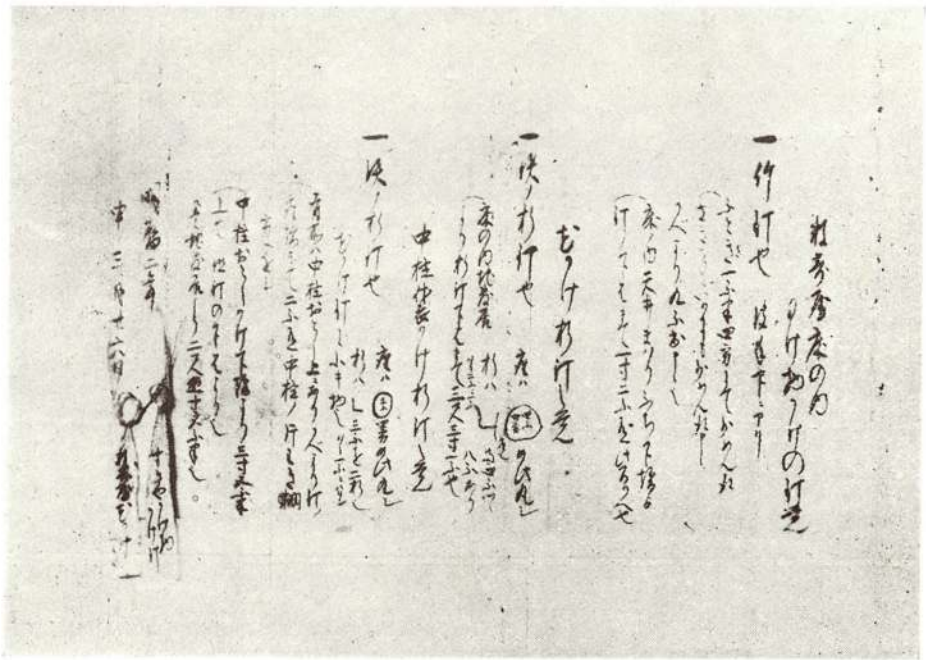
例へば

床の内分　但、皆かべにてはりつけなし

1. 疊長4尺横2尺4寸、地敷居廣さ8分半、何れも同じ、疊のあつさ1寸5分半、是板敷よりぬりぶちまでの高さ也、
1, 床ぶちくろぬり也、厚さ1寸5ぶ、但大めん取、廣さ5分地敷居そばにも上下にめん取、此外に下に8ぶ半の地敷居有、是よりぬりぶち高さ2寸7分、
1. 床落しかけ、ぬりぶち下の地敷居よりおとしかけ下端まで5尺1寸9ぶ、
同はゞ2寸4ぶ半あつさ1寸2ぶ、床の内天井まはりぶちよりおとしかけ下はまで2尺3寸5ぶ、平のがま天井よりおとしかけ下端まで1尺、
1, 花かけ折釘、地敷居より釘下まで3尺3寸1ぶ、但、釘はくろがね也云々
1, 掛物の竹釘、床の内天井まはりぶちより釘の下端まで1寸2ぶ、釘かべより出9ぶ云々

と。殊に掛け釘の寸法に至つては、念を入れて別紙に書き改め、紙捻でもつて太さをば計かる なんど、苦心を凝らせるところ清鑿を願へれば幸甚。

挿繪第二



建築法規に關する質疑應答欄

應答　法制委員會

問　法施行細則第二條申請書又は届書は所轄警察署を經由すべし

上に對し要求する件下の如し

所轄警察署は之等提出に對し建築係不在中と雖も一般執務時間中なれば午前午後の區別なく受付に於て取扱をなす事に願ひたし。若し現在の如く午前午後の區別なく係員不在中書類を受付ざるものとすれば其間恰も警察署の休みに均しくして行政上大なる矛盾と云ふべきなり。

答　御趣旨の點は攅を見て各關係當局に具申致しませう。

問　兵庫縣に於て家屋の外壁廻り柱の上下取付部の仕口は風水害後長枘込栓打と決定したるも長枘とは幾何の長さなるや又込栓位置につき御指示乞ふ。

答　風水害後特に規定を設けたるものに非ず、長枘込栓は建築技術上の通念に依る。

實際問題が起つて困つて居ます。此轍を踏む人の出ない様な方法がありますまいか。

問　私は昭和八年四月に大阪府知事の認可を受けて建築に着手し七分通進工した時隣接地の者から敷地境界線より1尺5寸以上後退せしめよと交渉して來たので答辯の限りでないと打ち捨て置いた所突然裁判所から工事中止の判決が來たのです即ち隣接地の者が供託金を積んで工事中止を命ぜしめた。先方の云ひ分は民法の二百三十四條に依つて訴へを起したのであります。地方長官の建築認可して居ますことは民法の二百三十六條に依るのでありませうが兎も角此爭をして居る間に已に2ヶ年と3ヶ月經過して了つて居ます判決は何時になるか全く分らない。折角地方長官が建築することを認可しても工事を進め得ない様な事が各所に演ぜられた場合今後建築をする多數の人が此の様な事でもあればどうなるのでありませう。然も先方の供託金は僅かに額面200圓であります事を思ひます時重大な實際問題でありますまいか此轍を踏まない方法を教へて戴き度いのであります。

答　1. 市街地建築物法に於ける建築工事は防火地區内に於ける建物の部分を爲す防火壁は土地の彊界線に接して設くることを認容し（同法第十三條第二項參照）居るも其他の場合は同法第十六條に基き同法施行規則第百四十三條に依り認可をなすものにして民法第二百三十四條に規定する事項は認可上の要件にあらず即ち知事の認可は單に市街地建築物法上の認可にして他の法令に規定されたる事項に付ては各其法規に依り權利を確保すべきこと明なり

從つて本件は地方長官の關與し得ざる問題にして民法上の裁決に依るの外無之と思考す。

追而爲念内務省都市計劃課長から石川縣知事宛の回答文を下に掲載致しますから御了知相成度く下記

市街地建築物法施行規則第百四十三條の認可に關する件

（昭和3年12月22日收第392號　石川縣知事宛　都市計劃課長回答）

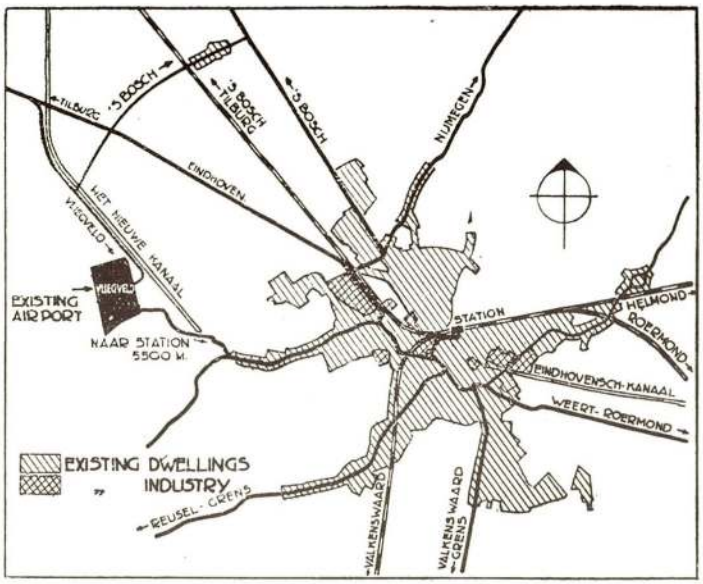
昭和3年11月20日發保第793號を以て標記の件御照會相成候處民法第二百三十四條に規定する事項は市街地建築物法施行規則第百四十三條の認可上の要件にあらざる義と存じ候

追て民法上の關係に付ては一應注意を與へらるゝは穩當被存候條爲念申添候也

石川縣知事照會（昭和3年11月20日發保第793號）標記に關し民法第二百三十四條を考慮すべきものなりや否至急何分の御指示相煩度此段及照會候也

問　建築請負業を創業せんとする時彼の土木建築業組合や大工業組合に入會して鑑札を受けねば絶對に看板を掲げられぬものですか又二千圓以上の不動產がなければ請負業は出來ませぬか尙稅金の最少額を御教示下さい（一昨日問合せました事の要點は請負業を創業しようとしますのに資格として不動產を有し組合及大工組合等に加入せねば公然と出來ない様に聞いて居ります先輩の紹介を得て名譽ある貴協會正會員に加へて頂いてゐる吾々青年が獨立する場合に貴協會の正員であると云ふ事が何の足しにもならず態々大工組合等に加入したり土木建築業組合に加入したり或は其組合員の大半が有せざる三千圓以上の不動產を所有せよと云ふ規則に從はねばならないものだらうか某會社の出入請負人になれる資格がありながら一般の請負業としての資格なくば會社の仕事が出來ないものか創業しようとして苦しんで居ります）

答　協會は一定の定款があつて認可を經て成立し大工業、請負業組合は知事が必要ありて制定された規定であるがため協會員とは別個の問題であります。只御質問の御主旨に副ふかどうかと存じますが從來の大工業者に適用の取締規則は昭和十年十月三十一日限り廢止された府令が九月六日に第六十三條に依り公布され大阪在住の大工職は引續五年以上其の業に專念し建築工事施行の經歷を有し大工職としての技術及人格共に佳良にして相當信用あるものは請負業の資格を認定される事になりました。



第 1 圖　舊都心部平面

ベルギーとの國境附近に位するオランダ南部の工業都市、アインドホーベン（Eindhoven）の擴張計畫は 1930 年にその確立を見た。この都市は、ラヂオの驚くべき普及により著しき活氣を呈せる、フイリップ白熱電燈工場の急劇なる發展によつて、大なる飛躍を遂げたものである。

ラヂオ器具の絶えざる需要により、この工場のラヂオ部は年々擴張され、遂に數千人の職工を收容する家屋の建設が必要となるに及んだ。アインドホーベンの人口も、1920 年には僅に 45,000 であつたものが 1935 年 1 月には約 100,000 に昇り、1920 年には僅に 8,000 であつた戸數が、1935 年には 20,000 に增加した。而して、斯く人口膨脹せるに拘はらず、人々は、一般に最も廣い面積を要すると考へられる獨立貸住宅に住つてゐる。

15 年以前には、この都市は 6 町村よりなつてゐたが、1920 年には、その中の最小（75 ヘクタール）ではあるが最古のアインドホーベンを中心とする地區に合併されてしまつた。最初は、中心を取り卷く分離地區を結べば蜘蛛巢形街路系統は交通上不適當と考へられてゐたが、現在ではこれと反對に都市の各部分が田園に接し得られ、充分に現代都市計畫技術を發揮し得られる配置であるとして、これを感謝せられるに至つた。例へば、都心近くまで綠地が充分侵入してゐる點等は、都市計畫上所謂理想都市と云はれてゐる型式に類似してゐる。そしてこの點がこの都市の最も素晴らしい特徵である

主要擴張概要計畫は、先づ次の如き要求を滿たしてゐる。

A. 道路及び水路に關して

1. 市內幹線道路	2. 地方主要道路	3. 住居地街路
4. 公園道路	5. 運　河	6. 鐵　道

B. 地域に對しては

1. 住宅施設	2, 商業及び工業施設	3. 競技・運動・休養施設
4. 飛 行 場	5. 墓　地	

勿論、斯かる計畫の細部は、斯かる概計畫を基礎として、一般にその都市自身に獨特なる都市計畫的形態を採らしむべく努力しなければならぬ。即ち、斯かる局部的計畫に於ては、關係地區の分割に對しても、夫自身周到精密なる研究が特に必要である。例へば、住宅地街路の位置・外形及び建築的手法の如きも、沿道建築物の外觀・空地及び高度、或は又公共建築物・寺院・學校等の位置を深く考慮して特種の設計を樹立しなければならぬ。概要計畫に於ては勿論、局部的計畫に於ても、計畫の基礎的趣旨を變更することなく、新たなる要求に應じ得るやう、可成合理的に多分の融通を持たしめておかねばならぬ。一般擴張計畫・地域制及び局部的計畫を根本的に支配する基礎的趣旨を列記すれば次の如し。

交通網　幹線交通路は、簡單・明確でなければならぬ。斯くして、始めて記憶に便、明瞭なる土地の分離を行ふことが出來る。

建築物　道路系統と共に、建築物に關する問題は愼重な考慮を必要とする。獨立貸住宅は習慣上特徴ある型式として維持されて來た。

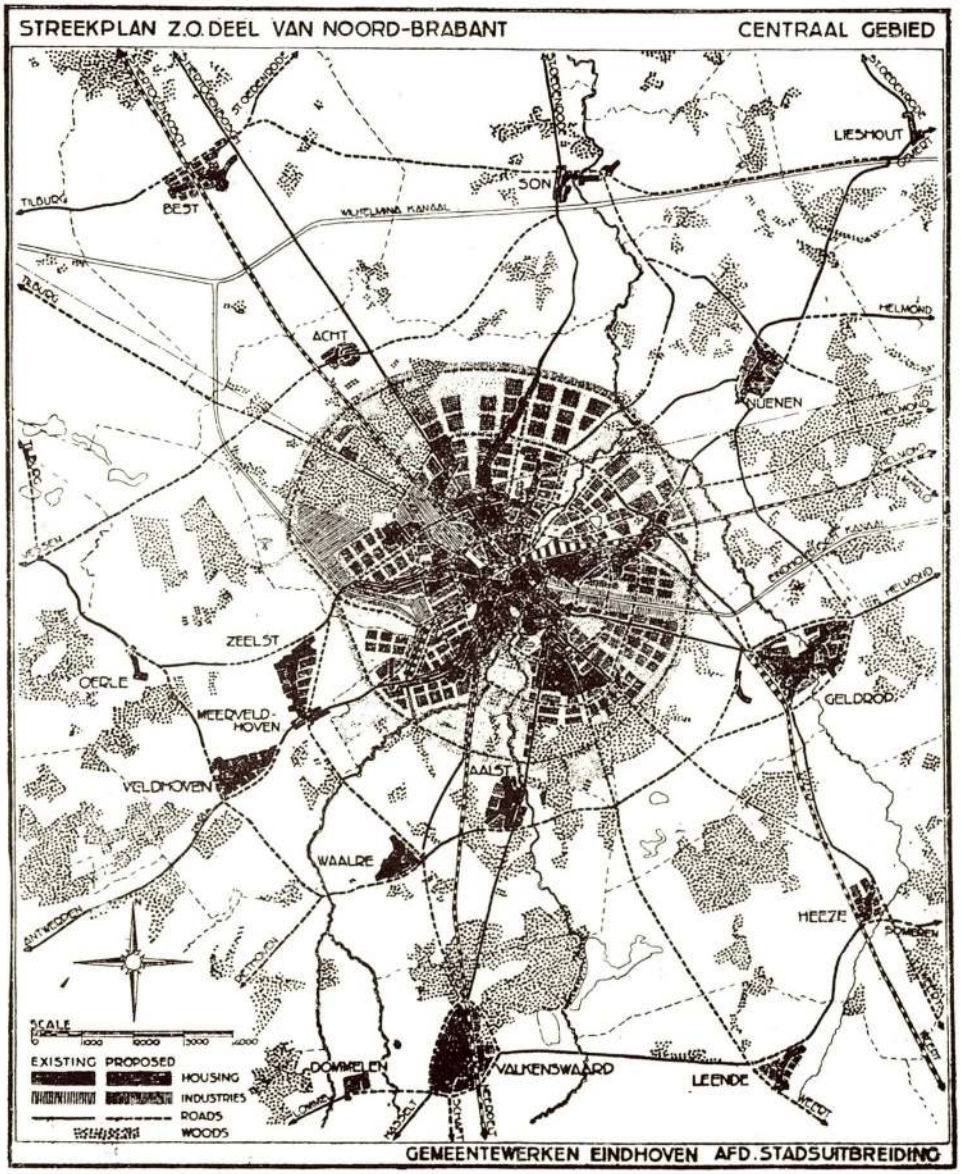
工　業　工業擴張の可能性は、都市計畫上特に考慮すべき主要條項である。アインドホーベンの如き都市に於ては特にその感が深い。擴張しつゝあるフイリツプ工場敷地の可能性は頗る重要なる點である。

都市綠地　既述の如く、現在集團の蜘蛛巢形街路系統は、各方面に綠樹帶の侵入を許し易い。斯かる型式、並に放射狀街路間の綠園保存による附隨的利益の維持に多大の努力が拂はれ來つた。その面積及び形態に多少の變化はあるが、各種の植込は、アインドホーベンをして綠園上最も著名な都市の一とした調和ある綠地系統を出現するに與つて力がある。

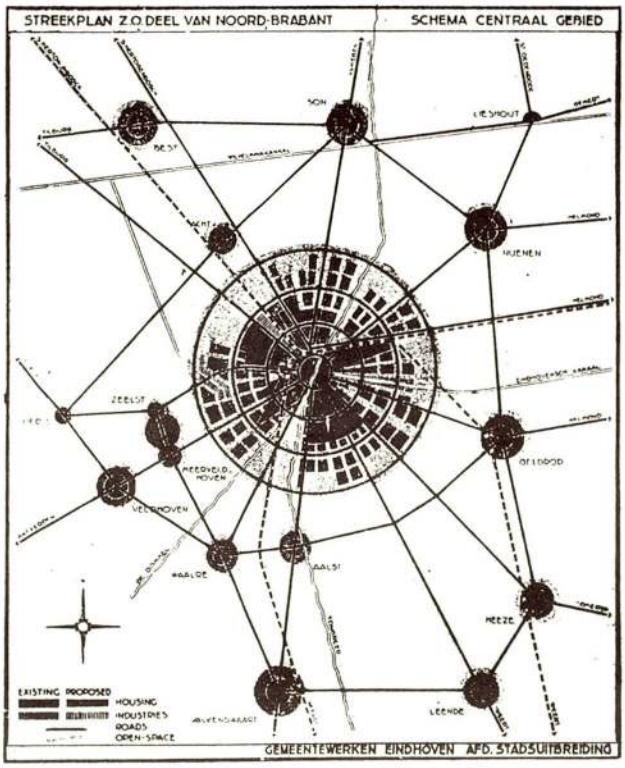
墓　地　數多くの墓地計畫も亦、都市計畫上主要なる條項である。よく見る如く小規模に流れることを防ぎ、設備不完全なる埋葬地となることを避け墓地としての特殊なる目的を滿足せしめ得る手法を以て位置及び分割を定め、相當大規模となす必要がある。

飛行場　近代航空交通の素晴しき發展普及に資せしめんがため、一都市に少くとも一飛行場の設置は必然的である。この飛行場の面積は凡そ 600米×900米 で、設備良好、その位置もヨーロツパ各都市中模範的のものである。　（Town Planning Review 誌より　吉田信武）

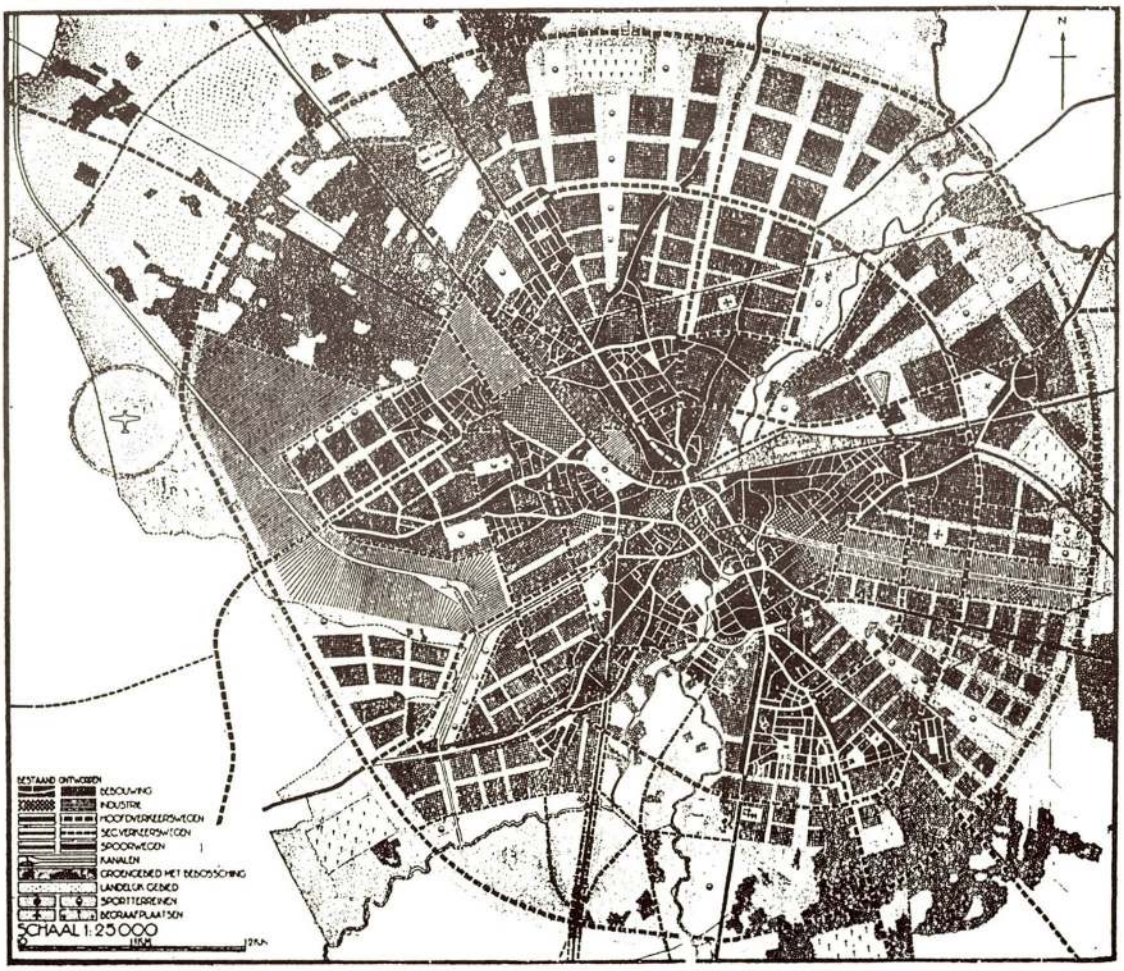
第２圖　アインドホーベン地方計畫平面

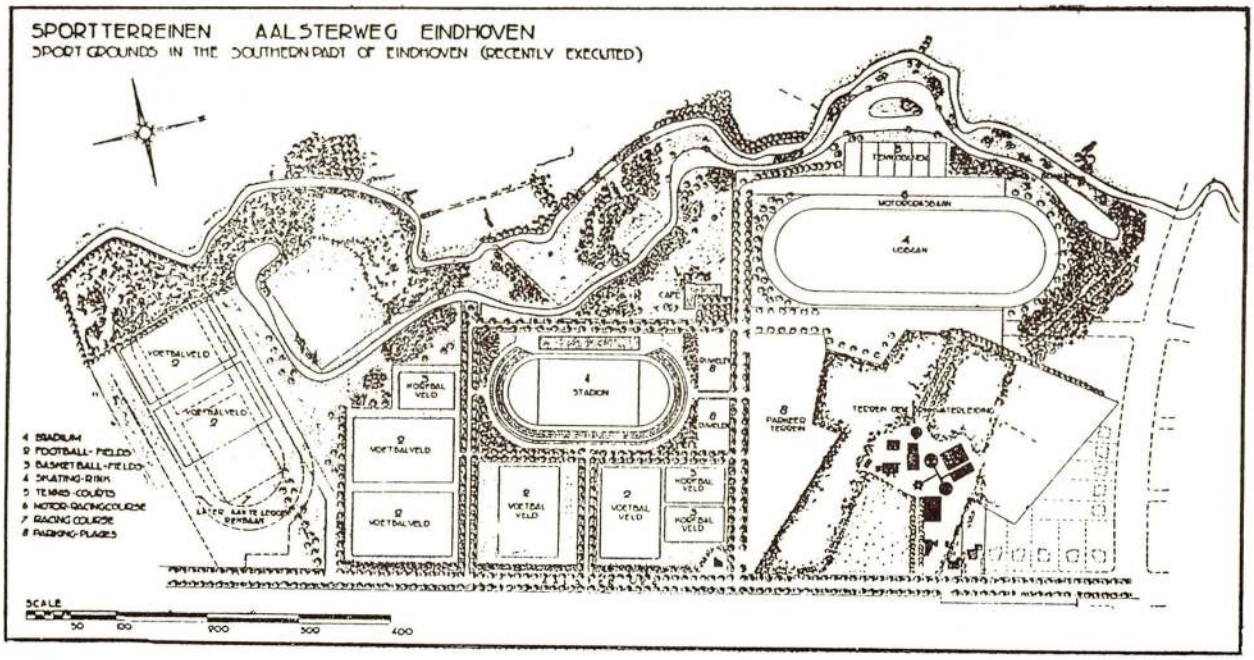


第 3 圖　地方計畫圖式平面

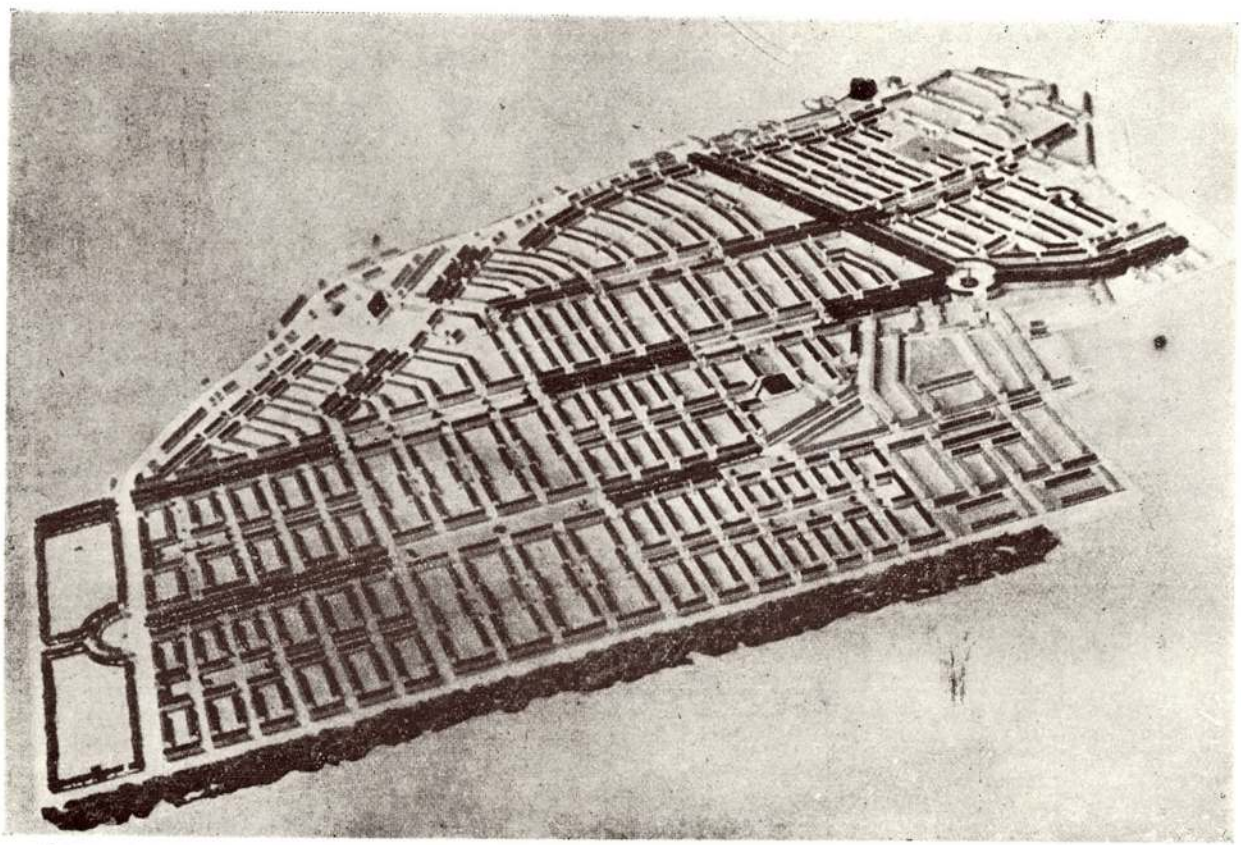


第 4 圖　概 要 計 畫

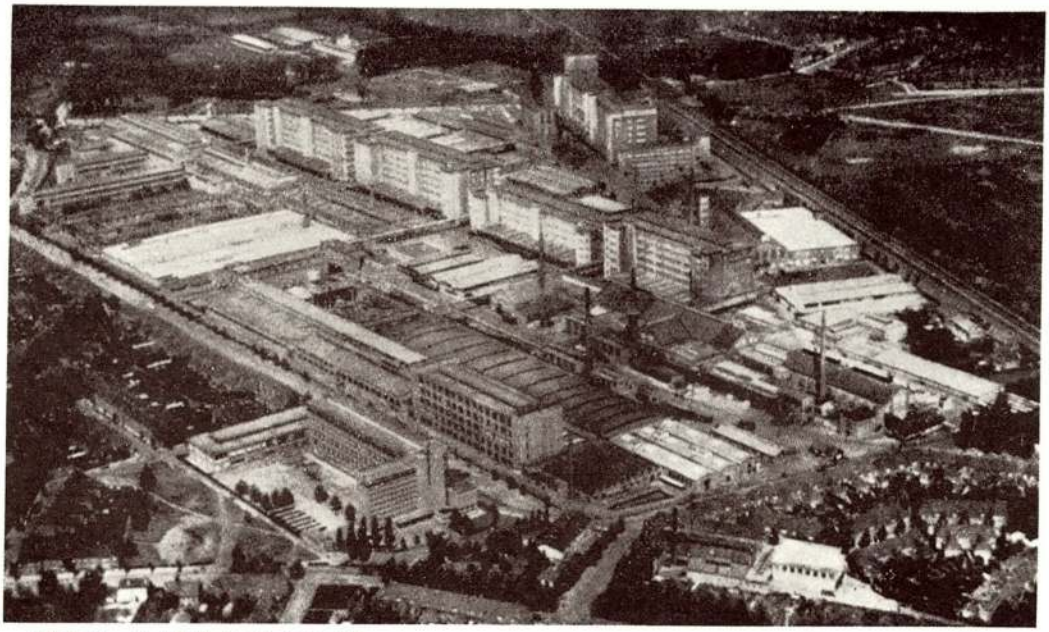




第 5 圖　運動場平面



第 6 圖　都市西部に於ける扇形住宅地模型



第 7 圖　フイリツプのラヂオ工塲



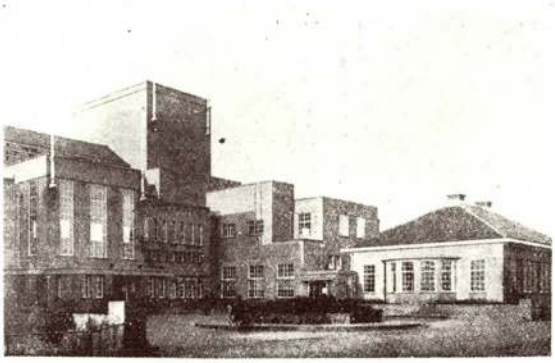
第 8 圖　都市近郊に於ける農家



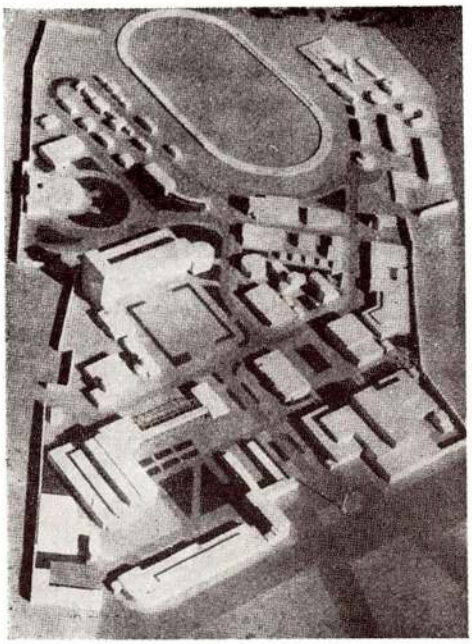
第 9 圖　職 工 住 宅



第 10 圖　工塲附屬工業學校



第 11 圖　工場附屬娯樂館



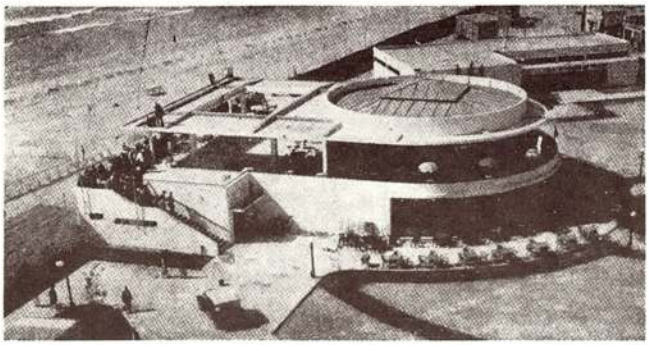
第 1 圖　テル・アビーブ東部共進會
一般建築配置模型



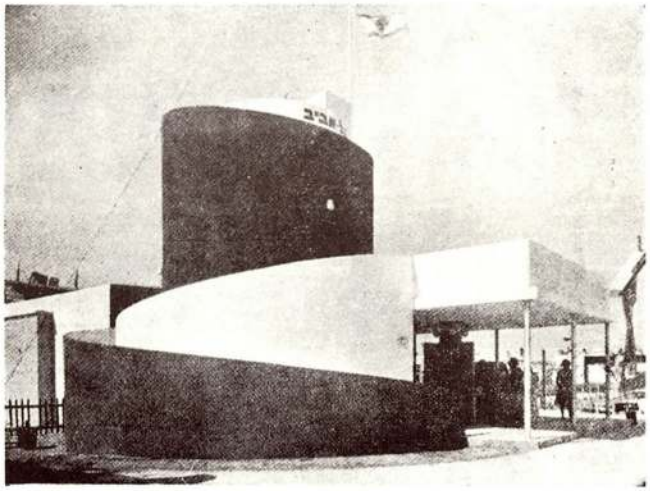
第 3 圖　機械館



第 2 圖　テル・アビーブ
パビリオン（1）



第 4 圖　主レストーラン

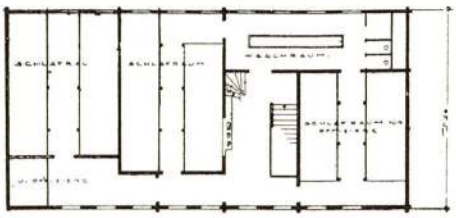


第 5 圖　テル・アビーブ・パビリオン

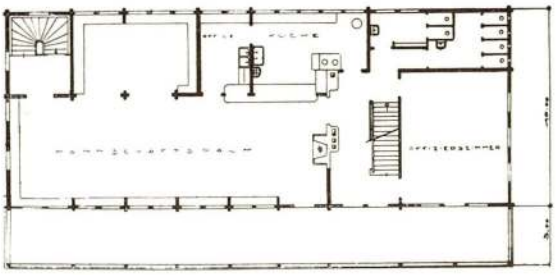


外　　觀

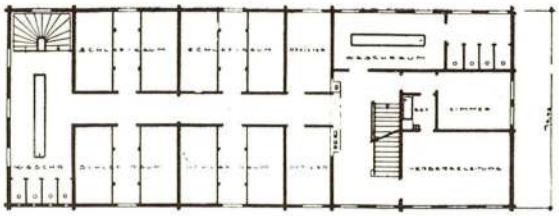
スイスの歩兵隊將校によつて、つくられたもので収容人員200人、寢室は2段の寢棚式になつてゐる。附帶設備としては中央煖房、電氣ストーブ、二つの大きな給湯ボイラー等あり。



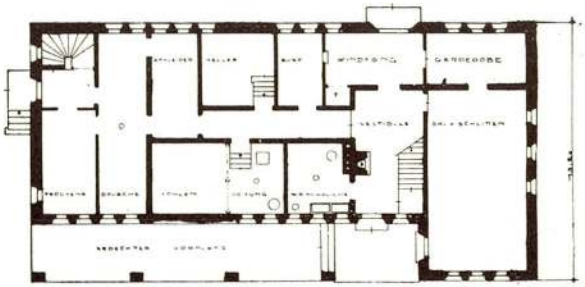
4 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖



3 階 平 面 圖



1 階 平 面 圖

1 階　ロジヤ、スキー及橇置場
　　シヤワー、バス、更衣及乾幹燥室、洗濯室
　　煖房汽罐室、地下物置
2 階　將官食堂、兵卒食堂
3 階　兵卒寢室、洗面室(2)　マネージヤー住居
4 階　將官及兵卒寢室
　　(Moderne Bouformen 誌より　本多正道)

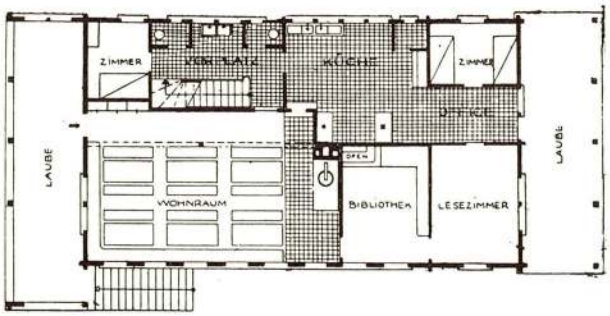
(スイス) 陸軍スキー小屋　建築家 **Max Keller**



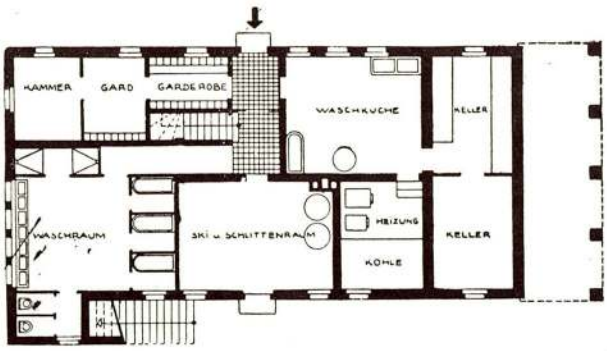
外　　觀

アメリカの一婦人によつてつくられたもので、國際的の團體であれば之を利用する事が出來る。收容人員 50～70 人、家事は少女等自身がする事になつてゐる。1 階は大浴室、洗面室、洗濯室、煖房汽罐室、地下物置等、2 階は居間、厨房、圖書室、讀書室、事務室等、3 階は寢室となつてゐる。

（Moderne Bauformen 誌より　本多正道）

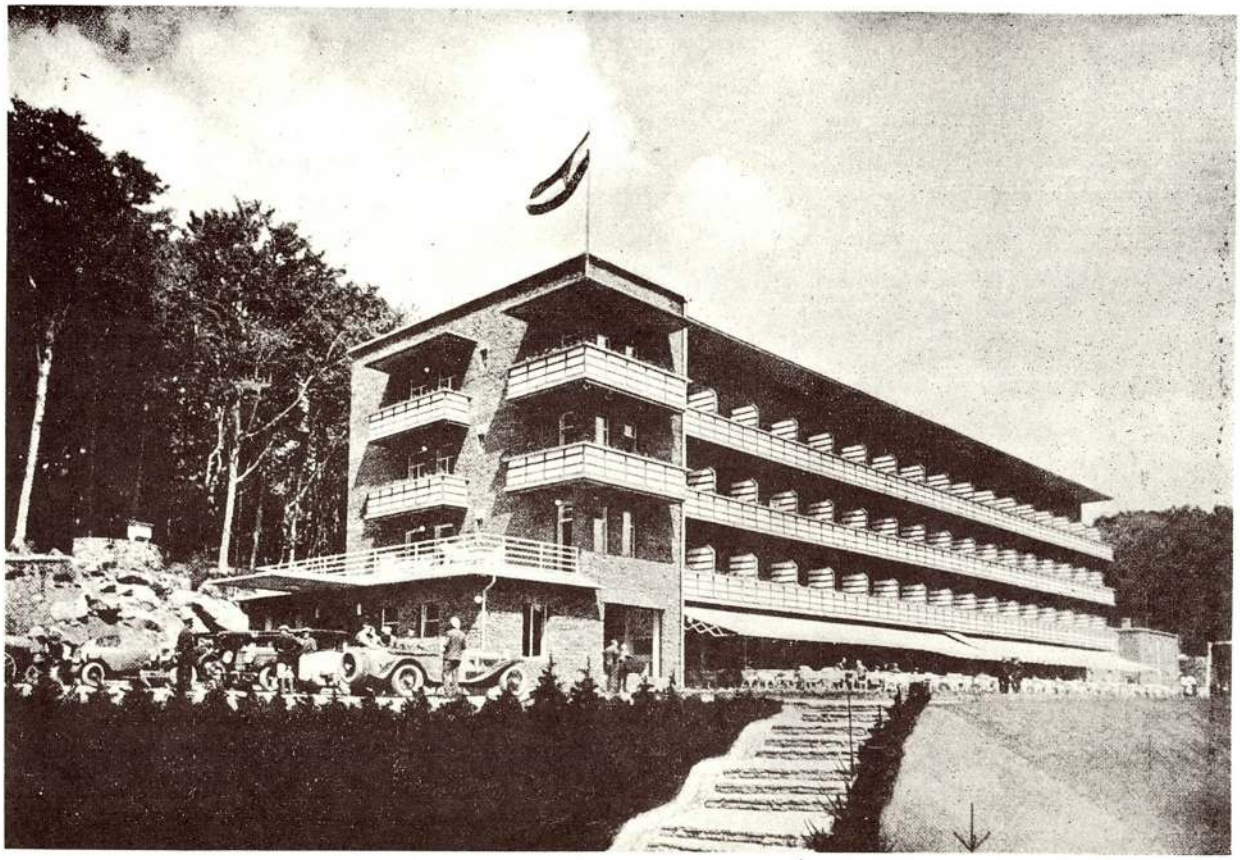


2 階平面圖



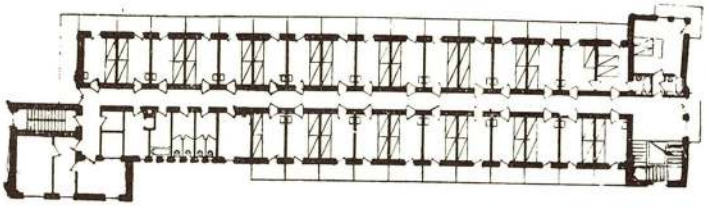
1 階平面圖

× 82　（スイス）ガール・スカウトのホーム　建築家 Von Sinner & Beyeler

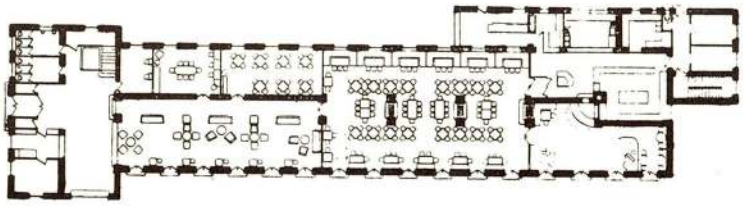


外　　觀

1,000m の高地にあつて 165 の寢臺
を有し、屋外プールの設備がある。
（Moderne Bauformen
誌より　本多正道）

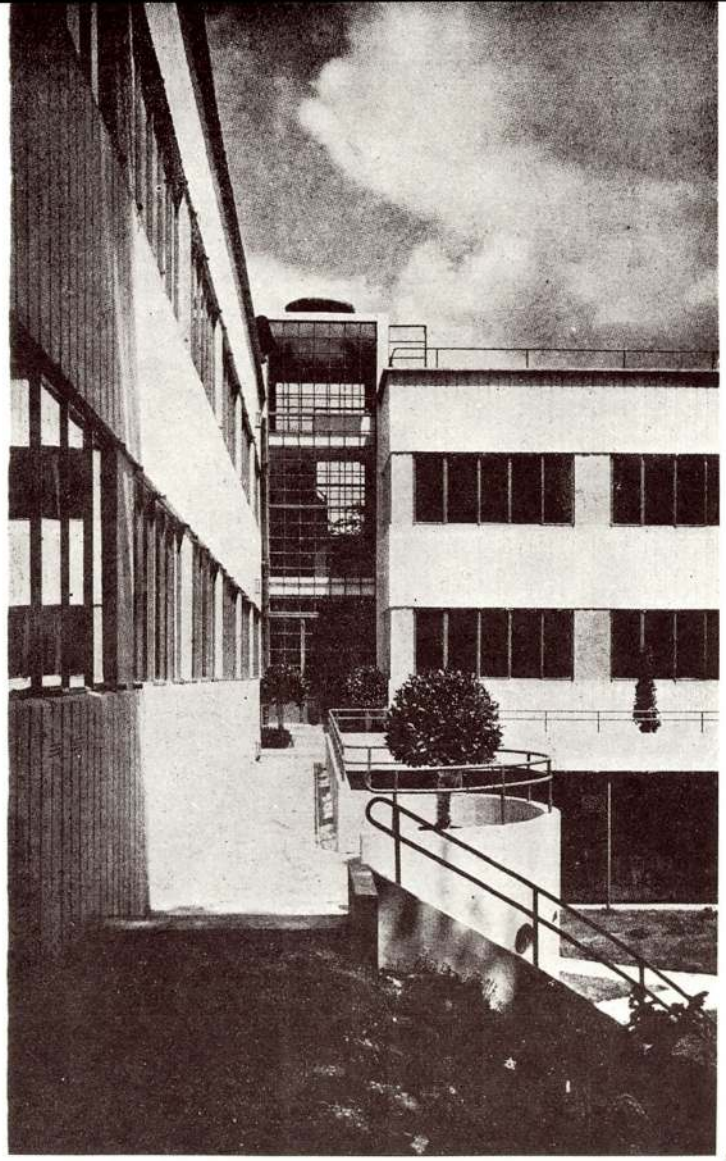


上階平面圖



1 階平面圖

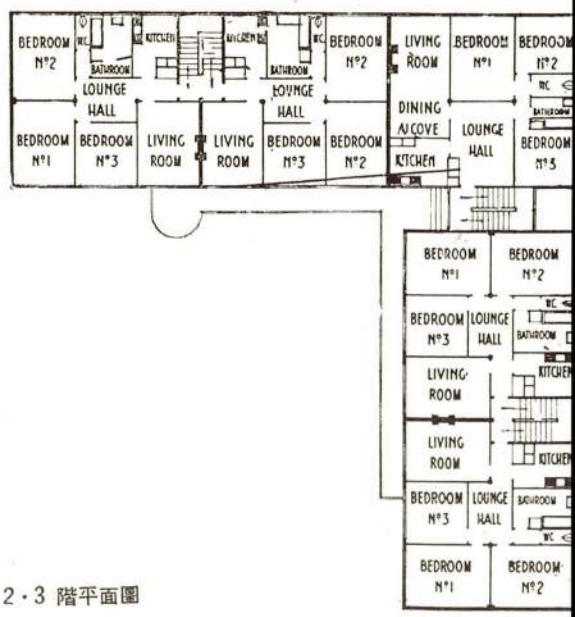
（ハンガリー）　マトラ山のスポーツホテル　　建築家　L. Csonka L. Miskolczy



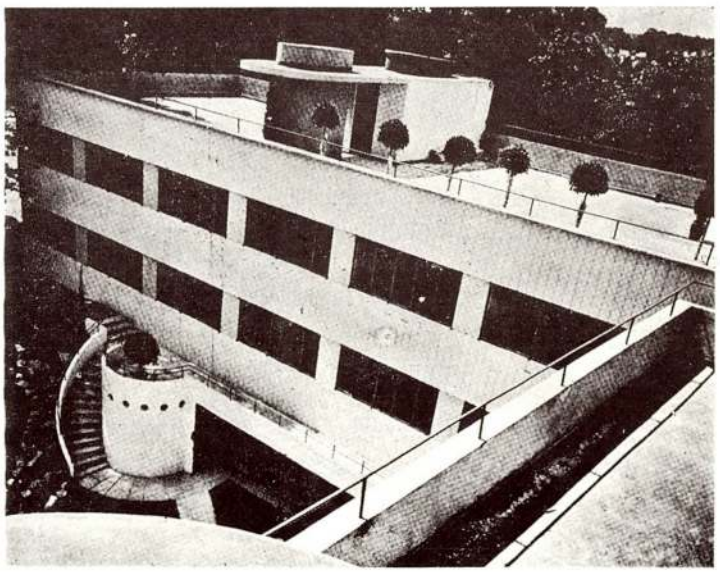
外　観

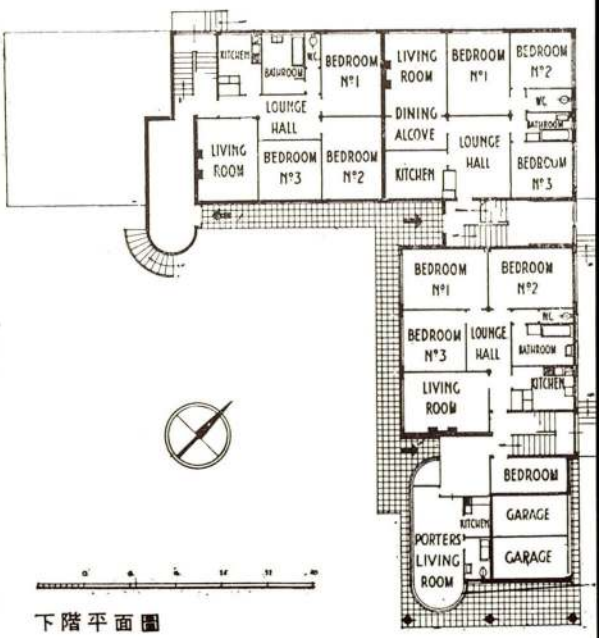
中流階級のアパートで、1 階 3 戸、2、3 階各 5 戸合計 13 戸、建築費 9,777 ポンド。

(The Architetural Review 誌より　本多正道)



2・3 階平面圖





下階平面圖

× 84　(イギリス) ゴールダース・グリーンのアパート　建築家　A. V. Pilichowski



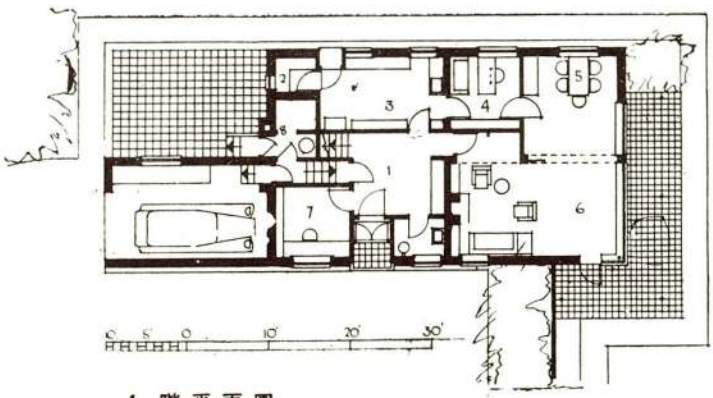
外　觀　壁體は中空煉瓦にクリーム色デイステンパー塗



2 階平面圖

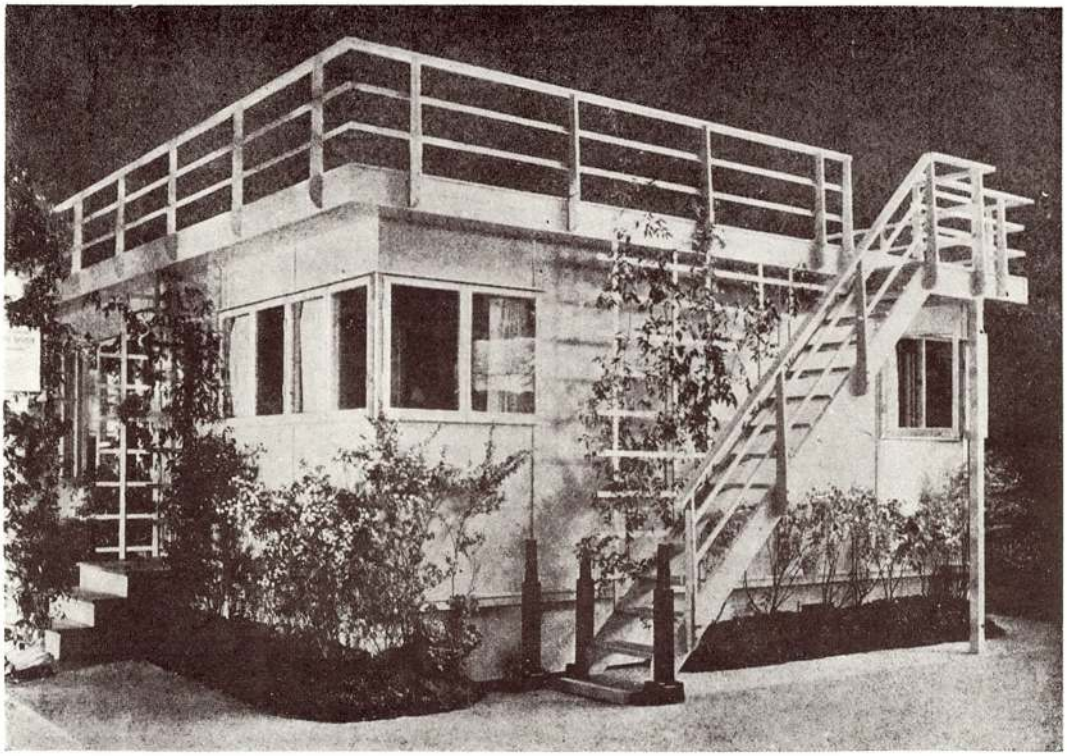
1. ホール　2. 食料品室
3. 臺　所　4. 女中室兼配膳室
5. 食　堂　6. 居　間
7. 研究室　8. ボイラー室
9. 客　間　10. 乳母室
11. 小供寢室　12. 小供室
13. 主人室　14. 衣裳室
15. 女中室

(The Architectural Review 誌より　本多正道)

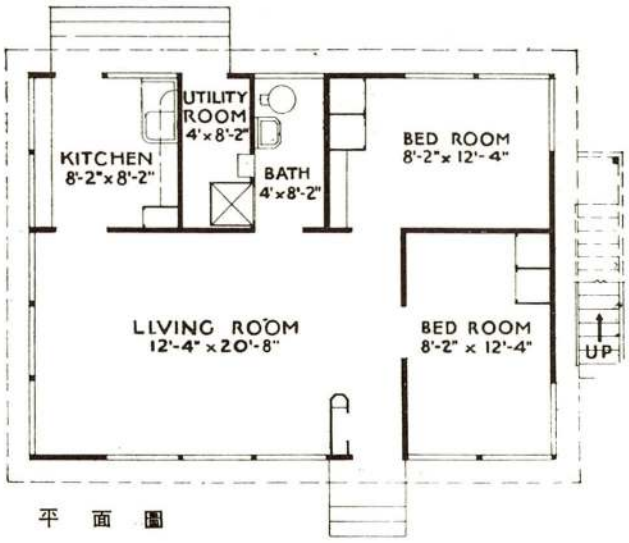


1 階平面圖

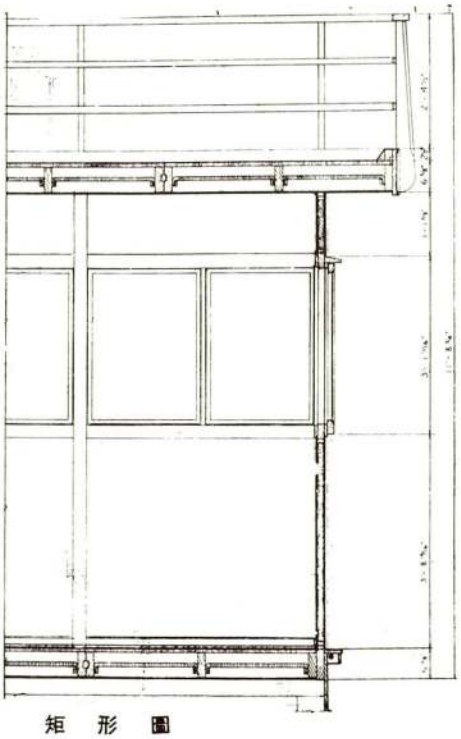
(イギリス) ジヨルダンの住宅　建築家　C. R. Crickmay



住宅外觀



平面圖

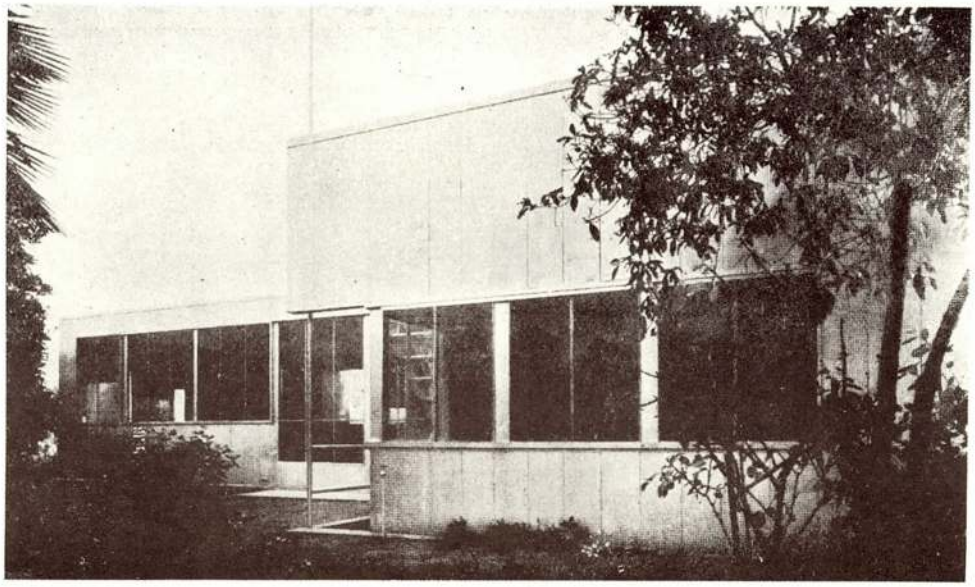


矩形圖

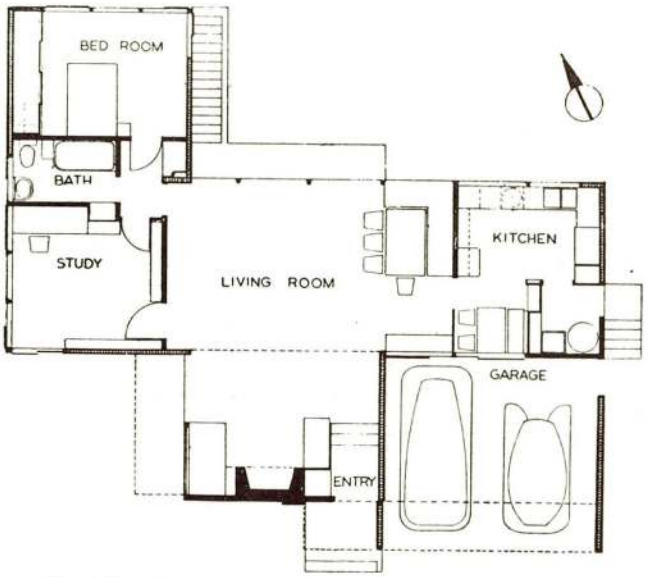
アメリカの林業研究所が、ウイスコンシン大學の協力の下にウイスコンシンのマデイソンに建てた木造組立住宅の1例である。極度にベニヤ板を使用し、床、壁、屋根等に至るまでベニヤ板を一定の大きさに組立てたものを巧に接ぎ合せて行くに過ぎない。屋根はやはりベニヤ板を接ぎ合せた陸屋根の上にルーフイングを敷く。寫眞は展覽の目的で作られた住宅の實物であるが、7人で21時間に完成したものである。簡式の乾式構造の1例として興味がある。

(Architectural Record 誌より　新名種夫)

× 86　(アメリカ)　木造組立住宅の1例



外　　觀

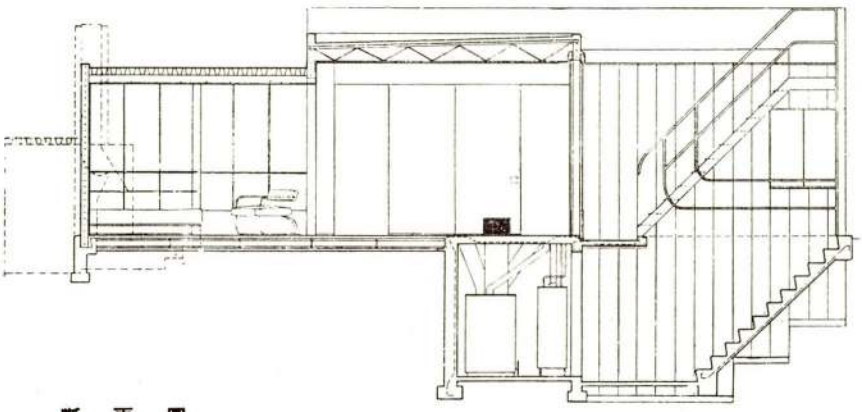


平　面　圖

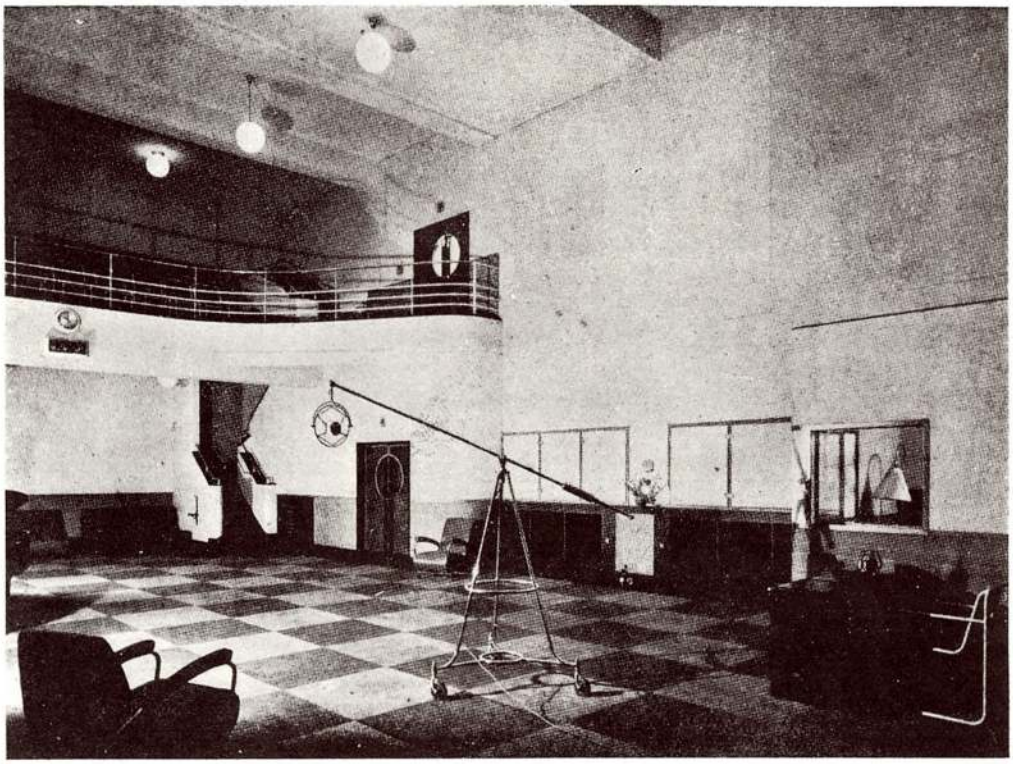
ロバートソン鋼の床用のスタンダートを横材は勿論、壁にまで使用した住宅である。壁材は斷面圖に見られる如く溝のある基礎の上に建てられ、壁材を建てた後防水セメントを以て固定せられる。壁の外面仕上も鋼鐵板を電氣熔接して使用して居る。屋根及床のスラブに2吋男のコンクリートを用ひたほか殆んど鋼鐵のみと言つていゝ。

外壁の日光が直射する部分には外部鋼板の下部に少さい空氣取入口を設け、日光にて壁が溫まると壁體の內部に對流が起り、室內に張れた防熱板に熱が出來るだけ傳はらぬ樣に工夫せられて居る。鋼鐵の市場型を巧に利用するノイトラの行方を極度に押し進めた彼の最近の作品の1つである。

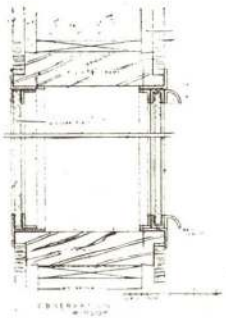
（Architectural Record 誌より　新名種夫）



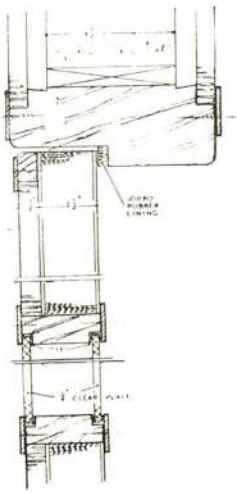
斷　面　圖



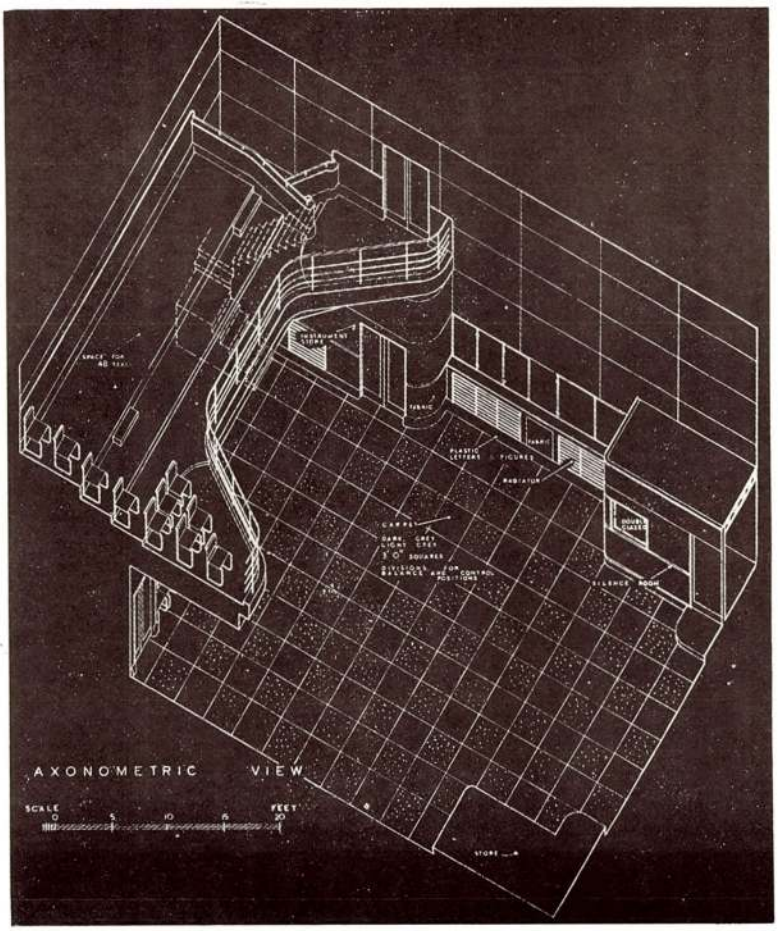
放　送　室



觀察窓詳細



扉　詳　細



放送室透視圖

×88　（イギリス）マンセスターの放送所　建築家　Raymond Mc Grath

會　　報

法制委員會（第5回）

時　　9月4日午後7時—9時
所　　建築倶樂部別室
出席者　委員長　津田
　　幹　事　坪井
　　委　員　山口　本田　板井

1 午後7時津田委員長座長となり開會
1 會長より照會に係る建築年鑑編輯委員2名選出の件は協議の結果下記2氏を推薦依頼す
　　幹　事　玉置豊次郎氏
　　同　　坪井　誠一氏
1 建築法規に關する質疑問題に付研究を進めたり

材料委員會（第12回）

時　　9月4日午後6時30分—8時
所　　建築材料陳列場別室
出席者　委員長　高橋
　　幹　事　浦　松久保
　　委　員　作間　高岡　高松　道田

1 午後6時30分高橋委員長座長となり開會
1 毎月定例日を第1第3木曜日に變更す
1 建築年鑑編輯委員として當委員會より下記2氏を選定す
　　委員長　高橋　榮治氏
　　幹　事　松久保敬三氏
1 昨年の風水害に對する瓦の研究を高松委員に一任すること
1 次回定例日に日本建材工業所工場を見學すること
1 定例日變更並工場見學日程を各委員に通知を發すること
1 次回よりセメント防水劑に付て研究を進むること

臨時總會

1 昭和10年9月5日大阪市北區中之島3ノ3朝日ビルデイングに於て臨時總會を開く
1 會員出席者下記24名

池田　實	伊藤　和夫
浦　英之助	岡部　顯則
大村　春方	片岡　安
加田　安彦	龜井幸次郎
北垣熊之介	島田　良馨
新名　種夫	清水　榮二
菅　陸二	住谷　慧秋
鈴木　孫市	田中　彌一
中澤誠一郎	內藤　亮一
中井新一郎	平野　忠雄
元吉勇太郎	山田　誠
山口久五郎	吉田　信武

1 午後6時10分開會會長理事片岡安議長となり去る9月3日臨時總會を招集したるも出席者定數80名に滿たざりし爲總會は成立せず依つて本日再度の招集をなし臨時總會を開く次第なり只今出席者24名なるも定款第24條但書により定數に依らず總會は成立したるものにして之より直ちに議事に入る旨を告げ尙本日の議案は豫て通知したる如く下記の件に付議したしとて議案に付大體の說明をなす

議案第1號定款一部改正に關する件

改正原案

第11條第1項中「18圓」とあるを「12圓」に改む

同條第2項中「9圓」とあるを「8圓」に改む

第12條第2項中「8圓」とあるを「6圓」に改む

但し本改正は昭和11年度より之を實施す

此の改正理由は主記より說明あることを告ぐ

1 次で中澤主記より改正理由下の通り說明あり本會の事業を將來益々進展せしむる爲には現在會員に加ふるに廣く新進氣鋭の人士を網羅するの要あり之が爲會費を値下げし新進の入會を容易ならしめんとす殊に本件に付ては昭和8年8月の評議員會に於て充分なる審議を經たるも實現に至らず此間多數會員の要もあり本案を提議する所以なり
1 是に於て議長より質問其他意見の發表を問ひたるもなし

次で池田氏發言權を得て

自分は本案の本文に付ては贊成なるも但書中「昭和11年度より」とあるを「認可の翌月よ

り」に修正したし右緊急動議として提議するものなりとて修正理由に付累々説明あり

1 次に中澤主記より原案の「昭和11年度より」としたる理由に付説明後龜井氏より原案賛成説あり

1 議長より右修正案の賛否に付採決したなるに賛成者なし從つて池田氏の修正案は自然消滅となる

1 議長より讀會省略し本案賛否の採決を爲す旨を告げ採決の結果異議者なく滿場一致原案を可決す

1 右にて總會終了の旨を議長より告げ閉會す時に午後7時

1 尙本議事錄の代表署名者に付議長より之を諮り下記2氏を指名す

伊藤　和夫氏　　龜井幸次郎氏

災害調査委員會（第17回）

時　　9月6日午後6時30分—8時30分

所　　建築倶樂部

出席者　委員長　波江

幹　事　黒田

委　員　玉置　中島　谷　本多　三浦　矢田

1 午後6時30分波江委員長座長となり開會

1 建築年鑑編輯委員2氏を當委員會より選出するにつき協議の結果下記の通決定

委員長　波江悌夫氏

幹　事　黒田　茂氏

1 次で關西風水害記錄作成に付協議し原稿未提出委員に至急提出ある樣督促すること

木材市場品規格調査委員會（第8回）

時　　9月10日午後6時30分—9時

所　　建築材料陳列場別室

出席者　幹　事　池　田　松久保

委　員　大阪材木商同業組合

黒澤　島田　後川　阪井　谷

丹藤　吉本

1 午後6時30分池田幹事座長となり開會

1 前回迄に審議決定したる規格案に對し各委員の最後的意見を照會したる處各委員より意見の申出あり（省略）再度全般に亘り愼重再檢討の上多少の修正を加へて決定

1 上記決定案を今一度各委員に配布し然る上會長に報告すること

1 午後9時散會

災害調査委員會（第18回）

時　　9月11日午後7時—9時

所　　建築倶樂部別室

出席者　委員長　波江

幹　事　黒田

委　員　淺野　玉置　鳥井　中島　谷　本田　矢田

1 阪大工學部主催關西風水害記念展覽會出品物に付協議の結果

(1) 先づ工學部に對し該展覽會出品依頼先を照會すること

(2) 先方の希望により今日迄調査蒐集したる書類を陳列すること

(3) 出品擔當委員を下記の通決定

波江委員長　黒田幹事　中島委員　淺野委員　矢田委員

1 災害調査委員會を9月21日夜開會すること

1 大阪府知事宛單行本を要求すること

教化委員會（第7回）

時　　9月12日午後6時10分—8時

所　　建築倶樂部

出席者　幹　事　篠原

委　員　伊東　高木　永澤　中野　堀口

1 篠原幹事より建築に關するフイルム目錄作成の爲に各關係方面に照會の結果を下記の通報告あり

本日迄に集まれるもの6ケ所47種類尙本月末位迄には相當集まるものと認む

1 實業教育振興委員會より照會の實業教育振興に關する意見を當委員會にて研究意見開陳に對し

(1) 文部省より諮問第1號に關し文部省より考慮を需むる事項全文を謄寫して至急各委員に配ること

(2) 右に關し各委員の意見を取纏め會長に答申すること

1 建築年鑑編輯委員は下記2委員を選出會長に報告すること

委員長　古宇田　實氏

委　員　永澤　毅一氏

住宅委員會（第9回）

時　　9月12日午後6時30分—9時
所　　建築倶樂部別室
出席者　幹　事　小川(安)　小川(陽)
　　委　員　赤松　岡本　小林　塚本　增山　本野

1 午後6時30分小川(安)幹事座長となり開會
1 本月は前回委員會の協議に基き天井に付て研究を始め種々檢討を加ふ
1 9月26日（第4木曜日）に臨時委員會を開き引續き天井について研究を進め成案を取纒めること
1 建築年鑑編輯委員として當委員會より下記2委員を選出會長に報告すること
　　委　員　　葛野壯一郎氏
　　委員長　　增山　新平氏
1 午後9時散會す



會員　加藤一俊氏

會員加藤一俊氏昭和10年8月25日病を以て逝かる寔に哀悼に堪へず茲に照肖と略歷を掲げ謹みて弔意を表す

加藤一俊氏は明治45年4月熊本縣立工業學校建築科入學大正4年3月同校卒業、同校入校時より往復6里の里程を徒歩にて通學し3年間無欠席努力の結果、1年終了の際は首席を以て級第し第2第3學年の時に於ては校則により特待生の待遇を受け爾來優等の成績にて卒業す、大正4年4月より同6年3月迄呉海軍建築課勤務、同6年4月より9年6月まで吉見紡績株式會社營繕課勤務、同9年7月より14年8月まで大阪内海組勤務、同14年9月より昭和7年6月まで大阪藤木工務店勤務昭和4年11月11日本協會會員として入會、昭和7年3月土木建築請負業開始、大阪土木建築業組合加入、右請負開業以來阪急夙川井上路治氏邸新築工事及阪急南郷山南氏邸新築工事其他20數ヶ所の工事を完了し終始一貫眞面目を以て從事し多大の信用をなしつゝあつた、昭和9年10月鮫の目會を組織し會長に當選今日に至る享年40歳

會員動靜

入會者

會　員

入山愛次良君　西宮市川東町88（合名會社竹中工務店）

地方會員

貞包　悦一君　小倉市室町1ノ42清水組出張所内（合資會社清水組博多支店）
金子　二郎君　福岡市上赤阪下警固702（合資會社清水組博多支店）
山中　正知君　松山市朝美町18（大阪鐵道局高松出張所保線掛）
森　　茂樹君　和歌山市小松原通5丁目中ノ丁（内海紡績株式會社建築部）

特別賛助員

青木　友一君　普通賛助員より變格

普通賛助員

岳　　磐君　福岡市鳥飼町3ノ191（合資會社清水組）
羽野　健作君　大牟田市室町1ノ31（合資會社清水組）

退會者

會　員

櫻田　文雄君　須川廉太郎君

普通賛助員

田中喜久雄君　長谷川眞雄君　元木德松君　秋田行雄君　下濵定一君　田中功君　山本德三君　和久井千吉君

轉居轉勤

會員

橋本　政一君　住吉區北田邊町35

小林市太郎君　鹿兒島市六日町８鹿兒島無盡支店新築場清水組出張所（合資會社清水組博多支店）

佐川伊佐夫君　西成區千本通4ノ1

堀田猷次郎君　三重縣四日市市千歲町　日本板硝子株式會社四日市工場建設事務所

尾崎　敬一君　長野縣大町伊藤忠商事大町紡績工場新築場東畑建築事務所出張所

木野　寅治君　岸和田市岸城町1755

渡邊　平君　住吉區住吉町1628

城塚　元義君　住吉區聖天下2ノ51

池田　忠治君　西區南堀江上通4ノ16

平川　節三君　兵庫縣武庫郡本山村岡本字中井140

地方會員

砂田　敏郎君　滿洲齊々哈爾第16師團司令部

加納　眞一君　兵庫縣川邊郡園田村字森塚口別莊3

遠藤　司君　岐阜市本庄溝畑新興人絹株式會社岐阜紡績工場監督事務所

井出　松藏君　八幡市八幡製鐵所構內大林組出張所

城下　政登君　三重縣富洲原町大林組出張所

眞田　益市君　東京市京橋區木挽町2ノ4矢島組內

櫻井謙二郎君　朝鮮咸北會寧邑大林組出張所

特別贊助員

伊藤　元君　西宮市外甲東園段上

普通贊助員

西田　義雄君　福岡市社家町 21 清水組博多支店（合資會社清水組）

水口庄太郎君　東成區腹見町603

白井　俊雄君　朝鮮京畿道永登浦邑キリンビール會社寄宿舍內

服部　正己君　神戸市灘區岸地通１丁目270ノ1

渡邊　定理君　北區東野田町７ノ26阪雅莊

馬上　進君　大正區鶴町４ノ161

藤元　助一君　横濱市鶴見區潮田榮町824

熊野　茂君　府下守口町土居147

須賀豐治郎君　西宮市森具新開273

兼子　秀男君　府下高槻町上田部90 6

渡邊　武男君　神戸市葺合區國香通１ノ27

小山田宗吾君　府下吹田町前野2799

浦野紋次郎君　東區安土町２丁目大日本紡績株式會社內

佐藤　佐七君　府下吹田町1084池村建築事務所內

改姓

普通贊助員　服部　正己君（舊姓和久）

本號執筆者紹介

（五十音順）

木津宗一	武者小路流家元　茶室建築家
北尾春道	茶室研究家
澤島英太郎	京都帝國大學建築學科卒、文部省宗教局國寶建築物調查室勤務
佐古慶三	希有文庫主、前大阪商科大學講師、商業史家
藤原義一	京都帝國大學建築學科卒、京大建築學科講師
吉田五十八	東京美術學校卒、吉田建築事務所主

編輯後記

◆「現代建築の精神は、結局我國古來の茶室建築の精神である」と。ブルノ・タウトの來朝と、小堀遠州に對する彼の絶讃とに依つて拍車をかけられた觀はあるが、新しい目を以て、我茶室建築の再檢討が盛に行はれ始めてから既に相當になる。

◆新人達の手になる、最近殊に多數の數寄屋風建築、數寄屋風建築集の發刊等、何れもこうした潮流の一つの表はれであると言へやう。

◆社寺建築や城廓建築の徒らなる模倣が、稍もすれば、建築に於ける日本精神の復興である如く誤解され勝な今日の建築界に於て、茶室建築を深く堀り下げて行くことはこうした誤を是正し、眞の日本精神を理解する上に役立つこと大なるものがあらう。

◆本誌10月號に「茶室建築」を選んだのは以上の如き意味に於ても大に意義あることゝ信ずる。

◆木津宗一氏、北尾春道氏、藤原義一氏、澤島英太郎氏、吉田五十八氏、佐古慶三氏より何れも多くの資料を提供せられ、豐富なる實例を以て本號の內容を充實し得たことは、編輯として感謝の至である。

◆來月號の「停車場」を本年度特輯の最後として 12 月號は常設委員會の報告號とする

◆本年の特輯の跡を顧み、來年度の編輯の方針を立てゝおく爲に此際會員の御意見のある所を聞き度いと思ふ。（新名）

建築と社會

第18輯第10號

毎月1回1日發行　定價　1册 .50圓(郵稅2錢)　12册 6.00圓(同 24 錢)

昭和10年9月25日印刷　昭和10年10月1日發行

發行・編輯兼印刷人　小板常男
大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　大阪活版所
大阪市東區內淡路町1丁目7番地

發行所　財團法人 日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長本局(23)4500番(6)
振替口座大阪 39975番

特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋西
電話土佐堀 2440番
振替口座大阪 2084番

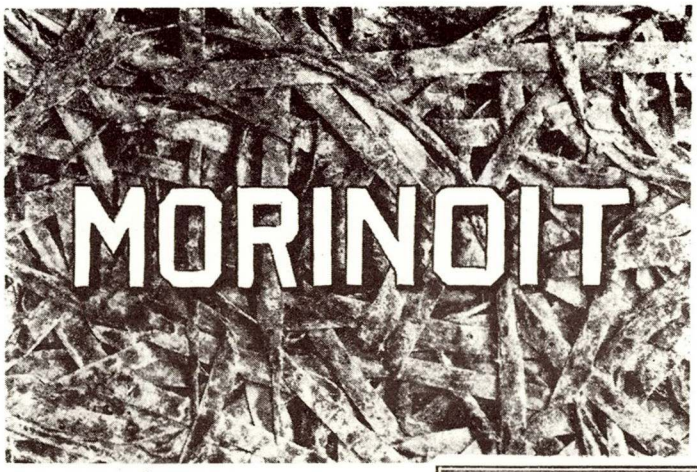
禁轉載

本號に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	1/2頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中插）	1/2頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係業者案內）	1欄	1回	5.00

廣告掲載御申込は本會直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

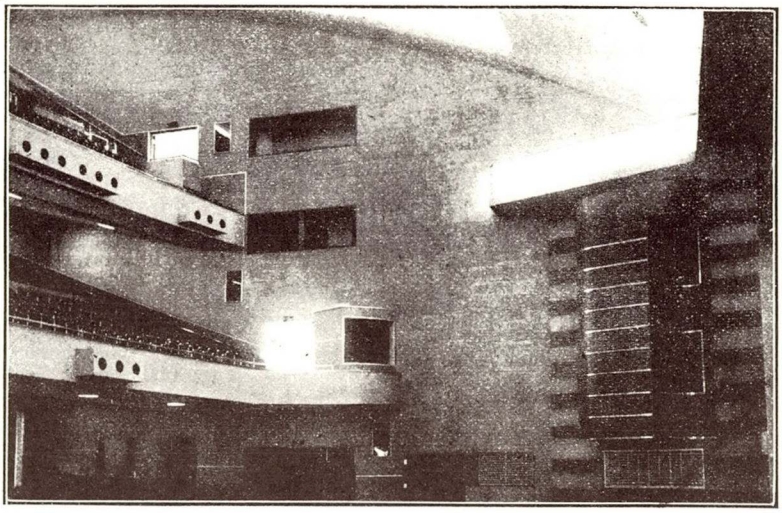


防火、防音の建築材料

（絶對不燃燒）

規格　長6尺　幅1.5尺

厚　　各　　種



寶塚大劇場
内壁モリノイト張

（御申越次第カタログ贈呈）

專賣特許　モリノイト保温盤

本品の特長

1. 温熱の遮斷完全、暑寒の温度の室内侵入を防ぐ
2. 防火完全、如何なる火焔に對しても燃燒せず
3. 音響侵入防止として、唯一の壁材天井材なり
4. 耐震材料として、彈力性を保有し、堅牢、龜裂の虞れ全くなし
5. 工作迅速、使用簡易、建物のあらゆる個所に使用自由自在
6. 價額絶對低廉

專賣特許耐火保温建築材料
モリノイト保温盤

專賣特許セメント防水劑
ウオータイト
ウオープロー

急結防水劑
クキックウオータイト

發賣元　**日本セメント防水劑製造所**

大阪出張所

大阪市西區京町堀上通1目丁（京町ビル）

電話土佐堀437・自7950 至7955番

本　社　神戸市灘區大石15（電話葺合947番）

建築材料陳列場出品者

棚番號	材料種別	出品者
1・6	鋼製建具建築材料	三機工業株式會社
2～4	ギルソイドルーフキング	田島應用化學工業所
2～4	エターナイト	木下謹三商店
5	合板寄木フローリング	富士建築工藝株式會社
7	リノリユーム其他附屬品	東洋リノリユーム株式會社
8～9	六甲スレート日本石綿盤六甲タイル	野澤幸三郎商店
10	トラバーチン	金王石工所
11	ロールプラッグストツプリーグ	ユニオントレーヂングコンパニー
12	チツソライト板	日本窒素肥料株式會社
13～14	銅眞鍮アルミニウム	古河電氣工業株式會社
15	特許能美式自働火災警報裝置及消火裝置其他	合資會社能美商會
16	衛生器具	大阪城口研究所
17	衛生器具	株式會社須賀商會
18	衛生器具	西原衛生工業所
19	テツクス、コルク板、ルーフイング、スレート	佐藤合名會社
20～21	衛生陶器附屬品	東洋陶器株式會社大阪出張所
22	銅鐵製窓枠	榮進社大阪出張所
23	內裝用藥掛タイル	淡陶株式會社大阪支店
24	カールプラグ及カールエキスパンシヨンボールト	合名會社小野逞三商店
25	タイル	山本窯業商店
26	各種タイルテラカツター	大阪窯業株式會社
27～28	テラカツター衛生陶器	大阪陶業株式會社
29	タイル	有田製陶所
30	洋家具裝飾	船木由松商店
31	テラカツタータイル等	伊奈製陶株式會社
32	金庫寫眞カタログ	大谷金庫店
33	硝子製品、旭ラツカー	旭硝子株式會社
34	ドアーチエツク、フロアーヒンヂ、スプリングヒンヂ	日本ドアーチエツク製作所
35	町野式水道消防器具	ヂヨイント商會大阪支店
36	ドアーハンガー	平松釣戸車製造所
37	建具金物	近江セールズ株式會社
38	大理石及人造石	矢橋大理石商店
39	大理石	大理石工業株式會社
40	建築參考塗料見本	關西ペイント株式會社
41	木工品	日本樂器製造株式會社大阪支店
42～43	建築用金屬材料ホワイトブロンズ水道鋼管	住友伸銅鋼管株式會社
44	プリズム硝子、鑄造硝子、彫刻硝子其他各種建築用硝子	岩城硝子製造所
45～46	ラス類一式	奥村重兵衛商店
47	スチールサツシユ、シヤツター見本	合名會社汎建製作所
48	板硝子	日本板硝子株式會社
49	ケンテキス	淺野物產株式會社建材部
50	建建金物	大塚定治郎商店
51	ベニヤ板及加工品	ベニヤ商會
52	金屬天井板	佐渡島西店建材部
53	各種マーブリツク	守谷建材株式會社大阪支店
54	一般石材	關西石材株式會社
55	石綿スレート	淺野スレート株式會社
56		
57	オリエンタルメタル浪板	オリエンタルメタル製造所
58	ベニヤ板見本ドアーセクシヨン	內外木材工藝株式會社
59	專賣特許特殊ゴム床敷物	ライトラバー工業合資會社
60	田中式カストストーン	合名會社田中タイリング商會
61	アスフアルト	榎商店
62	屋根瓦各種	高松菊治郎商店
63	ルーフキング	佐久間パブコ工業株式會社
64～65	キングブロックアスフアルト鐵鋼類	マルエス工業株式會社
66	纖維製絕緣板、エールテツクス	株式會社大同洋紙店
67	建築諸材料	合資會社建材社
68	セメント防水劑モリノイト保溫盤ウオータイト	日本セメント防水劑製造所
69	防水劑ロータス	關城化學工業株式會社大阪營業所
70	スカイライト、エービーメタル	內外土木建築材料合資會社
71	日之出アスフアルト加工品	日本建築紙工大支店
72	硝子製品	株式會社島田硝子製造所
73 A	洋瓦各種	宇野洋瓦株式會社
B. 1		
B. 2	美　素	美素工業所
B. 3	清光塗料　其他	清光社
B. 4	人造大理石	旭マーブル研究所
C D. 1	ステインレス、スチール及グラナイト	モンソン商會

建築と社會第18輯第10號　廣告索引

ア　有田製陶所……25
　旭硝子株式會社……13
　朝日建材株式會社……表紙 2
　淺野スレート株式會社……17
　淺海商會……40
イ　岩元商店建材部……40
エ　榮進社……30
　英進商會建材部……44
　荏原製作所……6
オ　大阪窯業セメント株式會社……中挿
　大阪伊丹商店……16
　大阪組立コンクリート製作所……34
　大野製作所……前附 1
　奥村重兵衛商店……37
　大阪アスファルト商會……5
カ　勝田風呂製作所……表紙 4
　金岡養樹園……中挿
キ　木下謹三商店……18
　桐田商會……41
　協和製作所營業部……34
ク　黒川化學工業所……19
　久保商店……32
　窪島プレス工業所……9
コ　後藤商店……16
　工英社……48・49
サ　佐渡島西店……22
　佐久間パプコ工業株式會社……26
　坂本商會大阪支店……12
　坂田ベンチレーター製作所……10
シ　島貿易株式會社建材部……8
ス　須賀商會……21
セ　政正合資會社……14
　清光社……32
タ　大同洋紙店……7
　田島應用化學工業所大阪支店……50
　大洋組建材部……38
　ダンロップ護謨株式會社……中挿
　タカラ商會……27
チ　チヨーホー商會……10
ト　東洋リノリユーム株式會社……24
ナ　内外土木建築材料合資會社……42
　南滿鑛業株式會社……38
　中井商店大阪支店……47
ニ　日本建築紙工株式會社……14
　日本パイプ製造株式會社……23
　日本セメント防水劑製造所……中附4
　日本ドアーチエツク製作所……46
　日本窒素肥料株式會社……表紙 3
　日本洋瓦株式會社……15
　西原衛生工業所……31
　西孫南店建築金物部……27
ノ　野澤幸三郎商店……28
ハ　汎建製作所……25
ヒ　日立製作所……11
　美素工業所……前附 3
フ　福島合名會社……29
　福原商店……45
マ　マルエス工業株式會社……20
　松井商店……19
　松信工業社……12
ミ　三井物産株式會社……35
ヤ　矢橋大理石商店……36
　大和護謨製作所……33
　山本窯業商店……45
ヨ　横河橋梁製作所……39
　米本榮商店……36
ラ　ライトラバー工業合資會社……43
レ　玲光社(木内眞太郎)……29